前條ノ物品荷主又ハ引請人其引取リヲ怠ルトキハ稅關長之レヲ海濱或ハ海上安全ナル場所ニ移置スルコトヲ得ヘシ此運賃及貯藏ノ費用ハ假令高直ニ當ルトモ荷主又ハ引請人之ヲ償ハサルコトヲ得ス

第十一條

一切ノ貨物稅關境內路上ニ差置ク可カラス馬或ハ車ノ如キモ亦其往來ヲ塞ク丶許サス

第十二條

稅關又ハ上屋又ハ借庫ノ內ニ於テ吹煙スルコト嚴禁タリ

右規則ノ條々ハ明治十一年一月一日ヨリ取行フモノ也

大阪稅關

三十九、內許免狀書式改正の通知　十七年十二月神戶稅關より從來上屋係より交付せる船積貨物內許免狀の書式改正を通知せり大阪稅關をして又之れに倣はしむ

從來當關上屋懸ヨリ貴港へ差出來候船移品內許免狀ハ監吏補ニテ相用居候書式ヲ以テ代用致來候處往々不都合之廉有之候ニ付以後ハ別紙ノ書式ニ相改候間此段爲念申進置候也

十七年十二月六日

神戶稅關　檢查課

大阪稅關
歌查課御中

記

第　號　　國

內國小廻船へ

✿ノ內　　船ヨリ

荷主

右內卸ニ付船移免狀皆濟迄預リ置大阪稅關迄積送見屆候也

明治　年　月　日

神戶稅關

上屋掛

ロ、借庫

四十、庶庫(庫租及棟數)　上屋規則中の明文に基き茲に借庫及備庫規則に據らさる倉庫卽ち庶庫の必要を見ると雖も當時運上所々屬の倉庫中之れに適用すへき設備なきを以て借庫の一部を利用せんと欲し租稅寮の承認を經んか爲め遂に五年十一月左の稟議を爲せり

瓜生　厚東　屬

當今各港運上所上屋規則御取設ケニ付右規則ニ相戻リ荷物不引取候節ハ運上所ヨリ直ニ假庫へ引移候樣揭示有之候處大阪ニ於テハ右へ可引當假庫無之何レ一棟御營繕不相成テハ彼是御不體裁ニ

可有之然ルニ從來借庫三棟有之候得共昨年幷ニ今年モ同樣借庫ニ積入候荷物尠ク其半餘ハ空席ニ候間右三棟之內一棟更ニ假庫名目ニシテ其當用相辨シ猶其餘地有之分ハ其時々相當ノ敷料取立貸渡候樣致シ度然ル時ハ臨時營繕ノ費ヲ省キ且ツ廢物同樣ノ借庫ヲ活用致シ候義ニ付旁々以御辨理ニ可有之依テ圖面相添此段相伺候也

壬申十一月十一日

陸奥租稅頭殿

厚東樹臣

瓜生寅

越へて六年一月租稅寮より承諾を與へ大阪港稅關ニ假庫無之ニ付從來存在ノ借庫ノ內一棟更ニ假庫名稱ニシテ辨用被致度旨舊年十一月中御申出之通許可相成候條此段御達申入候也

六年一月九日

陸奥租稅頭

瓜生寅殿

厚東・樹臣殿

此の承認を得るとともに運上所は直ちに從來の借庫三棟の中第三、四、五の三戶前一棟を以て借庫規則以外相當の藏舖料を徵し貨物の藏置に任せんことを在留各國領事に通知し後十月二十五日を以て來月一日を期し更らに殘餘の借庫二棟の中第二號二戶前一棟をも併せて庶庫に宛用せんことを通知せり而して此所謂假庫に於て徵せる庫租の率は果して幾許なりしや今俄かに知り易からずと雖も當時當事者か市中及居留地に於ける庫敷料を調査して報告せる處に據れは一坪一ヶ月金七拾五錢同階上四拾錢なりといへは所謂假庫の庫租の率も亦此範圍を超へさりしや明なり後降つて十五六年の交規定せる庶庫略則に據れは其要を盡すに足れり

庶庫略則

一庶庫ハ火藥硝石精石炭油タルヒツチ或ハ爆發スヘキモノ又ハ燃發スヘキモノ又ハ燃易キモノ其他危害ナルモノ等ヲ除クノ外其餘ノ品ハ有稅無稅ニ關ラス一切入庫スルヲ得ヘシ

一壹棟或ハ壹區ヲ借請ル向ハ鑰鍵ハ其借主ニ貸渡スヘシ

一壹棟或ハ壹區ヲ借請ケス唯其坪借ノ向ハ內外戶ノ鑰鍵共稅關ニ管シ且他ノ借主ノ貨物ト壹區內ニ混入スルヲ以テ其借主ノ請求ニ應シ入庫セシ箇數ノ見屆證書ハ稅關ヨリ付與スヘシ最入庫ノ時包箱ノ外面聊カタリトモ破損セルハ之ヲ調製シ又之ヲ固封スルニ非サレハ其見屆ケ證書ヲ付與セサルヘシ

一入庫中貨物危難ノ請負ハ勿論損傷及ヒ紛失等ニ至ル迄一切其借主之引請ニシテ稅關ニテハ更ニ關係ナカルヘシ

一庶庫ノ開閉ハ每日日出ヨリ日沒ヲ以テ限トス其時間ニ貨物出入スルハ其借主ノ隨意タルヘシ

一敷料ハ一ケ月一坪ニ付四十五セントノ割合ヲ以テ之ヲ納ムヘシ

但シ端日數ハ十五日內外ヲ以テ全月半月ヲ區分スヘシ

一若シ稅關ニテ庶庫要用ノ事アラハ一ケ月前ニ其旨借主ニ報知スヘシ其期に至ラハ返却遲滯スヘカラス

（裏書）

拙者所有ノ左件ノ荷物ヲ貯藏スル爲（何年何月何日ヨリ何月何日迄何ケ月間）稅關棚內ニアル第6・7號ト記號サレタル庶庫（何坪）御貸渡シ被降度尤裏面ニ記載有之條件ハ堅ク相守可申候此段奉願候以上

願主

税關長官貴下

整第二百六十號

客月十六日整第二百三號付ヲ以テ借庫及ヒ借庫規則ニ據ラス御貸渡ノ倉庫棟數坪數等取調方當部長ヨリ及御照會置候處今ニ何等御回答無之調査上差支居候ニ付右至急御差回相成候樣致度此段及御催促候也

明治十八年五月七日

大阪税關御中

主税局第一部
整理課

而して税關の回答は左の如し

第二十五號

當關倉庫棟數坪數別紙之通ニ有之候條乍延引及御通知候從前當港ニハ本借庫無之皆庶庫ノ名テ以テ棟貸等致候此段爲念申添候也

明治十八年五月十一日

大阪税關

主税局第一部
整理課御中

大阪税關倉庫棟數及坪數

第一號　庶庫　壹棟　五拾坪
第二號　同　同　同
第二、三、四號　同　同　百貳拾五坪

第六、七號　同　同　參拾貳坪
第八號　同　同　貳拾八坪

右五棟借庫規則ニ據ラス貸渡候分

火藥庫　壹棟　六拾坪

右

四十一、借庫增設の計畫及落成　十三年十月借庫增設の計畫を爲して曰

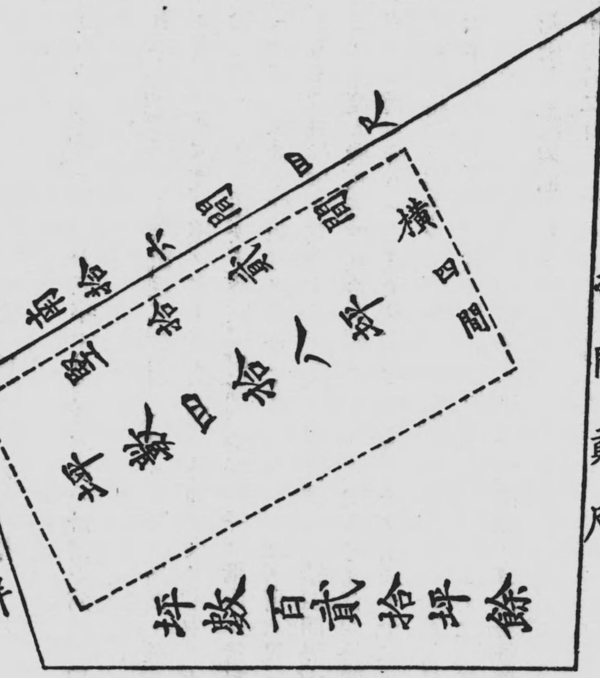
第百四十一號

當關裏手ノ空地（當時商船學校ノ一時貸渡ノ處）凡坪數百貳拾餘坪ハ現ニ當關ノ所屬ト雖モ從來不用ニ屬シ候ヨリ終ニ茫々タル草ヲ生シ自然不潔ヲ釀シ之カ爲メ當關ノ外觀ヲ失フ事少ナカラス如此貴重ノ地所ヲシテ空シク捨置候モ實ニ無益ノ至リト存候間何卒該地所ニ一ノ借庫ヲ造築シ之ヲ居留人民ニ貸與致度左スレハ大ニ當關ノ体裁モ宜敷且ツ其益モ亦不尠殊ニ當地居留人民ニ於ケルモ久敷其便利ヲ希望致シ居リ候義ニモ御座候依テ其方法ヲ左ニ致概陳候譬ヘハ横四間竪十二間ノ築造トシテ此坪數四十八坪但一坪ノ建築入費凡紙幣貳拾圓積ニシテ惣入費紙幣九百六拾圓ナリ落成ノ後一坪ニ付金參拾五錢宛ノ割ヲ以貸ス時ハ一ヶ月金拾六圓八拾錢ヲ以年々ノ修繕費ト見做シ引去其殘額金百九拾貳圓之ヲ五ヶ年分積置時ハ合計金九百六拾圓之レ則チ先ニ費ス所ノ紙幣呼高ト同額ナリ尤之ヲ紙幣相場ニ引直ストキニ凡ソ三ヶ年餘ニシテ元金全得スルノ理ニ相當リ可申旁以前顯ノ方法至急御施行相成候樣致度依テ別紙略圖相添へ此段及上陳候也

明治十三年十二月二日

税關長　高橋新吉殿

大阪税關



然れとも當時經費多端の故を以て遂に此計畫を許さゝりしと雖も後三十一年二月に至り該地積をト

し現在の上屋の建設を見るに至れり是より先、十六年十月輸出入貨物の集散日に月に活潑となり自然貨物藏置保管の設備急を要するものあるを以て遂に左の上申を爲し倉庫增設の事を請求す

借庫貳棟建築之義ニ付上請

當關借庫之義ハ從來其數僅少ニシテ近來本港輸出入貨物モ此數年前ニ比セハ增加致居隨テ之ヲ貯藏スヘキ倉庫ニ欠乏ヲ生シ本港居留外人ノ大部分ヲ占ムル淸國人等殊ニ當節ニ於テハ借庫建築ノ義ヲ熱望シ即願書差出來リ其次第モ有之候ニ付豫シメ借庫貳棟築造ノ見込ヲ以テ右費金償却ノ目途等ヲ概算候處煉瓦石借庫貳棟此坪數百八十七坪五合一坪ニ付五拾兩ト見込惣計金九千參百七五拾圓ヲ以テ皆出來可致右費用償却ノ道ニ至リテハ別紙概算書ノ如ク大約六ヶ年五ヶ月ニテ相終リ築造ノ後二十ケ年ハ修繕ヲ要スルコトナシ尤モ地所ノ義ハ當關上屋裏ニ空地有之衆テ其地ハ官舍建築ノ目論見モ有之場所ナレトモ此ヲ以テ彼ニ引換ユレハ稅關ニ接シ居倉庫ハ至極適當ノ地所ナレハ倉庫常ニ空虛ナルコトナク其建築費金償却方モ見込ノ如ク好都合ヲ可得必然後來ニハ政府ノ御利益ト見込候尤新庫建築ニ付在來ノ書物庫引移費貳百八拾圓最後費用惣計九千六百五拾五圓ヲ以テ右建築幷ニ在來ノ庫引移ノ義御許可相成候樣致度別紙概算見積書等相添此段及上請候也

（別紙省略）

明治十六年十月

大阪稅關長　顯川君平

關稅局長　中野健明殿

これに對し主稅局より該工事は十八年度に於て起工すへく指令せるを以て更らに設計を變更し先つ一棟を十八年に於て同二十年三月に於て一棟を共に新築竣工せしめ現に七號八號と稱する煉瓦造借

庫即ち是なり左に現在の借庫及上屋を示せは左の如し

所在地	建物番號	名稱	構造	坪數 一階	坪數 平屋	建築年月 價格	修繕期限	保存期限
大阪市北區富島町四番地	八	借庫	煉化造		八七、五〇坪	十九年五月 三、三五二、六〇三	明治三十八年	明治四十六年
同	九	同	同		一〇一、七五	二十年三月 三、八五二、八〇〇	同 三十九年	同 四十七年
同	十	同	土藏造	三四、〇〇坪		八年二月 一、〇五二、一三六	同 三十五年	同 三十九年
同 四番五番地	十一	同	同	一二五、〇〇		元年五月 四、一五二、三六四	同 三十三年	同 三十七年
同 五番地	十二	同	同	五〇、〇〇		元年五月 二、〇六二、〇〇〇	同 三十三年	同 三十七年
同 一番地ノ内	十五	上屋	木造		一六五、〇〇	三十一年三月 四、〇〇八、一〇〇	同 四十年	同 五十年
同西區田中新田ノ内二番地	一	火藥庫	煉化造		六〇、〇〇	三十年三月 三、二九二、八〇〇	同 三十八年	同 四十六年

四十二、庫租　十六年八月大阪稅關所屬倉庫之辨と題し時の會計檢査官に撰出せる一篇は當時庫租徵收の實況を知るに最も便なるを以て左に之を掲く

大阪稅關所屬倉庫之辨

一庶庫五棟是ヲ區分シテ八戸前トス即チ第一號ヨリ八號ニ至ル

右之中一號ヨリ七號迄庫租一ケ月一坪ニ付洋銀四拾セントニテ貸渡期限ハ一ケ年ヲ超ユ可カラス又六ケ月以上借用スルモノハ一坪ニ付參拾五セントニ低減セリ

第八號庶庫ハ其構造等總テ他七戸ニ比スレハ粗惡ナルヲ以テ庫租一ケ月一坪ニ付洋銀貳拾五セントト定ム此分期限長短ニ付敷料變化ナシ

一上屋入貨物二十四時間中引取ラサルトキハ假リ庫ニ移シ定則ノ敷料可取立筈ノ處當港ニハ前條述ル如ク期限ヲ定メ八戸倉庫ヲ棟貸シ或ハ戸前貸シ等致セル後ハ假庫トシテ備ヘ置キタルモノ無之ニ付上屋内ヘ置据ヘノ儘時間超過ノ日ヨリ一ケ月一坪ニ付洋銀四拾セントノ割ヲ以テ敷料徵收シ來レリ尤日數十五日未滿ナレハ半ケ月等ノ割合ナリ

一火藥庫ハ田中新田ニ在リ一棟ニテ三戸ナリ右敷料火藥ハ一噸ニ付一ケ月洋銀三弗五拾セント早合ハ一噸ニ付貳弗貳拾五セントナリ右稅濟未納稅品ニ係ラス庫出シノ時ニ敷料ヲ徵收ス尤敷年月連續貯藏スルモノハ一ケ年毎ニ敷料ヲ計算徵收ス

右ハ先前關長ノ定ニ由リ現今ニ至リテモ實施致シ居候也

十六年八月

大阪稅關
四等屬　内田光敎

會計檢査官
石川敬直　殿

當時庫租徵收に對する日數の計算は常に十五ケ日未滿のものは其日數の多少に拘らず半ケ月分を以てし又十六ケ日以上なれは一ケ月分を以てせり而して後稅關倉庫の增設と共に稅關附近に於ける民設の倉庫亦增加せるを以て自然庫租收入の上に影響を及はさんとするものあるを以て茲に長期借用の庫租に對し左の改正を行へり即ち

昨年新築相成候常關煉瓦造ノ倉庫拾號拾壹號ノ兩戸前ハ去十二月中迄清商裕貞祥ヘ貸與置候處同人商業決算ノ都合ニヨリ尚三ケ月間借受度旨願出候得共從來當關倉庫棟貸シノ分ハ願出ノ月數六ケ月前後ヲ以テ庫租ニ差等相立候慣例ナレハ該新築ノ倉庫モ在來ノ倉庫同樣願出月數ノ長短ニ依リ是又庫租ニ差等相立申度就テハ新築ノ分ハ構造モ堅固ニ有之旁六ケ月以上ハ坪五拾五錢六ケ月

以下ハ坪六十五錢位ニ取極ノ度候得共近來當關近傍ニ民設ノ倉庫追々增加シ自然當關倉庫貸付方ニ影響ヲ及ス哉ノ懸念モ有之候間新築ノ分ハ坪五拾五錢ト六拾錢ヲ以テ差等相立置申度別紙相添此段相伺候也

明治二十年一月六日

稅關長　顯川君平殿

（別紙）

庶庫敷料

二階建土藏倉庫

從壹號至七號	六ヶ月以下	一ヶ月	坪四十セント
	六ヶ月以上	一ヶ月	坪三十五セント

平屋建土藏倉庫

八號	六ヶ月以下	一ヶ月	坪三十五セント
	六ヶ月以上	一ヶ月	坪三十セント

平屋建煉瓦造倉庫

從九號至十一號	六ヶ月以下	一ヶ月	坪六四十セント
	六ヶ月以上	一ヶ月	坪五十五セント

是れに對し關長は直ちに許可の指令を與へ後二十一年一月更らに庫租減額の事を決し當關煉瓦造倉庫敷料ノ義六ヶ月以上貸渡候分ハ一坪ニ付一ヶ月金五拾五錢六ヶ月以下ノ分ハ同六拾錢ノ割ヲ以テ是迄庫稅可立來候處先程來敷料不廉ノ趣申立借主追々減却候ニ付爲念當關近傍民有倉庫ノ敷料問合セ候處一坪ニ付一ヶ月大概貳拾錢前後ニシテ當關敷料ノ殆ント三分一ニ有之加之昨今當關近傍ヘ民設ノ倉庫增加ノ景況ニ付此際減租ノ御所分無之而ハ竟ニ借主無之樣可相成ト愚考仕候付テハ六ヶ月以上貸渡シ候者ヘハ一坪ニ付一ヶ月金四拾錢同六ヶ月以下ノ者ヘハ四拾五錢ノ割ヲ以テ御貸渡シ相成候樣御改正有之候ニ付此段相伺候也

二十一年一月二十三日

稅關長　顯川君平殿

（右指令）

伺之趣聞屆ク

明治二十一年一月二十五日

右指令に據りて減額せる改正庫租の割合は左の如し

一煉瓦築造	六ヶ月以上貸與ノ分	壹ヶ月壹坪ニ付金四拾錢	
	六ヶ月未滿貸與ノ分	壹ヶ月壹坪ニ付金四拾五錢	
一土藏	六ヶ月以上貸與ノ分	壹ヶ月壹坪ニ付金參拾五錢	
	六ヶ月以上貸與ノ分	壹ヶ月壹坪ニ付金四拾錢	
一空地	壹ヶ月壹坪ニ付金拾八錢		
一火藥庫	火藥ダイナマイトノ類	壹ヶ月壹噸ニ付金參圓五拾錢	
	電鐵道火ノ類	壹ヶ月壹噸ニ付金貳圓貳拾五錢	

稅關屬　五島貞眞

在來ノ分
從前之通
在來ノ分
從前之通
新築之分

稅關屬　五島貞眞

大阪稅關長　顯川君平

四十三、田中新田火藥庫　大阪稅關所屬火藥庫の沿革に就ては現に本史第一期貨物篇第二十六火藥庫と題する項にて略々其要を盡せる如く該火藥庫の設備は大阪開港規則第十三則に基き既に明治初年天保山舊砲臺の一倉庫を充用して火藥保管藏置せるも元より一時の假設に過ぎざるを以て後二年十月新たに田中新田に火藥庫を建設せり當時該火藥庫に關する規則はすへて借庫規則を適用するの外特に柵内取扱規則を設けて非時の危險に備へしむ

田中新田借庫柵内規則

一柵門内別而田葉粉ハ勿論火氣嚴禁之事
一庫内外共雪駄相禁都而藁草履可相用事
　但人足等釘付沓着用不致樣可心附事
一鐵器類一切庫内へ持入申間敷入口石壇鐵器不差置樣可注意事
一庫戸前幷ニ窓鐵金物有之儀ニ付開閉之時ハ注意可致事
一庫内外へ合藥取散有之候ハヽ速ニ取附始末可致事
　庚午十一月

後九年の末に於て該火藥庫の一部即ち桁行八間梁四間軒高さ二間二尺面積三十二坪を本關内に移築して普通借庫に改築せしめ從來の火藥庫を縮少せり蓋し明治初年以降年次火藥藏置の額を減少せるに因る當時火藥庫の沿革に關しては十三年二月大阪府の照會に對する回答に據れは其梗概を知るに足るものあり

昨十五日前田辰次郎ヲ以テ及問合候港則幷危害物取締規則ノ履歷差向入用有之ニ付御手數ナカラ左ノ廉々ニ就キ御答辨被下度此段及御依賴候也

大　阪　府

大　阪　稅　關　御　中

港　則

第一　何年何月ヨリ實際施行ナリタルヤ
第二　今日依然施行改正等無之ヤ
第三　改正アラハ其廉御記載之事

危害物取締規則

第一　前同斷
第二　前同斷
第三　前同斷
第四　貯藏ハ何レノ地ニテ人家ヲ去ル何町ナルヤ
第五　右取扱方授受之手續

右回答書

號外

當關所轄田中新田ニ設置シタル土藏ハ是迄外國人ノ合藥ノミ預リ可申場所ニシテ外ニ爆發品ヲ預リ置場所等ハ無之候此段御問合ニ付及御答候也

十三年二月十六日

大　阪　稅　關

大　阪　府　御　中

但シ早合壹噸ニ付壹ヶ月敷料洋銀貳弗貳拾五セント火藥壹噸ニ付壹ヶ月敷料洋銀三弗五拾セント

右ハ千八百七十三年三月決定ス

第七號

港則幷危害物取締規則之履歷差向御入用ニ付御問合之廉々答辨可致旨御照會之趣致承知候則荒增別紙之通リニ候得共其方法ニ至リテハ一紙ニ盡シ難ク候條依テ概略御回答ニ及候也

十三年二月十七日　　大阪税關

大阪府御中

港　則

第一　何年何月ヨリ實際施行ナリタルヤ

答　戊辰七月港則ヲ定メ施行ス

第二　今日依然施行改正等無之哉

答　已巳四月右港則ヲ改正ス（但シ條約類纂中ニ改正ノ上存在ス）

第三　改正アラハ其廉御記載之事

答　其廉左ニ記ス

第一則中安治川波除山近邊出張運上所トアレトモ當時天保町ニ監視出張所之アルノミ

第四則明治六年三月十二日經界ヲ定ム

第六則中二ヶ所ノ内一ヶ所ハ未タ設置之ナシ

第九則中第一條祝日祭日日曜休業日ハ荷物陸揚船積ヲ不免云々リ有之トモ千八百七十三年五月三十一日夫々手數料ヲ徵收シ關長ノ見込ヲ以テ之ヲ許ス事ニ改正ス第二條休業日當時左之通リ改正ス

一月一日　一月三日　一月三十日　二月十一日　春季祭日　四月三日

六月三十日　秋季祭日　十月十七日　十一月三日　十一月二十三日　十二月二十五日　十二月三十一日

第十則中但書各國岡士願出有之節ハ可取扱ト有之トモ當時其限ニ非ラス

第十一則中收稅スヘキ物品ハ相當ノ稅銀預リ置且禁制品ハ其元價ヲ預リ置内地回漕ヲ許ス但書中長崎横濱港ハ四ヶ月ト有之トモ當時何レモ六ヶ月トシ神戸港ハ十二日間ト改正ス

第十二則中當時ハ明治十一年一月一日決定シタル上屋規則ニ據ル

第十三則中當港ニ者合藥借庫ノミ存在ス

但千八百七十三年三月庫數料ヲ定ム

第十四則中當時安治川出張所無之ニ付本關ニ限ルヘシ

第十五則中第一ヶ條第二ヶ條當時廢止ス第四ヶ條回船安治川ニ限ル

第十六則中第一ヶ條當時通船安治川ニ限ル第二ヶ條廢止ス

危害物取締規則

第一　前同斷

答　辰七月頃ハ天保山臺場中火藥庫ヘ納置規則ヲ定ム

但シ當時右規則記錄無之

第二　前同斷

答　明治二巳年十月二十日田中新田ニ火藥借庫ヲ設置シ數料ヲ定ムルコト左ノ如シ

合藥百ポンドニ付一ヶ月洋銀二合早合百ポンドニ付一ヶ月洋銀一合其後千八百七十三年三月ニ至リ右數料ヲ改正ス

第八篇　貨　物　保管及藏置

第三　前同斷

答　敷料改正スルコト左ノ如シ

合藥壹噸ニ付一ケ月洋銀三弗五拾セント

早合壹噸ニ付一ケ當洋銀貳弗貳拾五セント

第四　貯藏ハ何レノ地ニテ人家ヲ去ル何町ナルヤ

答　府下下西成郡田中新田ニシテ凡ソ人家ヲ去ルコト一町計ナリ

第五　右取扱方授受ノ手續

答　代價制限ヲ除クノ外總テ借庫規則ニ據ル

但シ條約類纂中ニ存在ス

後十七年十二月布告第三十一號を以て火藥取締規則を發布せられたるに際し所屬火藥庫今後の處置に就て主稅局の指揮を仰けり即ち

元第二十九號

火藥取締規則御發行ニ付伺

神阪稅關

客歲十二月第三十一號火藥取締規則御發行ニ付テハ稅關所屬火藥等ハ自ラ御用途相異候哉トモ被存候得共該布告中夫等之明文無之ニ付テハ同樣遵奉可致譯ニ候果シテ然ラハ神阪兩稅關所屬火藥庫之義石庫又ハ土藏ト雖トモ內部木材ノ建設ニ有之則不燃質物云々ノ廉矛盾致シ又入庫量目火藥五百貫目劇發火藥五十貫目以上ハ火藥ト雖モ貯藏スルコトヲ許サス云々ニ至テハ尤差支或ハ庫數ノ增築及ヒ內部ノ變更等ヲ要スヘキ都合可有之候條何分之御指令有之候樣致度此段相伺候也

主稅官長鄕純造殿

之に對し主稅局は同二十一日を以て「伺之趣火藥取締規則に照依するの限に無之儀と可心得事」と指令せり後六月更らに火藥藏置の事に付き左の疑議を質し

火藥庫へ火藥貯藏方ノ義ニ付伺

神戸稅關長

三等主稅官　潁川君平

神戸　大阪　稅關

客歲十二月第三十一號ヲ以テ火藥取締規則御發行相成候ニ付テハ從來當關所有ノ火藥庫モ右規則ニ照依スルモノナル哉已ニ本年三月元第廿九號ヲ以テ伺出候處右ハ該規則ニ照依スルノ限ニ無之旨御指令相成領承仕候然ル處神戸稅關所屬和田岬火藥庫ノミハ兵庫縣ニ於テ運上所所轄中開港ノ始外商ノ火藥ヲ輸入セシニ臨ミ之ヲ貯藏スルノ倉庫ナク他ノ貨物ト共ニ尋常一般ノ倉庫ニ貯藏セシカ之カ爲メ混入セシ貨物ハ勿論近傍居留地ノ危險ヲ恐レ外人ヨリ彼是苦情申述不得已川崎ノ砲臺ニ貯藏シ猶不足ヲ告クルヲ以テ和田岬ノ砲臺ニモ貯藏セシカ砲臺ハ永々火藥庫ニ使用可相成モノニ無之然ルニ其頃續々輸入致來置場ニ猶不足セシノミナラス砲臺ハ軍務官ヨリ入用ニ付火藥取除方申談旁ヲ以テ明治二年頃別ニ此火藥庫ヲ築造セシモノニ有之候得共右關係ノ書類稅關ノ分ハ先年海嘯ノ爲メニ流失シ且當縣ニモ確乎タル書類ハ不相見只其頃在官セシ者ノ記臆ニ前顯ノ通リニ有之候得共全ク外國人輸入火藥貯藏ノ爲メ築造セシモノニ有之且又大阪稅關田中新田火藥庫モ右同樣遽カニ火藥輸入有之貯藏所無之候ニ付一時天保山砲臺ニ貯藏爲致候得共狹隘ニシテ其用ヲ給スルニ足ラサルニ依リ明治元年頃築造セシモノニ候得共兩關ノ火藥庫ハ齊シク輸入火藥貯藏ノ

用ニ供セシモノニ過キス然ルニ右火藥庫ハ最前ヨリ內國人所屬品ヲモ貯藏セシ事ナキニアラス候得共今般火藥庫取締規則御頒布相成候上ハ內國人ノ品ハ該規則ニ照依セル倉庫ニ限リ貯藏スヘキ筋ト被存候得共從來前件ノ慣行モ有之候間此際一定致置度此段相伺候也

神戸大阪稅關長
三等主稅官　顯川君平

主稅官長鄕純造殿

主稅局ハ左ノ指令ヲ與ヘキ

關第九拾六號

伺之趣內國人所屬ノ火藥ハ海外ヨリ輸入セシ際ノ外其關火藥庫ニ貯藏差許サヽル義ト可心得事

明治十八年八月七日

主稅官長　鄕純造　印

爰に於て稅關所屬火藥庫に藏置すへき火藥は海外より輸入を杜絕せるを以て近時一時火藥の藏置保管に任せしも事實は年々火藥の輸入せるものに限れとも當時特四十四、火藥庫慣行法　二十二年五月關稅局より當關所屬火藥庫の規則を徵せり然れとも當時特に成文の規別なきの故を以て從來の慣行法を記して之を答申せり火藥庫を知るの捷路たれは左に之を揭く

當關附屬火藥庫規則御入用之由ニテ寫一通可差出樣御申越之趣致領承候然ルニ當關ニ於テハ別段成文之規則書ハ無之單ニ別紙慣行之手續ニ依リ取扱候義ニ付右寫一通差進候間御落手相成度此段御回答ニ及候也

明治二十二年五月十日

大阪稅關長　顯川君平

關稅局次長石川有辛殿

（別紙）

大阪稅關附屬火藥庫慣行法

一當關附屬火藥庫ハ大阪開港規則第十三則ニ基本ス

一輸入火藥ハ總テ稅濟ノ後ニ非サレハ本庫ニ貯藏スルヲ許サス

一庫租ハ西曆千八百七十三年五月二十七日稅關布告第五號ニ基キ合藥及「ダイナマイト」等ハ一噸ニ付一ケ月三弗五十セント彈藥早合及導火等ハ同二弗二十五セントトス

一庫租ヲ算スルニ端日數ハ十五ケ日以內ヲ半月トシ三十日ヲ以テ一ケ月ト算定ス

一火藥ヲ出庫セント欲スル者ハ庫租上納濟ノ後ニ非サレハ出庫ヲ許サス

一火藥出入庫ヲ願出ル者ハ必ス別紙第一號第二號ノ書式ヲ用ユルモノトス

一出庫願書ノ記名ハ必ス入庫願書ト同一人カ又ハ之ヲ代記スヘキ權アル者ニ限ルヘシ但代記ノ場合ニ於テハ其社ヨリ豫メ其旨ヲ倉庫課長ニ報告スヘシ

一入庫火藥ノ貨主ニ變換アル時ハ其旨ヲ證書ニ裏書シ以テ倉庫課ニ差出スヘシ

一火藥貯藏期限ハ一年即十二ケ月ヲ超過スヘカラス若シ此期限ヲ經過シ或ハ稅關ヨリ許可セシ期限內ニ之ヲ引取サルトキハ改正借庫規則第十四條ノ例ニ照シ公賣ニ附シ其代價ヨリ庫租及公賣ニ關スル諸雜費ヲ引去リ餘剩金アラハ稅關ニ預リ置キ謝銀トシテ每月百分ノ一ヲ引去ルヘシ

一火藥庫ノ開閉ハ休日祭日ヲ除キ每日午前十時ヨリ午後四時ヲ以テ限リトス

一入庫中ハ天災ハ勿論其ノ他ノ損傷等ニ至ル迄一切貸主ノ負ニ擔任シ稅關ハ之ニ關係セス

四十五、對武庫司火藥倉敷料の紛議　大阪運上所か租稅寮の主管に歸せんとする過渡の時代に於

て在田中新田火藥庫倉敷料に關し在阪武庫司との間に一條の紛議を釀して以來上下四載の永きに亘り曩に明治二年外商スミスパンとの間に起れる火藥藏置の紛議（本史第一期貨物篇に於て詳述せり）と共に火藥庫沿革中記憶するに値れるを以て左に當時之か爲めに兩者の間に往復せる文書類を將て事の顚末を報けんとす

去未（明治四年）三月兵部省ヨリ就掛合貸渡置候田中新田火藥庫一棟御貸渡置候分借庫舖料定則通御渡方被下度尤百ポントニ付洋銀二合宛之規則ニ付此儀爲念御懸合ニ及ヒ候也

壬申正月（明治五年）　外務局

武庫司御中

この一篇の通告は端なく一の導火線として遂に四年の久しきに亘れる紛議を爆發せしめき武庫司はこの通知に對して反問して曰

去未三月田中新田貸庫一棟敷料云々御掛合相成候處右ハ元兵部省林少丞ヨリ掛合候ニ付火藥種込置候得共敷料之義ハ當用未タ承知不致候處此度御掛合ニ就而ハ夫々相運御渡可申候得共貴局定則ハ承知不致候ニ付百ポントニ而洋銀二合宛右刻限ハ一ヶ年宛或ハ一月宛難相分候ニ付承度候尤百ポントハ何貫目ニ候哉且重量ハ正味皆掛兩樣御申越有度且右庫借入之節何樣ノ約定ニ相成居候哉是又覺語無之候ニ付同樣御申越有之度此段更ニ及御掛合候也

壬申三月廿三日　出張武庫司

大阪府外務局御中

茲に於て外務局は再ひ左の通告を致せり

去ル未三月田中新田借庫云々之儀ハ元來一棟貸渡之儀ニ付舖料之儀ハ至當之料可差出トノ約定ニ有之其内百ポントニ付洋銀二合宛ト申儀外國人ニ貸渡シ定則モ爲御心得及御懸合候得共右借庫貸渡ハ全ク一棟貸切之儀故別紙之通舖料算定候條其心得ヲ以テ至急御差廻有之度此段申進候也

三月二十三日　大阪府

武庫司御中

（別紙）

借庫一棟二戸前

長サ八間

入　四間

右借庫一棟敷料

月　三百弗

辛未（明治四年）三月ヨリ

壬申（同　五年）三月迄

合洋銀三千九百弗

火藥庫藏置の火藥は元來大阪鎭臺の所屬なるを以て武庫司は之を鎭臺に通報し鎭臺は更に大阪府に交渉して大阪府の處置を促せり

去春御請申候田中新田火藥藏敷料今般御申越相成見合候處意外之過料ニ有之右ハ外國人ニ御貸渡相成候處ニ比較御取立相成候義ニ相見候得共同官之物ヲ官ニ借候儀外國人ヘ御貸渡ト同日ニハ難論ト考合致候得共如何歟且又御借受候節ノ敷料ハ追而御申越相成候旨ニ而其後何事モ無之遲延多日ニ至リ突然意外之御申越有之實ニ及驚駭候全体不例之敷料指出候義ニ候得ハ兼而當臺ニ於テ轉移之所置モ可有之處今更如何共致方無之候間前文之次第御熟考有之度此段及御駈合候也

壬申三月二十九日　大阪鎭臺

大　阪　府

之を要するに多くの日子を經過せる今日唐突の要求に應する能はすといふに過きさりし而して此問題の漸く歩を進めんとするに際し運上所の事務は外務局の手を離れて租稅寮の所管に移り此間事務の授受諸般設備の補修等日に當面の事務に忙はしく此問題は不知不識の間に忘却し去らんとせるに稅關事務の整理と共に茲に亦餘燼再ひ熾を擧けて燃へ來らんとせり時に明治六年七月廿六日大阪稅關は更めて鎭臺へ此問題に就て交涉を開始し夫の壬申三月大阪鎭臺最後の回答より月を經ること約一ヶ年半

去ル未三月中貴臺ヨリ大阪府ヱ御談有之外國人之爲取設有之ル田中新田火藥庫之內壹棟御借受相成右敷料曖昧未定之儘當寮へ引繼相成其後御談申置候義モ有之候へ共今以御確答無之然ルニ當五月來火藥庫敷料改正相成旁其儘イタシ置候而ハ外國人へ相響庫租ノ規則整然不致尤先時大阪府管轄中貴臺へ懸合相成居候敷料ハ全ク滿庫之現物ヲ以勘定相立壹ヶ月貳百八拾圓ニ相成候得共素ヨリ一棟ヲ以貸切候義ニ付坪割ニ直シ外國人預リ平常之貨物一ヶ月壹坪壹分銀四ヶ三處火藥ハ尋常之品ニ異リ候義ニ付一坪壹分銀八ヶ之割ヲ以取立候得共壹ヶ月壹分銀貳百五拾六ヶニ相成別算ト ハ格別之違相見ヱ內外同一之規則可致整立旨長官瓜生租稅助申付候間至急右敷料御渡有之候樣イタシ度別紙勘定書相添此段及御掛合候也

第七月廿六日

大阪鎭臺御中

大阪港
稅關

追而前條坪割之義ハ當月限リ來ル八月以後義ハ合藥敷料規則通リ現物之多寡ニ應シ品立可申候間此段御承知有之度右ニ付御不審之廉モ候ハヽ御掛リ之內御一人御出頭有之候ハヽ尙委細御談示可申候也

（別紙）

一火藥庫（長サ八間入四間）　壹棟貳戶前

此坪三十二坪

但一ヶ月一坪ニ付一分銀八ヶ

此敷料一分銀二百五十六ヶ

此全員八拾三圓拾三錢八厘宛

辛未三月ヨリ七月迄　二拾八ヶ月分

合貳千三百貳拾七圓八拾六錢四厘

然るに此照會に對し鎭臺より何等の回答に接せさるを以て稅關は更に同月三十日を以て之か回答を督促し遂に武庫司より左の回答を寄せ來れり

鎭臺ヨリ大阪府依掛合辛未三月ヨリ田中新田火藥庫之內一棟借用罷在候所今般改テ庫敷料可收旨委細御掛合之云々大ニ驚愕依テ臺ニ問合候所壬申三月右敷料之義ニ付府ヨリ彼是掛合有之候得共高價ヨリシテ未定之旨就テ此度之御文中當五月火藥庫敷料御改正之旨乍失錯心得居不申何號ノ御布告ニ有之候哉御敎示被下度右樣敷料之可係ヲ何等之御定約モ不致其儘御借受居候義ハ御互ノ不行屆トモ相考候右樣之金員相成ニ於テハ伺濟之上ニ無之テハ拂出シ相整不申爨キニ承知モ候ヘハ火藥轉移ノ處置モ可有之過去之件ニ突然御掛合ニテハ在來ノ分トハ乍申庫敷料伺立ニモ差閊之廉有之依之此度之御掛合ヲ基本トシ處置致シ度此段御賴談旁及御回答候條猶御通報待入候也

明治六年七月三十一日

武庫司出張所㊞

大阪港稅關御中

茲に於て稅關は直ちに左の如く回報し倉敷料の支拂を促して曰

田中新田火藥庫大阪府ノ管轄中御借切相成居候鋪料早々御拂相成度旨過日以勘定書申進置候處以御答書云々御申越相成候得共右鋪料之義ニ付而ハ去ル三月來大阪府ヨリ毎度御掛合申進置候義モ有之候ニ付其節敷料ニ御異存有之候ハヽ御轉移可相成筈之處其儘往苒御借用相成候義ハ貴司之失策ト被存候甞テ當關ヘ係ル謂レ無之然ルヲ今更當關エ對シ互ノ不行屆樣御申越之段不得其意既ニ當關租稅寮所轄ニ相成候後ニ於テモ去七月廿日右敷料御談トシテ御一名御出頭相成度及御掛合候得共更ニ御出頭被致候節火藥早々御引取可相成段及御談候處於貴司テモ專御用意中ニ付可相成速ニ轉移可致トノ返答被致其後何等之御報モ無之漸々往苒ニ及ヒ大ニ不都合ニ付今般及御掛合候儀ニテ敷料之御談突然ト今日ニ相始候譯ニ無之曩ニ阪府之掛合ニ基ク時ハ一ケ月三百弗之處今當關ヨリ改テ及御掛合候敷料ハ八拾弗許ニ過ス其差莫大ニ候得ハ無御故障御拂入可相成ト存候處豈謀大ニ御驚愕之御文意案外千萬ニ有之候將タ敷料改正之義者諸開港地稅關ト外國人トニ關スル事務ニ付外國人エハ稅關第五號之布告ニテ及達候得共別段國內諸方ヘ御布告相成儀ハ無之一休當關借庫ノ義ハ外國人貨物ヲ預ル爲メニ取設タル義ニハ有之候得ハ聊貴司ヨリ之預品ト雖其敷料ハ外國人同樣百ポンドニ貳拾錢取立可申筈之處既ニ一棟ニテ御貸渡申候義ニ付先月迄之分ハ坪數ニ直シ勘定相定置候云々

如人稅關再三の交涉に對し武庫司は「再應御申聞御座候田中新田火藥庫數料仕拂之儀東京武庫司へ申立置候に付指揮之上御廻牒可及云々」と回答せるを以て稅關も亦之を租稅寮に訴へ之か指揮を待てり今稅關より本寮へ申達せる文書は左の如し

大阪港稅關所屬田中新田火藥庫ノ內一棟阪府管轄中去ル未年三月武庫司ヘ貸渡シ火藥庫入ノ儘同關ヘ引請然ルニ敷料ノ義ハ阪府外務課ヨリ掛合置候次第モ有之候間同司ニオイテ承知ノ儀ト相心得候ニ付別段敷料不及掛合其儘當今迄貸渡シ置候處漸々火藥敷料共相嵩候儀ニ付一先敷料取調候處阪府ノ勘定ニ基ク時ハ一ケ月三百弗此合計八千弗余可取立筈之所數十ケ月一棟ヲ以テ貸渡シ有之儀ニ付改メテ平常ノ貨物一倍ノ敷料トシテ則一坪ニ付一分銀八ケ之割合ニ減少シ更ニ勘定相立未三月ヨリ當七月迄合金貳千參百貳拾圓余拂入ノ儀武庫司ヘ及掛合候處曩キニ外務課ヨリ掛合候敷料曾テ承諾致シ候儀無之由ヲ以テ今更突然過去ノ敷料拂入ノ義差支ノ趣喋々異論申越候得共素ヨリ他ノ所轄倉庫內ニ無敷料ニテ貨物相圍候條理無之殊ニ初發阪府ヨリ之往復書ニテモ敷料取立候儀ハ判然致居候間敷料ニ異存有之候ハヽ昨春中外務課ヨリ掛合之節早々火藥轉移ノ取計可有之候歟然ラサレハ假令過當タリトモ其敷料相拂至當ノ義ニ可有之況今般當關ニテ掛合候敷料ハ格別減少致シ候上ハ甘シテ拂入可有之候筈ノ處掛合ノ遲速ヲ口實トシ彼是異論ヲ生シ敷料相否ミ候ハ不條理ニ存候間其邊ヲ以テ再三及掛合詰ル處本司ヘ伺ノ上可及返答旨申越就テハ自然武庫司ヘ伺ヨリ右ニ付御談シニ及ヒ可申哉ニ被存候間御心得迄一件書類差出候委細ハ右ニテ御承知可然御差圖有之度此段申進候也（一件書類添付今之ヲ省略ス）

六年第八月

陸奥租稅頭殿

松方租稅權頭殿

瓜生租稅助

之に對し租稅寮は左の如く指揮し益々之か督促を嚴にせしむ

其稅關所屬田中新田火藥庫ノ內一棟坂府管轄中去ル未三月ヨリ出張武庫司ヘ貸渡有之候處敷料淹滯ニ付掛合往復書類添御申越之趣致承知候右ハ御見込ノ趣意ニテ此末御取計可有之國司ヨリ當方ヘ掛合モ候ハヽ尙嚴敷相促可申候此段回答申入候也

六年第九月三日

瓜生租税助殿

松方租税權頭印

この後援を得て税關は更に督促の歩を進めて曰

田中新田借庫中其司御貯火藥敷料ノ儀ニ付當關ヨリ本寮へ申立候處當關見込ノ通可取計旨申越候間未ノ年以來之敷料早々御拂入相成候樣致度此段再應及御掛合候也

九月十二日(六年)

大阪税關

武庫司出張所御中

追テ過日以來庫中ノ火藥追々御輸出相成候得共當關規則ニ於テ敷料不取立以前ニ荷物相渡候儀ハ曾テ無之儀ニハ有之候得共素ヨリ政府ノ御物品其邊差含規外ノ取計致置候事ニ御座候此段御承知置有之度候也

是より先在阪武庫司より火藥庫敷料の仕拂に就て東京本司へ申達するも共に田中新田火藥庫藏置の火藥移轉に着手し遂に六年十月十一日を以て盡く之を他に搬出せり茲に於て税關は一々之れに對し倉敷料の納付を迫れるも武庫司は本司へ照會中の故を以て容易に事を決せさるを以て更らに之を租税寮に申達し直接武庫司へ督促せんことを以てせり

大阪税關所屬田中新田火藥庫去ル未年以來武庫司借渡ノ敷料之儀ニ付彼此往復之末昨年八月中一件書類相添委曲申進置其後御差圖之通度々及催促候得共唯々本司伺中ニテ未タ何分之指令無之ト而已確然期限之定報モ不申越漸々日月ヲ延シ既ニ改年ニモ相成リ勘定組込等差閊不都合不尠候ニ付御寮ヨリ直ニ武庫本司へ右敷早々拂入之儀嚴ク御掛合有之候樣仕度依之別紙勘定書相添此段相伺候也

瓜生租税助

茲に於て租税寮之を武庫本司に傳へ遂に七年二月六日を以て在阪武庫司より左の通知を致し茲に漸く局を結へり

昨年屬御掛合有之候田中新田火藥庫借用付ニ敷料ノ件本司へ相運ヒ伺出相成候處所仕拂可申旨此節達シ有之就テ左ノ通庫敷料明七日仕拂申度ニ付十二時迄ニ受取人御差出シ有之度此段及御掛合候也

二月六日

大阪港

税關御中

武庫司出張所

一火藥庫 長八間 入四間　一棟二戸前

此坪三十二坪

但一ヶ月一坪に付一分銀八個

此鋪料一分銀二百五十六圓

此金貨八十三圓十三錢八厘宛

辛未三月ヨリ明治九年七月迄　二十八ヶ月分

合二千三百二十七圓八十六錢四厘

一火藥二萬二千五百三十貫〇〇六十二匁六分

此借庫敷料洋銀五百十八弗十セント四厘

金貨ニ〆五百二十三圓二十八錢八厘

但火薬一トン ノ敷料一ケ月洋銀三弗五十錢
右明治六年八月一日ヨリ同十一月十一日悉皆引拂迄ノ敷料
追テ右御仕拂相濟候上ハ御受取ノ證本司ヘ差廻候義ニ付此段モ御含ノ爲メ申進候也

大阪稅關沿革史

第九篇　船舶

第一章　第二期

西洋形船舶

イ、外國船

一、外國般に對する取扱一般　單に外國船と云ふも當時稅關に於て其取扱を異にする點に見て之れを區別すれは即ち郵船、商船、遊船、漁獵船、遭難船又は雇入外國船等の如し既に前篇（第一期第一篇第一章）に於て記述せるか如く元來外國船に對しては既に通商條約及ひ貿易章程に於て貨物積卸の監督船艙の封鎖入出港手數料の徵收其他定則違犯の處分等すへて是を規定實行し來り現行關稅法實施に至る間毫も變更する處なかりき然れとも時勢の推移により關稅事務の發達に伴ひ其規程の範圍内に於て多少其取扱振りを變更したるものなきにあらされは以下項を追ふて外國船に關する沿革を述へん

一、郵船の取扱　郵船及ひ商船は共に外國貿易を目的として往來すれ共郵船は荷客搭載の外別に郵便物輸送の任務を負へるを以て之か取扱に關しても亦普通の商船と同一にすへからさるものあり夫の貿易章程に於ても商船は入港後四十八時間内に入港手數をなし又出港二十四時間前に其届出を要すへきを規定せるも郵船に對しては入出港手數は同時に之を爲し又積荷目錄は陸揚すへき貨物のみを記載せは足れりとせるか如き特に簡便の取扱をなさしめたり明治五年七月是か取扱及ひ其他に就て訓示して曰

休日並閉關後ニ至リテハ一切稅務ヲ不取扱ハ一般之規則ニ有之候得共郵船入出港之日ノ如キハ

便利ヲ與フル爲メ格別之取扱モ可致義故後日右新法相定候迄ハ御國民等他港廻ノ荷物等改方願出候ハヽ其情實ヲ糺シ便利ヲ考ヘ格別之免許ヲ書與ヘ可申事

宿直之者ハ殊ニ右之趣旨ヲ體認シ其機ニ臨ミ便宜之取扱可致候且是迄御國民荷物免許等官員所屬之名義ヲ以テ差許候哉ニモ相聞以ノ外ノ事ニ候將來右樣心得違無之樣可致候

壬申七月十七日

各　課　　長　官

然れとも大阪開港以來外國郵船の入港せるもの絶へて無かりし

二、外國郵船便乘手數料　以來外國郵船便乘者に對しては其都度一定の手數料を徵せしも（第一期船舶篇參照）五年八月之を廢せしむ蓋し郵船出入港に對する取扱を簡易にする一端のみ

從前開港場ヨリ外國郵船ニ乘シ內地他港ヘ廻リ候者ハ必ス其港縣廳ヘ願出免狀ヲ請官員若干士族卒之外ハ手數料相納メ乘込來候處御詮議之次第モ有之以後乘込免狀相渡候儀被廢候條其旨管內無遺漏相達可申事

但外國行之者ハ從前之通相心得可申事

壬申八月　　太　政　宕

開港場ヘ御達案

外國郵便船ニ乘シ御國內他港ヘ廻リ候者免狀相渡シ其身分ニ寄リ手數料取立來候處御詮議之次第モ有之以後內地乘船之者ヘハ右免狀不及下渡候事

但外國行之者ヘハ是マテ之通取計可申事

壬申八月　　太　政　官

三、商船　彼の雇入船及神戶居留の外人か所有に係る小蒸滊船にして神阪間を來往するもの、外は直接外國へ航行せるものは開港以來實に指に屈するに足らす爲めに其取扱振の如きも特に當關に於ける慣行として記述に値すへきものなきも當時外國船入港せは當該監吏は直ちに本船に至り船長若くは代理者に就き尋問簿に國籍船名船長の氏名乘込人員船客の數積載貨物の種類、仕出港の地名及其月日を自記せしめ其他必要の事項を尋問して歸課之を飜譯して各課に廻達し且つ其番號及船名を塗札に揭記せしむ而して碇泊船は荷客積載せさると否とに拘はらす日出より日沒に至る迄監吏一名を乘監せしめて貨物積卸及ひ其他の監督をなさしむ但し郵船は晝夜二名を交代宿直せしむる事とせり又休日及ひ日沒より日出迄は艙口を封鎖し若し封鎖し能はさるものは監吏をして徹夜乘監せしむ又其入出港手數料の如きは入港船に對しては其入港屆と共に領事の預證を添へ十五弗の手數料を收めしめ其提出せる積荷目錄は檢查課に於て之を受理す而して出港の際に於けるも出港屆と共に手數料七弗を徵し出港免狀を交附し及ひ先きに提出せる領事の預證書を返附す（第一期船舶篇參照）

四、雇入外國船　雇入外國船に就ては新に第一期第四篇に於て詳述せる處の如し大阪開港の當初にありては貿易商船の來往は殆んと數ふるに足らさりしも當時維新兵馬倥傯の際各藩に於て兵士金穀の輸送に忙はしく爲めに雇入たる外國船の出入甚多く之に次くに神戶居留の外人か其所有せる小蒸滊船を以て神阪間の航路を開始したる等によりて一時外國船の入出甚た多かりしも時勢の進歩に伴ひ邦人の外國船を購入するもの亦多きを加へ自然外國船の雇入漸次減少し明治六年以後に於ては雇入外國船の入碇せるもの殆んと跡を絶ち爾後雇入外國船の取扱方に關しては一定の法規なきを以て或は外國船を以て律し或は內國船に準する等各港其取扱を區々にせるを以て明治九年二月初めて其取扱を一定せしめて曰

屢入外國船取扱方ノ儀從前各港稅關ニ於テ區々相成居候赴相聞ヘ候條以來ハ通常外國船同樣可心得此旨相達候事

但特許官許ヲ受不開港場ヘ回漕ノ節ハ密賣等無之樣夫々取締可致候事

明治九年二月十二日

太政大臣　三條實美

降テ明治二十二年七月特別輸出港規則發布セラレ而シテ是カ取扱方ニ就テハ同則第三條ニ規定シあれは別に茲に明記するの要なし

五、遊船漁獵船及ひ遭難船　單ニ遊航ノ目的ヲ以テ渡來セル船舶ト雖トモ貿易章程上其船種ニ就キ何等ノ規定なかりしを以テ稅關事務上ニ於テ入出港其他ノ手數ヲなさしむるは當然なるか如きも長崎橫濱等ニ於テ往々是等遊航船ノ處置ニ苦ミ其取扱方ニ就テ本省ノ指揮ヲ待ちし事あり明治十年十月關稅局長より橫濱稅關ノ伺ニ對スル指令によれは海外ヘ獨航し得へきものは遊船と雖とも商船ニ準シテ入出港手數ヲなさしめ獨航し得さるものは入出港手數徵收ニ及はすとせり爰テ明治八三年二月彼ノロヤルヨットニ對シテは入出港ノ手數免除すへきを達示し更らに十八年六月左の如く達示し爾後遊船ニ對スル處置ヲ一定せしむ

乙第百一號

去十三年二月中第九十八號ヲ以テ「ロヤルヨット」取扱方達置候處自今遊船ハ總テ入出港手數免除候條此旨更ニ相達候事

但遊船ト雖トモ商品等ノ運搬スルトキハ本文手數ヲ免除スルノ限ニアラス

明治十八年六月八日

主稅官長　鄉純造

而して明治二十年九月橫濱稅關より外國遊船近海取締の件に關して上申する處あり之れに對して同年十二月二日大藏大臣より

遊船近海巡航取締ノ義ニ付本年九月第五八九號ヲ以テ上申ノ趣モ有之候處外國遊船不開港場ヘ回航ノ節ハ外務省ニ於テ特許狀ヲ附與シ本省ニモ通知可有之筈ニ付其都度其關ヘモ相達スヘク候條此旨相心得ヘシ

と達示し外務省特許狀の有無によりて之か取締をなさしむ

これ遊船の取扱に關する概要に過きすと雖とも當港に於ては開港以來是等遊船の出入せる事實は記錄に徵すへきものなし又漁獵船遭難船に關しては彼の貿易章程に於て

薪水食料等用意ノ爲入港ノ鯨漁船或ハ難船ハ其積荷ノ告書ヲ出サスト雖トモ若シ其積荷ヲ賣拂ハンコトヲ願フトキハ第一則ノ通定式輸入ノ手數ヲ致スヘシ

と規定したりしか當港開港以來曾て是等の船舶入港したるものなく隨ふて其取扱に關して尋ぬへき事跡なし

六、神阪間航行の小蒸汽船　大阪開港以來神戶在留の外人等か荷客輸送の目的を以て神阪間及近海沿岸に於て小蒸汽船の航行を開始するや當時管轄廳に於て左の免狀を與へ營業を許可せり

第三號

免許狀

割印

一暗車蒸汽船　ペイホ號

一長　七拾六フイト四インチ

一幅　拾七フイト拾インチ

一深　六フイト

一檣　貳本
一噸數　八十四噸
二船長　米國人エンヂン、エッチ、ギル

右者大阪兵庫之間船客運輸之爲メ此日限ヨリ一年限差許候間千八百六十八年一月中決定條約之通可相心得事

明治八年十二月三日

兵庫縣印

如此にして營業を許可せる外國人所有の小蒸滊船に對して稅關は特に其出入港手數料を免除して內國船同樣の取扱を爲せり當時阪神間及近海沿岸を航行する小蒸滊船は曾に外人所有のもののみに止らす邦人所有のものも亦頗しく其是等滊船か安治川流域を上下する毎に衝突膠沙等危險少からさるを以て既に五年三月滊笛に關する規則を定め後六年七月兵庫縣に於て各國領事と小蒸滊出發報知規則を協定し直ちに大阪府へ通知して內外一般に布告實施せしめたり川蒸滊船呼笛規則各國領事會議濟別紙之通取極來ル七日ヨリ施行可致旨內外人民へ相達候條此段及御報知候也

明治六年七月三日

兵庫縣權參事　高橋信義
兵庫縣參事　岡村茂昌
兵庫縣令　神田孝平

大阪府知參事御中

（別紙）

兵庫大阪之間往還蒸滊船出發報告規則

一　各蒸滊船出船前一ミニユトノ外滯船或ハ揚錨之時呼笛致間敷事
二　一各船出發前半時間ニ報知之爲メ兩度鐘ヲ鳴ラス可シ但壹度一ミニユトヲ過ス可カラス
三　一此規則ニ違背之過料ハ洋銀五拾ニ過サルヘシ
四　一總テ之詞訟ヲ裁判シ且過料ニ取立ル等之儀ハ其船所屬之官府ニテ處置スヘシ

以上

從是先き明治三年政府は西洋形商船規則なるものを發布して大に西洋形船舶に居て奬勵する處ありしより邦人にして外國船を購入するもの漸次多きを加へ隨て沿海通航船の出入するもの漸く盛なるに從ひ彼等外人所有の小蒸滊船の如き明治十四五年の交に於ては既に全く其跡を絕てり後明治十七年十一月主稅局の照會に對する答申に據れは

第六十號

整第四百二十二號ヲ以テ當港外國人所有之小船ニシテ通常船舶ノ手數ヲ爲サス只港內艀等ノ用ニ供シ或ハ營業等ノ爲メ近海ヲ往復スルモノ云々御照會之趣致承知候依テ取調候處現今ニテハ外國人所有之小船等當港ニ壹艘モ無之候從前明治初年ヨリ同六七年ノ頃迄ニハ外國人所有ニシテ神戸大阪間旅客運送致候小蒸滊船七艘有之右ハ兩港地方官ニテ年期ヲ定メ營業許可被致候モノニテ出入港ノ都度稅關ニハ通常ノ手數不致候得共其節ハ稅關ニ於テ取締上不都合ノ廉モ無之候別紙船名取調書相添此段及御回答候也

十七年十一月

主稅局第一部長中野健明殿

大阪稅關長

顯川君平

（別紙寫）

神戸大阪間旅客運送船

蒸汽	方圓丸	持主	米商	テレジンク
仝	往復丸	仝	仝	仝
仝	金札丸	仝	仝	ストロン
仝	神戸丸	仝	英商	ケイレン
仝	無事丸	仝	蘭商	キルピー
仝	九所丸	仝	英商	レーマンハルトマン
仝	ベルリン	仝	孛商	

右

二、出入外國船統計　既に述へたる如く明治五年以前にありては諸藩雇入船の出入頻繁なりしと神阪間航路の開始によりて外國人所有の小蒸汽船か日々出入せるとによりて一時外國船の輻湊を告けたりしも以後に在つては諸藩の雇入外國船は殆んと其跡を絶ち特に貿易船の如きも大阪港灣自然の配置上大船巨船の碇船に不便なると一方に於て神戸港の發達に伴ひ本船は重に同港に碇船して輸出入の貨物は大抵艀船によりて彼我の間に廻漕せらるゝに過ぎさりし等年を逐ふて漸次減少せり今試みに明治六年以降同二十三年に至る迄當港に出入したる外國貿易船の國籍噸數を示さは左の如し

自明治六年
至明治廿三年　外國往來船舶入出港表

年	國籍	種別	入港 隻數	入港 噸數	出港 隻數	出港 噸數
明治六年	英國	汽船	八	七、八〇〇	五	四、三二八
		帆船	二一	一一、八八一	一七	八、六二八
	米國	汽船	六	一、二〇〇	六	二、五〇五
		帆船				
	魯國	汽船	一	一、七四一	一	一、七四一
		帆船				
	獨國	汽船				
		帆船				
	佛國	汽船	二	一、〇一四	二	一、〇一四
		帆船				
	蘭國	汽船				
		帆船				
	合計		四〇	二四、一九一	三二	八、九一一
七年	米國	汽船	四	六九五	一	六九五
		帆船				
	英國	汽船	四	二、三一六	四	二、三一六
		帆船				
	合計		八	三、一三四	五	四、三二一
八年	英國	汽船	一	五、四五〇	九	六、六三七
		帆船				
	魯國	汽船	一	六二八	一	六二八
		帆船				
	米國	汽船	一	四七一	一	四七一
		帆船				
第九篇　船舶　西洋形船舶			三〇〇		三〇〇	

	合計		三	一、三九九	三	一、三九九
十一年	米國	汽船				
		帆船	一	六七二	一	六七二
	合計		一	六七二	一	六七二
十二年	米國	汽船				
		帆船	一	七〇四	一	七〇四
	合計		一	七〇四	一	七〇四
十四年	英國	汽船	一	六五二	一	六五二
		帆船				
	合計		一	六五二	一	六五二
廿一年	朝鮮	汽船	一	一八		
		帆船			一	九六
	合計		一	一八	一	九六
廿三年	朝鮮	汽船	一	三三		
		帆船				
	合計		一	三三		

此他明治六年以降二十三年に至る內國廻漕船として出入したる外國船は左の如し

年	國籍	種別	入港 隻數	入港 噸數	出港 隻數	出港 噸數
十六年	和蘭	汽船				
		帆船	一	二四〇		
	合計		一	二四〇		
廿二年	英國	汽船	一	三二		
		帆船				
	合計		一	三二		

要するに明治九年十年の如きは其出入皆無なるのみならす以後實に寥々として僂指するに足らす勢旣に此の如くなれは遂に神戶大阪兩稅關長長岡義之の大阪鎖港論となり明治十二年十月を以て之を時の大藏卿に上申せり說の當否は暫らく措て論せさるも亦以て當時の大阪港を推知するに足るものあるを以て試みに左に揭出して參考に資せん

大阪ノ港タルヤ河水流注ノ嘴尾ニ位シ所謂河港ニシテ從來單舸小船ヲ蝟集スル咽喉ノ良地ナレトモ海港ナラサレハ如何セン河口狹隘加之注漲ノ水勢蘆沙ヲ捲キ來テ此嘴尾ニ堆積シ水底淺淤以テ大船ヲ容ルヘカラス以テ巨艦ヲ泊シムヘカラス是ヲ以テ來港ノ船舶ハ埠頭ヲ距ル大約二里計河口ヲ離ル猶一里ニシテ碇ヲ下ス故ニ貨物積卸ノ艀船幾時間ヲ消費シテ漸ク本船ノ往返ヲナス時アリテ狂風ノ怒號波浪ノ驚沸ニ遭遇セハ艀船ノ己ニ本船ニ達スルトモ俄カニ之カ積卸ヲ止メサルヲ得ス其不便窮マレリト言フヘシ該所ハ其初メ開市場ノ豫約ナリシカ之ヲ開クノ時ニ當テ遂ニ開港場トナレリ然レトモ已ニ前陳ノ不便アルヲ以テ來港ノ商船貿船年ニ減シ月ニ衰ヘ後纔ニ米積船ノ來泊スルモノノミナリシカ今日ニ至リテハ是亦艀船運輸ノ困難アレハ寧ロ本船ヲ神戶港ニ繫キ艀船ヲ以テ米ヲ阪港ヨリ取ルノ便ニ如サレハ阪港ニ投錨スルヲ見サルノ形況ニ至レリ其然ルヲ致ス所以ハ地勢ニ據リ大抵阪港ヨリ曉風ニ乘シ舟ヲ放チ一帆直ニ神戶ニ達シ夜來又好風ヲ得歸帆ヲ得ルノコトアリ且神戶着港後ハ港內ノ荷役ナレハ積卸安全ニシテ豫メ之ヲ終ルノ時日ヲ期シ得ヘキヲ以ナリ阪港碇泊船ノ稀少ニ至ル實際狀況業已ニ如此今開港以來漸々來船ノ減却セシ實數ヲ擧ケン明治元年ニハ三十隻同二年ハ八十三隻同三年ハ二十四隻同四年ハ十三隻同五年ハ五十二隻同六年ハ四十二隻同七年ハ七隻同八年ハ三隻同九年十年ハ皆無同十一年ハ二隻ナリ如此漸々淩遲以テ今日ニ達スルハ全ク同港ノ地勢位置本宜シカラサルノミナラス鐵道開業以來神阪

ノ間一瞬往返神阪ハ全ク一市場ノ姿トナリ神港ハ乃チ阪地ノ貿易場ナリシニ之レ因ル故ニ阪港ハ之ヲ廢シ開市場ノ舊ニ復シ之ニ代フルニ越前敦賀港ヲ開クニ加ス今之カ利害得失ヲ交擧セン今日ノ物品表ニ據ルトキハ阪港ニ於テ若干ノ輸出入品有之モ是等ノ本船ハ皆神港ノ碇泊ナレハ之ヲ神阪間ノ回漕品ト云フニ過キス左レハ大阪港ヲ癈センカ別ニ事物ノ扞挌弊害アルコトナキヤ必セリ敦賀港ヲ開カンカ該所ハ内國北邊咽喉ノ地貨物ノ集點ニ〆今之ニ鐵道架設ノ擧アレハ運輸ノ路開通シ隨テ他日外ハ滿州及魯領ニ交通スルノ日ニ至ラハ出入ノ貨物此要津ニ山積丘堆シ忽チ北方一大繁華ノ境域ニ化スルヤ難キニアラサルヘシ而テ神戸ハ南海ニ於テ互市場ヲ占メ敦賀ハ北海ニ於テ貿易場ヲ有シ南北相對シ彼此相待チ貨物ノ流通商賈ノ掛引等ニ到迄互ニ氣脈ヲ通スレハ國家ノ利人民ノ益其蒙ル所少々ニアラサルナリ阪港敦賀港ノ廢興其利害照々タル已ニ此ノ如シ故ニ官家意ヲ之ニ注キ將來盛昌ノ期ナキ阪港ヲ廢シ他年繁榮ノ望ミアル敦賀港ヲ開クハ所謂無用ヲ轉シテ有用トナスモノ希クハ今般條約改正ノ際ニ於テ此事ヲ擧行セラレナハ頗ル國策ノ得ルモノナランカ實際ノ景狀ト幷ニ聊カ見ルトコロアル等併セ之ヲ縷陳セシナレハ若シ萬一條約御改正ノ御參考ノ一ニ備ハルヲ得ハ下官ノ大幸之ニ過クルモノナシ謹白

十二年十月

大藏卿大隈重信殿

大阪稅關長　長岡義之

亦以て當時大阪港の形勢を知るに足らん

三、外國船の賣買と噸稅（噸稅逋脫の一例）

既に貿易章程の定むる處により外國船舶に對しては稅關は單に入出港手數料を徵するのみにして他に何等賦課の義務を負はしむる能はさるなり然れ共若し外國船を內國人に賣渡す場合に於ては船籍異動の手數即輸入稅として瀛船は一噸に付一分銀三個帆船は一噸に付一分銀一個の率を以て賣主より徵收し當時之を噸稅と呼へり然れとも政府若しくは官廳の購入に係るものは特に之を免除し又內地建造の外國形船舶も亦等しく之を免除したり是明治七年五月三十日租稅寮より橫濱稅關へ指令せる「內地製作船ハ外國人ニ賣却ノ節ト雖モ噸稅徵收ニ不及云々」に基けるものにして海事思想奬勵の一法たりしのみ然るに當時奸黠の徒名を內地建造に藉りて所謂噸稅の負擔の義務を免れんと企つるものさへ出て來りぬ今其一例を擧くれは明治九年大阪中之島清水某米國人所有瀛船往返丸の購入に際し內地建造船の旨を以て稅關を經由せす直に大阪府に國籍變更を出願し大阪府は其手續を了せり然るに稅關は之に對し大に疑議を挾み直に大阪府に照會して曰く

皇國人外國船ヲ買入候節ハ先ツ定則ノ稅銀相納候上受取渡シ可爲致義ニテ其邊ハ新定約稅則第八ケ條ニ明文有之然ルニ貴廳ニ於テ稅納ノ以前御免許相成候義有之ニ付去ル七年十二月中其邊御掛合及ヒ置御承諾ノ御報有之然ルニ今般米商テレジング持蒸瀛往返丸船ヘ御國旗引換有之ニ付取調候處當地中ノ島五丁目清水常七ナル者已ニ貴府御免許ヲ得買取候趣ニ有之右樣稅未納前ニ允許相成候ハ如何ノ譯ニ候哉此段及御問合候也

九年五月十八日

大阪府御中

大阪稅關

之に對して大阪府は左の如く回答せり

黃第貳千百六拾七號

當府下中ノ島五丁目清水常七儀米國テレジング商會持蒸瀛往返丸買取候處噸稅未納前ニ當府ニ於テ買取之義允許候義ニ付縷々御問合之趣致承知候然ルニ去ル七年十二月中島根縣士族大野丹外一名キルビー商會ヨリ買入候蒸瀛キヨウ丸噸稅納メ之義ニ付度々及往復候末同船之義者神戸港ニ於而製造之船ニ付噸稅ニ不及旨賣買人双方へ御申達有之候趣同年十二月五日附ヲ以而御申越相成居

候間右往返丸之義モ長崎表ニ於テ製造候旨届出候ニ付是又キヨウ丸同様之義ト相心得右様取斗候得共尚成規ニ悖リ候廉モ有之候ハヽ其段更ニ御廻報有之度御答旁此段申進候也

明治九年五月十九日

大阪府

大阪税關御中

大阪府廳印

然れ共單に長崎製造の旨を届出たりしと雖とも何等の憑るへき證左なきのみならす當税關は之を以て内地製建に係るものと認むる能はすとなし再ひ照會する處あり

蒸滊往返丸船ヲ清水常七買取リ御免許相成候ニ付及御問合候處右ハ長崎表ニ於テ製造ノ旨届出候由ニ付去ル七年十二月中島根縣士族大野丹外一名買取候キヨウ丸船同様無税ト御心得御差許之趣御回答之段致承知候然ルニ只買取人申立而已ヲ以ハ御眞用モ有之間敷義ニ被存候處右ニ付而ハ確乎タル證書有之愈長崎製造ト申義御認メ相成候事ニ候哉當關ニ而略取調候處ニテハ内國製造トモ不被存候ニ付目今取調中ニ有之因而再應及御問合候也

五月二十日

税關

大阪府御中

此に於て大阪府は初めて清水常七に對し調査の結果果して該船は長崎製造のものにあらさりしを發見し終に同人より手續書を徴し其寫を添付して左の如く回答し來れり

當府下清水常七儀外國人持蒸滊往返丸船買取之義當府於而免許一條ニ付本月十九日附ヲ以而再應御問合之趣致承知候然ル處該船製造所地名之義ハ買取人ヨリ長崎表製造之旨書取ヲ以テ届出候ニ付是ヲ證トシテキヨウ丸同様取斗候得共御書中ノ趣モ有之候義ニ付精々取調候處更ニ別紙寫之通リ買取リ人ヨリ申出候就而ハ過日山田少屬ヨリ御打合及置候通リ御取扱ノ手數相濟候ハヽ其旨御報知被降度且ツ向後内外國製造之有無ニ不關外國人持船ヲ内國人買取之義願出候節ハ御差支ノ有無兎モ角可及御問合候條右樣御承知有之度右御答旁此段申進候也

明治九年五月廿二日

大阪府

大阪税關御中

外務掛　印

（別紙寫）

以手續書御斷奉申上候

一今般神戸在留米國八十番ラレシング商會持蒸滊往返丸私へ買入候ニ付御免狀幷ニ御鑑札御下渡ノ儀奉願上候處造船ノ地所御尋問ニ付長崎造船之由書面ヲ以御届奉申上候處右ハ全承リ違ニテ造船之地所上海製造ニ而藝州水野左金吾二上吉太郎持船ニ御座候處右兩人ヨリ外國人へ賣渡ニ相成候上於長崎表修繕仕候義ヲ造船所ト承リ違ヒ仕候段全ク横文或ハ言語不通ヨリ則不都合ヲ生シ候段重々不注意何共奉恐縮候依テ此段書附ヲ以御詫奉申上候御聞濟被成下候ハヽ難有仕合奉存候以上

明治九年五月廿二日

前書之通申出候ニ付奥印

第四大區十八十區中之島通五丁目

清水常七印

右區内戸長

津田武助印

大阪府權知事渡邊昇殿

如斯して當關は更に清水常七より噸稅を徵收し其旨を左の如く通知して漸く其手數を了せり

第拾四號

米國テレジング商社ヨリ清水常七へ買取候蒸滊船ノ義者噸稅取立手數相濟候ニ付此段及御通知候也

九年五月廿二日　大阪港稅關

大阪府御中

後明治十一年十一月關稅局より横濱稅關に對して

從來外國船貿入ト內務省下附ノ免狀及管轄廳ノ鑑札ヲ証據トシテ噸稅徵收國旗引換差許セシカ爾今稅關ハ船免狀鑑札等ニ不拘彼國政府ヨリ附授セル船籍證書面ニ引合セ噸稅徵收シ總テ賣買手數相濟セ彼我國旗引換ヘ差許候事ニ決定相成候條此段及通達候也

と達せられ爾來各稅關は是れに據りて取扱ふ事となれり

四、外國船と檢疫　明治十年の初夏に當り虎列刺病漫延の兆あり且つ當時淸國廈門に於て同疫猖獗の報あるや同年七月二十七日を以て關稅局長遠藤謹助より左の如く達せられ入港船舶の檢疫取締をなさしむ

淸國廈門ニ於テ虎拉剌病流行之義ニ付別紙ノ通外務省ヨリ通知有之候旨大藏卿ヨリ被相達候就テハ其港ヘ入進ノ諸船舶中自然右病症ニ相染候者有之內地ヘ傳染候樣ノ事有之候テハ不容易次第ニ付港內取締一層嚴重相心得尙當地方官ヘモ協議ノ上適宜防禦ノ手配可致此旨相達候事

是より先同年六月既に船舶檢疫の心得を規定して之を示せり

外國船入港之節心得方

一第一外國船入港スレハ傳染病ニ罹リ候モノ、有無尋問スヘキ事

一第二病者有之節ハ篤ト容體尋問スヘキ事

一第三同斷之節該船中旅客ニ至ル迄檢官出張迄總テ上陸指留ヘキ事

一第四右尋問ノ次第急速本關幷ニ課長ヘ報知スヘキ事

一第五檢官出張ノ上指圖ニ依リテ上陸差許スヘキ事

一第六其余臨時取斗振ハ本關幷ニ課長ノ指圖ヲ待ツテ取行フヘキ事

然るに監視監吏は職として常に船舶に來往し惡疫感染の危險に直接するを以て是か豫防方法の一端として石炭酸の購入を請求し之を各自に配布して大に注意する處ありき

當今各地ニ於テコレラ病流行之趣ニ付入港之船舶監吏尋問ノ際一層注意可仕ハ當然之儀ニ候處一昨日阪府掛リ官員出關船舶尋問ノ節該病症ニ罹リ候者有之候節取計方等照會ノ儀モ有之尙以監吏補中一統ヘ心得方等相達置候次第ニ御座候者有之候節ハ尋問之監吏ニ於テ傳染ノ掛念モ不尠仍テ右豫防ノ爲石炭酸ト申藥品各自持參致シ度旨願出候尤右石炭酸ト申ハ該病豫防第一ノ藥品ノ由則阪府出張官員等不殘所持ノ樣子ニモ有之旁以右願出之趣敢テ差拒ミ候義ニモ難參然ル處右石炭酸ノ義ハ昨今府下ニ於テハ大ニ拂底之趣ニ御座候間何卒貴港ニ於テ御請求之上至急御廻送被下候樣仕度此段不取敢上申仕候也

十年九月廿四日　稅關長長岡義之殿

八等監吏　田島蕃樹

五、外國船乘込規則の發布　海外交通の便開けてより時勢の進歩に伴ひ外國渡航者の漸く多く往々政府の免許を得す密かに海外渡航を企つるの徒あるを以て明治九年三月大政官布告を以て外國船乘込規則を發布し外國船に便乘旅行せんとするものに對して一定の乘船證書を交附し以て是等密航者

の取締をなさしめき是等は元より地方廳の監督に屬し敢て稅關の關する處にあらすと雖とも茲に外國船に關する記述をなすに當り便宜左に該規則を掲けて參考に供せんとす

太政官布告第三拾號

外國船ニ乘込旅行セントスル者取締ノ爲メ左ノ通規則相定候條此旨布告候事

外國船乘込規則

第一條

外國船ニ乘込旅行セントスル者ハ出船當日或ハ一日前屬籍住所姓名及ヒ何國人所持船何號ニ乘込何港迄赴ク旨ヲ具シタル屆書ヲ其出船スル地ノ廳ニ差出シ乘船證書ヲ受クヘシ

第二條

乘船證書ハ一人一枚タルヘシ

第三條

乘船證書ヲ受取ルニハ壹枚ニ付手數料トシテ金貳拾五錢ヲ納ムヘシ

第四條

乘船證書ハ毎人親ラ出廳シテ受取ルヘシ代人ヲ以テスルヲ許サス

第五條

乘船證書ハ着港上陸ノ上其地警察官吏ニ返付スヘシ其途中一時上陸（例ヘハ橫濱港ヨリ長崎港ニ至ル者其船舶神戸港ニ卸碇シタル時用便ノタメ暫時上陸スルノ類）スル者ハ其地臨檢警察官吏ニ其證書ノ檢閱ヲ受クヘシ

第六條

乘船證書ハ一度ノ出船ニ用フルモノトス故ニ途中ヨリ上陸スル歟又ハ事故アリテ乘込ヲ止メ更ニ他ノ船ニ乘込ム時ハ最初受取タル證書ハ其出船スル地ノ廳ニ納メテ更ニ證書ヲ受取ルヘシ

第七條

乘船證書ヲ所持セスシテ乘船シタル者ハ上陸ノ節違式ニ照シテ處分スヘシ

第八條

開港場アル地方廳ニ於テハ外國船ニ乘込ントスルノ屆書ヲ差出ス者アル時ハ第一條第四條ノ手續ニ相違ナキヤヲ檢閱シ別紙雛形（別紙雛形略之）ノ證書ヲ直ニ本人ニ相渡シ手數料ヲ領收スヘシ

第九條

右地方廳ハ兼而船場ノ要所ニ於テ警察官吏ノ出張所ヲ設ケ置キ外國船出入港毎ニ若干員ヲ臨檢セシメ內國人ノ乘船又ハ上陸スル者ノ證書ヲ一々檢閱シ若シ證書ヲ所持セサル歟又ハ其證書最前ノ出船ニ請取リタルヲ其儘再用シタル歟ヲ視認メタル時ハ詳カニ其所由ヲ取糺シ證書所持セサル者ハ乘船證書ヲ受取ル手續ヲナサシメ或ハ其乘込ミヲ止ム證書ヲ再用スル者ハ違式ニ照シテ處分スヘシ

第十條

警察官吏乘船證書ヲ臨檢シ着港上陸者ノ分ハ之ヲ領收シ一時途中上陸者ノ分ハ之ヲ本人ニ還付スヘシ

ロ、內國船

六、沿海回漕船　由來我所謂大和形船舶と稱するものは常に脆弱にして遠く外洋の航行に堪へす開國以來彼我の通商貿易は唯僅かに外國船舶に據るあるのみなるを以て明治三年政府は商船規則を發布して快速堅牢の西洋形船舶の運用を奬勵する處あり明治六七年の頃に於て漸く沿海の航行に邦人所有の汽船を見るに至りしも海軍思想の幼稚なる未た進て海外通航を試んとするものあるを聞か

すされは當時にありては內國船舶は其濫船なるとを問はす貿易貨物に對して單に內地沿岸の廻漕に運用せられたるに過きす然れとも是等の廻漕船に對する取締に至りては何等の法規なかりし後明治八年二月七日太政官達を以て外國形日本船輸出入稅未納內外貨物回漕規則なるものを發布し同年四月一日より之を施行せしむるに至れり

外國形日本船輸出入稅未納內外貨物回漕規則

第一條

日本郵船會社其他日本船ニテ日本沿海回漕免許ヲ得タル外國形船舶ニ限リ自今國內各開港場間ニ輸入稅未納ノ外國貨物幷ニ貨主外國人ニテ輸出稅未納ノ內國貨物回漕差許候就テハ從來內外交涉密賣買ノ儀ハ嚴禁ノ處尙右ニ類スル所業有之候テハ不相濟儀ニ付回漕規則ヲ設ルコト左ノ如シ

第二條

凡ソ外國形ノ日本船舶ハ都テ出入港手數幷ニ諸貨物船積船卸共各開港場ニ於テハ稅關ノ所轄トス

第三條

前條ノ船滯港中ハ稅關ヨリ監吏乘勤スヘシ

第四條

前條船貨物ヲ船積シ或ハ船卸スルハ日出ヨリ日沒迄ニ限ルヘシ若シ夜中竊ニ貨物ヲ積卸スル時ハ其現品ヲ沒收シ且其品價同額ノ罰金ヲ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ

但日沒ヨリ日出迄ハ船中ノ艙口ヲ固封シ置ヘシ若シ勝手ニ開封スル時ハ其船長或ハ其會社ニ金六拾圓ノ罰金ヲ課スヘシ

第五條

甲港ヨリ乙港ニ回漕スル前條ノ船ニ未納稅內外貨物ヲ積入レ乙港ニ輸送セント欲スル時ハ其貨主或ハ其引受人ヨリ差出書（各稅關ニ用フル積送差出書式）ニ貨物ノ品種箇數記號番號元價等詳細相認メ積送ノ儀稅關ヘ願出貨物檢查濟ノ上積送免狀ヲ受ケ積入ルヘシ若シ此手數ヲ經スシテ積入ル、時ハ其現品ヲ沒收ス故ニ其船長或ハ會社タル者ハ必ス右免狀ヲ點視シ之ニ照シテ其品ヲ積入ルヘシ若シ無免狀ノ貨物ヲ船積セハ事ノ成否ヲ問ハス其會社或ハ其船長ヘ其品價同額ノ罰金ヲ課スヘシ

第六條

甲港ニ碇泊スル外國船ヨリ都合ニヨリ直ニ貨物ヲ船移シ乙港ニ積送ラント欲スル時ハ其貨主或ハ其引受人ヨリ船移回漕ノ差出書（各稅關ニ用フル船移書式）ニ貨物ノ品種箇數記號番號等詳細相認メ船移ノ儀稅關ヘ願出右免狀ヲ受ケ船移スヘキ儀ナレハ其船長或ハ會社タル者ハ右免狀ヲ點視シ之ニ照シテ其品ヲ船移スヘシ若シ無免狀又ハ免狀外ノ貨物ヲ船移スル時ハ其現品ヲ沒收シ且其品價同額ノ罰金ヲ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ

第七條

前條ノ船舶ヨリ輸出稅未納內國貨物ヲ外國船ヘ積移スルコトヲ許サス若シ密ニ之ヲ船移シ又ハ船移セント謀ラハ事ノ成否ヲ問ハス其貨物ヲ沒收シ且其會社或ハ其船長ニ其品價同額ノ罰金ヲ課スヘシ

第八條

前條ノ船貨物積入レ甲港ヲ出港セント欲スル時ハ其船長或ハ其會社ヨリ第一號ノ如ク積送貨物ノ總目錄貳枚（壹枚ハ甲港稅關ヘ置キ壹枚ハ乙港稅關ヘ送達ス）ヲ認メ稅關ヘ差出シ出港免狀ヲ受ケ出港スヘシ若シ此手數ヲ經スシテ出港スル時ハ總目錄ニ記載スヘキ品價同額ヲ罰金トシテ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ

但濫船ハ出港前一時帆船ハ出港前二十四時ヲ隔テ、此手數ヲ爲スヘシ

第九條

前條ノ船甲港ヨリ乙港ニ通航中風順ニヨリ不開港場ヘ入津スルトモ輸入稅未納ノ外國貨物或ハ貨主外國人ニシテ內國品ヲ船卸スヘカラス若シ船卸スル時ハ密商スルト否トヲ問ハス其現品ヲ沒收シ且其品價同額及ヒ金壹千圓ノ罰金ヲ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ

第十條

前條ノ船乙港ニ入港セハ其稅關ヘ第二號書式ノ如ク未納稅內外貨物ノ輸入總目錄一通ヲ差出スヘシ尤此手數ハ入港下碇後休日ヲ除キ四十八時間ニ爲スヘシ此時間ヲ過ル時ハ一日毎ニ金六拾圓ノ罰金ヲ課スヘシ

第十一條

前條ノ輸入貨物總目錄中若誤脫アルヲ覺知セハ休日ヲ除キ廿四時間ニ更正スルコトヲ得ヘシ若シ此期限ヲ過キ更正スル時ハ金拾五圓ノ罰金ヲ課スヘシ

第十二條

前條ノ輸入貨物總目錄ヲ甲港ヨリ已ニ回達アリシ積送貨物總目錄ニ照會シ過不足アル時ハ其事由ヲ糺明シ條理料然セサレハ不足ノ貨物ハ甲乙兩港間ニ於テ密商セシモノト看做シ其品物同價ノ金額並ニ金壹千圓ノ罰金ヲ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ若貨物過ナル時ハ其現品ヲ沒收シ且其品價同額ヲ罰金トシテ其船長或ハ大會社ニ課スヘシ

第十三條

前條ノ船入港手續ノ未納稅內外貨物ヲ陸揚スル時ハ其貨主或ハ其引受人ヨリ差出書（各稅關ニ用フル輸入書式ニ）貨物ノ品積箇數記號番號元價等詳細相認メ陸揚ノ儀稅關ヘ願出貨物檢查濟ノ上陸揚免狀ヲ受ケ陸揚スヘシ若シ無免狀又ハ免狀外ノ貨物ヲ船卸セハ事ノ成否ヲ問ハス其貨物ヲ沒收ス故ニ其船長或ハ會社タルモノハ右免狀ヲ點視シ之ニ照シテ其品ヲ船卸スヘシ無免狀或ハ免狀外ノ貨物ヲ船卸シ若クハ船卸セント謀ラハ事ノ成否ヲ問ハス其會社或ハ其船長ヘ其品價同額ノ罰金ヲ課スヘシ

但外國貨物ハ輸入稅上納ノ上陸揚免狀ヲ受ケ陸揚スヘシ

第十四條

前條ノ船舶便利ニヨリ此規則ニ關係スル貨物ヲ互ニ船移スル時ハ稅關ヘ願出免許ヲ受クヘシ若シ無免狀又ハ免狀外ノ貨物ヲ船移スル時ハ其現品ヲ沒收シ且其品價同額ヲ罰金トシテ雙方ノ船長或ハ雙方ノ會社ニ課スヘシ

第十五條

各港稅關ハ祝日祭日及ヒ日曜日ヲ除クノ外每日午前十時ニ開キ午後四時ニ閉スヘシ故ニ此規則ニ掲示シタル時限ト稅關ノ開閉時限トヲ計リ以テ其期限ヲ愆ルヘカラス

第十六條

此他會社或ハ船長タル者貨主又ハ代人ニ與スルト否トヲ問ハス故ニ稅金ヲ脫セント謀リ若クハ其他諸般ノ方略ヲ以テ脫稅ヲ謀ル者アレハ金壹千圓ヨリ多カラサル罰金ヲ課スヘシ若シ其事過失ニ出テ犯則ニ渉ル者アレハ此規則ニ照シテ罰スヘシ

第十七條

總テ事犯則ニ渉ル者其ニ犯俱發スル者ハ重キニ就テ處分スヘシ

第十八條

若シ此規則ヲ變更スルコトアレハ一ケ月前之ヲ布告スヘシ

第一書式

未納稅品輸出目錄

記號番號	箇數	品名	斤量或入量等	貨主姓名

內國品			
外國品			

右ハ當港ヨリ某港ニ回漕仕候タメ當港ニ於テ當某九船ニ積受候未納稅品書面ノ通聊相違無之且途中不開港場ニ於テ決シテ一箇タリトモ船卸仕間敷候以上

年　月　日

某會社總代
姓　　名　印
某九船長
姓　　名　印

某港稅關長官誰殿

第二書式

未納稅品輸入目錄

記號番號	箇數	品名	斤量或入量等	貨主姓名
內國品				
外國品				

外國品			

右當港ヨリ某港ニ回漕仕候タメ當港ニ於テ當某九船ニ積受候未納稅品書面ノ通聊相違無之且途中不開港場ニ於テ決シテ一箇タリトモ船卸仕間敷候以上

年　月　日

某會社總代
姓　　名　印
某九船長
姓　　名　印

某港稅關長官誰殿

第三書式

◎納稅品輸入目錄

記號番號	個數	品名	斤量或入量等	貨主姓名
內國品				
外國品				

右ハ某港ヨリ當港ニ回漕仕候タメ當某丸船ヲ以テ積來候未納稅品書面之通聊相違無之且途中不開港場ニ於テ一箇タリトモ船卸仕候儀決シテ無之候以上

年　月　日

某會社總代
姓　名　印
某丸船長
姓　名　印

某港稅關長官誰殿

是れ吾國の關稅に關する成文法の嚆矢なりとす是より先明治六年一月港內取締規則を發布して西洋形及ひ日本形に拘らす一般の內國船に對する入出港の手數碇泊稅の徵收其他の取締は從來運上所の取りたる事務と分離して各地方廳に於て取扱はしめ地方廳は更に船改所なるものを設けて之れか事務を執れり翌七年十一月國內廻漕規則を發布して先きの港內取締規則を廢止し依然其事務は地方廳の主管に屬せしか夫の未納稅貨物回漕規則の發布に伴ひ西洋形內國船の入出港手數其他諸般の取締は總て稅關本來の目的を達する上に於て之れか取締に任する要ありとなし同年十一月八日西洋形日本船各開港場出入規則を發布し(同十二月一日施行)同時に國內廻漕規則を撤し爾後之を稅關の取締に一任せるを以て此兩規則は相俟て船舶に關する關稅法規の一件をなすに至れり

西洋形日本船各開港場出入規則

第一條

凡ソ西洋形日本船ハ蒸滊風帆ノ別ナク橫濱神戶大阪長崎函館新潟ノ六港ニ入津スルトキハ其投錨時刻ヨリ十二時間ニ第一號樣式ノ通其港稅關ヘ屆出ヘキ事

但風潮ノ不順等ニ因リ一時無餘義入港シ十二時間ニ出港スルモノハ屆書ヲ出スニ及ハス

第二條

貨物ノ積卸ハ其港稅關ノ免許ヲ受タル後ニ非サレハ一切相成ラサル事

第三條

輸入稅未納ノ外國貨物及ヒ貨主外國人ニテ輸出稅未納ノ內國貨物回漕ノ儀ハ本年第二十號布告ニ照シ夫々手數致スヘキ事

第四條

出港セントスルトキハ必ス二時前マテニ第二號書式ノ通稅關ニ屆出ヘキ事

第五條

出入港ノ屆ヲ等閑ニスルモノハ左ノ通科料申付ヘキ事

蒸滊船　百噸迄　金拾五圓
百噸以上百噸コトニ拾五圓ヲ加フ

風帆船　百噸迄　金拾圓
百噸以上百噸コトニ拾圓ヲ加フ

(備考明治九年三月十日太政官達ヲ以テ右規則ノ第五條ヲ蒸滊船三百噸マテ金五圓三百噸以上三百噸毎ニ五圓ヲ加フ風帆船三百噸マテ金參圓三百噸以上三百噸毎ニ參圓ニ加フト改正ス)

第一號

入港御屆

一船名　蒸滊
　風帆
船主

噸數
乘組
船客　日本人
　　外國人
仕出場及月日
着港日
右御屆申上候也
明治年月日　　船長或ハ會社
某港稅關　　誰　印
御中

第二號

出港御屆
一船名　蒸滊
　　風帆
船主
噸數
乘組
船客　日本人
　　外國人
仕向場
出港日
右御屆申上候也
船長或ハ會社

明治年月日
某港稅關　　誰　印
御中

右規則の發布せらるゝや當關に於てはこれか施行上の手續を定むること左の如し

本年十二月一日ヨリ西洋形內國船荷物船積陸揚等ノ取扱手順當分ノ內左ノ通定メ候事

一西洋形內國船入港セハ監吏課ニ於テ直ニ遂尋問其報知方ハ從前ノ通取扱候事

一右船入港出港共屆書ハ開關中ハ檢査課休日或ハ鎖閉後ハ當直ノ者ニテ引請候事

一檢査課或ハ當宿直ノ者ハ右船入港屆書差出セハ監吏課ヨリ報告スル尋問表ニ記ス投錨時間ヨリ十二時間ヲ不過分ハ當港ニ陸揚スヘキ荷物ノ明細書ヲ正副二通其船司ヨリ差出サセ其副書ニ表書ノ荷物陸揚差許候也年號月日大阪稅關ト裏書シ關印ヲ捺シ一時ニ船積差許荷物ハ點檢ニ不及候事

但正書ハ統計課ニ廻シ同樣ニ綴込可置事

一右船舶ヨリ入出港共屆書差出サヤ直ニ檢査課ヨリ監吏課ヘ其屆出タル時刻ヲ附シ直ニ報知ニ及フヘキ事

一右船若シ入港投錨ヨリ十二時間中ニ入港屆不差出又ハ出港屆書不差出シテ投錨出帆等ノ船有之節ハ直ニ關長ニ具申スヘキ事

一外國人ニ屬スル荷物及稅未納品ノ船積陸揚等ノ手續ハ從前ノ手數ヲ經候儀ト可被相心得候事

明治八年十一月廿五日

爾來此規則によりて西洋形內國船の取扱をなし別に變更する處なかりき後該規則適用上時の監視課

長より部下に左の如く達し貨主の便宜を計らしむ

荷主外國人ニシテ稅濟無稅品ヲ內國蒸滊船ヨリ積卸セントスル時ハ本關手數濟ニ限リ夜中並ニ休日タリトモ船積或ハ本關迄船卸スルモ妨ケナカルヘシ且其都度別段天保山支課ヘ通知セサルニヨリ巡海中目擊ニ抵觸スル時ハ一應取糺シ不都合無之樣取計フヘシ

十一年十月九日　　監視課長

七、外航船舶及統計　明治八年三菱會社か東京丸外三隻を以て初めて上海に航路を開始せるに際し橫濱稅關は東京丸外三隻取扱見込なきものを起按し租稅寮を經由して之か認許を得たり蓋し外國通航內國船に對する取締手續の初筆に屬す今該按文に就て見れは一二特例の場合を除くの外殆んと普通外國船舶と同一の取扱にして爾來各港に於て外國通航の內國船舶に對しては一般に外國船舶同樣の取扱をなすことゝなれり而も大阪港に於ては當時未た是等外國通航內國船の出入するものなく漸く明治十六年に至り韓國より歸航したる一隻の帆船ありしを初めとし爾來漸次其數を增加するに至れり今明治六年以降同二十三年に至る入出港船舶を表によりて示せは左の如し

第壹號

年別	國籍	種別	入港 隻數	入港 噸數	出港 隻數	出港 噸數
明治十六年	日本	滊船				
		帆船	一	九七		
	合計		一	九七		
同十七年	日本	滊船				
		帆船	二七	二、一五二	二二	一、六七三
	合計		二七	二、一五二	二二	一、六七三
同十八年	日本	滊船				
		帆船	二四	一、八七六	二一	一、六七五
	合計		二四	一、八七六	二一	一、六七五
同十九年	日本	滊船				
		帆船	一三	九三四	一九	一、四九五
	合計		一三	九三四	一九	一、四九五
同二十年	日本	滊船				
		帆船	三	二四二	一〇	八三七
	合計		三	二四二	一〇	八三七
同二十一年	日本	滊船				
		帆船	二	一六六	一	八四
	合計		二	一六六	一	八四
同廿二年	日本	滊船		一		
		帆船	二	一二三		
	合計		二	一二三		
同廿三年	日本	滊船	四	二、二六六	一	四四六
		帆船	四	二六四	一五	一、一七七
	合計		八	二、五三〇	一六	一、六二三

八、內國船の賣買と入出港手數　明治六年以前にありては外國人か內國船舶を購入するに當りこれを稅關に屆出たるときは單に其出港の場合に於てのみ外國船舶に對する手數をなさしむるに過きさりしか六年十一月神阪稅關より橫濱稅關に交涉して曰

第七十七號

從來內國人所有の船艦外國人へ賣却致シ候節ハ領事ノ證書ヲ以テ屆出候ヘハ從來ノ振合ニテハ出港手數ノミニテ差許來リ候處抑右手數料ノ儀ハ洋語「エレトリー」トモ稱シ候得者元來出港入港ニ

相關シ候主意ニハ無之税關へ届出手數料十五弗取立候上商物積入差許候方可然ト存然不然届出無之外國船へ商物積入可差許道理有之間敷乍併買入船届出ノ時商物ハ不積四十八時間内ニ致出港候向ハ尋常入港ノ後四十八時間内ニ出港ノ船ト見做シ入出港ノ手數料一切不相納候テ可然哉ニ存候右ハ差向右ノ事件差起候義ニ付至急及御問合候御評議ノ上御回答有之度候

明治六年十一月

中島信行殿　　厚東樹臣
　　瓜生寅

之に對して横濱税關は左の如く回答を寄せ來れり

第七十七號ヲ以テ御國人所有ノ船舶外國人買受候節ハ手數料トシテ十五弗取立方ノ義ニ付云々御問合ノ趣承知致候御來示ノ趣旨御尤ニ候間都テ御申越ノ通御取計可然存候右及御酬候也

明治六年十一月廿一日

瓜生寅殿　　中島信行
厚東樹臣殿

斯の如くにして爾來外人か内國船を買入れ貨物の積卸をなすときは買入れの事實を以て入港と見做し成規の入出港手數料を徴收するも假令賣買の事實あるも貨物の積卸をなさずして四十八時間内に出港するときは貿易章程の明文によりて出港手數料は之れを免除せり後明治九年四月租税寮より外國人か内國船を買入れたるときは入港手數料を徴するに不及と達し爾來之を免除するに至れり

九、外航船と船籍證書　外國船の入出港に對する取締として入港手數の際其船籍證書を領事に預け其預證を税關に提出せしめ出港の際は税關の手數濟證書を領事に示して其預入れたる船籍證を受取らしむることになせりと雖も外國通航の内國船に對しては別に何等の條規なく往々出港手數をなさすして出帆することあるも之を處分するの途なきを以て明治十七年六月横濱税關に於て外國通航の内國船に對しても外國船と一樣に入港の際は其船籍證書を税關に預入れしむることに決し爾來各港税關に於ても均く其船籍證書を徴することゝなれり關税實施に至る迄は毫も變更する處なかりき

十、航海公證　明治七年八月廿七日太政官布告を以て航海公證規則を發布せり今之に就て見るに太洋又は外國に於て帝國所屬の船舶たる事を證し日本船としての保護を受くの目的を以て外國へ航せんと欲する内國船は外國駐在の公使若しくは領事に出願して其公證を受けしむるにあり蓋し當時外國交通の初歩に屬し殊に列國との國際關係も未た今日の如くならす單に吾國旗の揭揚又は船籍證書の提示のみにては充分の保護を受くる能はさるの憂ありたるを以てなり明治九年十一月大藏卿より開港場地方官に對して公證出願あるときは其都度税關へも其旨通知すへきを達示せり是れ外國通航船に關するを以て税關に於ての取締に便せん爲めなり而して翌十年三月十日關税局より

三菱會社滊船ニ於テ航海公證ヲ得タル者ト雖モ内地開港場ト開港場ノ間而已ヲ往復スル節ニ限リ當分之内内地廻漕船同樣ノ手續ヲ以テ内國人ノ荷物積卸可被差許候尤モ他開港場へ寄港スルモ現ニ上海へ向ケ出船シ又ハ上海ヨリ歸港スルモノハ從前之通可取扱義ニ候條此旨相達候事

十年三月十日　關税局長　遠藤謹助

と達し其公證を得たるものと雖とも特別の場合に於て内地廻漕船同樣の取扱を許せり而して右公證手續の如きは税關の直接管掌以外に屬すと雖も間接事務の上に關係あるを以て左に該規則を示して參考に資せん

第八十八號

航海公證規則別紙之通相定候條此旨布告候事

第九篇　船舶　西洋形船舶

第一條

航海公證ハ日本國所轄船ノ外國地方或ハ大洋ニ於テ日本船タルヲ證セシメ並ニ保護ヲ得セシムルモノナリ

第二條

外國ヘ航セント欲スル日本國船ハ（日本形西洋形トモ）船主又ハ船長最寄ノ開港場官廳ヘ船籍證書ヲ添ヘ出願シ公證ヲ受クヘシ

第三條

各開港場官廳或ハ外國在留日本公使又ハ領事ハ凡ソ見積一箇年分或ハ半箇年分公證ヲ外務省ヨリ受取置キ外國ヘ航セント欲スル船主又ハ船長ヨリ公證願出ル時ハ船積證書ヲ目的トシ之ヲ渡スヘシ

但船籍證書ハ閲覽ノ上本人ヘ差戻スヘシ

第四條

船長若シ事故アリテ公證ヲ逸失スル事アラハ內國ハ再ヒ開港場官廳ヘ外國ハ其國或ハ最寄ノ國ニ在留スル日本公使又ハ領事ヘ再ヒ第二條ニ照準シ出願シ之ヲ受クヘシ

但公使領事在留ナキ國ハ此限ニアラス

第五條

各開港場管廳或ハ外國在留日本公使又ハ領事ハ船長ヨリ公證逸失ノ次第ヲ陳告シテ更ニ公證ヲ受ケ度旨願出ル時ハ第三條ニ照準シテ之ヲ渡スヘシ

第六條

公證ヲ受クル者ハ其手數料トシテ金壹圓ヲ納ムヘシ

第七條

船長ハ各開港場官廳或ハ外國在留ノ日本公使又ハ領事ヨリ受ケタル公證ヲ其歸着スル所ノ開港場官廳ヘ三十日內ニ返納スヘシ

第八條

各開港場官廳ハ船長ヨリ返納スル公證ヲ每年十二月外務省ヘ納ムヘシ

第九條

各開港場官廳ハ若シ船長第七條ノ手續ヲ怠ル時ハ罰金トシテ金三圓テ取立ヘシ

第十條

各開港場官廳ハ若シ公證ヲ願受ケス海外ヘ航セシ者アラハ罰金トシテ金十圓取立ヘシ

第十一條

各開港場官廳及外國在留日本公使又ハ領事ハ每年十二月右手數料罰金トモ外務省ヘ納ムヘシ

但外務省ヨリ罰金ハ司法省手數料ハ大藏省ヘ送致スヘシ

爾來大阪府に於て屢々公證を下附し其都度之を當關に通知し來れり今其例を示せは左の如し

黃第六百五十八號

長崎縣對馬國第三十二大區四小區國分町梶山喜七船々長赤木幸四郎朝ヨリ朝鮮國釜山港行之航海公證願出候間第二百九十二號之公證本日下ケ渡置候條右樣御承知有之度此段及御通知候也

明治十一年二月廿七日

大阪港稅關御中

大阪府

面して該規則は明治十二年五月布告第十九號を以て之を廢止せり

十一、船難報告及證書　明治十年八月七日太政官布告を以て船難報告及ひ船難證書の受授手續を

發布せゝ是れ風雨其他の海難によりて外國人に關係せる貨物に對して生したる損失ありたるときは其原因其他月日場所等を證する爲め船長の申請によりて稅關長又は外國駐在の領事に於て之か證明を與ふるにあり今左に全文を揭けて說明に換へん

第五十五號

外國人ニ關係アル貨物ヲ積載シタル西洋形商船ニシテ船難報告又ハ船難證書ノ手數ヲ要スル時ハ其船長ヨリ我國內ニ於テハ最寄稅關又外國ニ於テハ該地在留我領事館ヘ申出ヘシ即チ授受手續別紙ノ通被定候條此旨布告候事

明治十年八月七日

太政大臣　三條實美

船難報告（英語シップス プロテスト）　船難證書（英語エキステンテツト シップスプロテスト）

船難報告ハ暴風雨其ノ他ノ海難ニ由リ損害ヲ生セリト思考スル時擧メ其現實ヲ報告スル迄ノモノトス故ニ危難誇合社ニ向テ請合金ヲ要求スル充分ノ憑據トナスニ足ラス唯後日船難證書ヲ記スル必要ノ引證ニ供スルモノトス

船難證書ハ現ニ損害ノ多少ヲ明確シ得タリトキ其損害ノ原因及ビ之ヲ生シタル月日場所等ヲ詳細記載ス可キモノニシテ其記入ノ件ハ眞誠確實ナリト思惟スルトキハ危難誇合社ニ向テ請合金ヲ要求スルニ充分ノ憑據ト爲スヘキモノトス

授受手續

第一條　各商船ノ船長ヨリ遭難ノ實況ヲ申出ルトキハ其地ノ稅關長或ハ領事其船長ノ申立ニ從ヒ第一號書式ノ書面ヲ造リ船長ニ其名ヲ手書セシメ然ル後自ラ船名姓名ヲ手書シテ之ヲ公證シ一通ハ其廳ニ收メ置他ノ一通ハ船長ニ下渡ス可シ

第二條　船難報告ハ着船ノ後二十四時ノ內ニテ手數ヲナシ若シ此時限ニ後ルヽトキハ其公證ヲ與ヘサルヘシ然レトモ船長ヨリ其遲延ノ次第ヲ辯明シテ十分滿足スヘキ理由アル時ハ其次第ヲ報告書ニ記載シテ其公證ヲ與フヘシ

第三條　船難證書ハ大略第二號書式ニ從テ記スヘク而シテ船長運轉手及ヒ他ノ一名ノ海員ヲシテ稅關長又ハ領事ノ目前ニ於テ同號甲ノ明告狀ヲ記サシメ且稅關長又ハ領事ハ同樣乙ノ奧書ヲ以テ之ヲ公證スヘシ

第四條　船難證書ハ一航海中ニ遭遇シタル變難及ヒ生シタル損害ノ實況ヲ報告スルモノニ付航海日誌其他公證ニ供スヘキ書類ニ由リ或ハ信任スヘキ海員ノ申立ニ從テ眞確ノ事實ヲ採蒐記載セシムヘシ

第五條　船難證書ハ必ス貳通ニ記シ其一通ハ船長ニ下ケ渡スヘシ

第六條　稅關又ハ領事館ニ於テ收メ置キタル船難證書ヲ一覽セント欲スルカ又ハ其寫ヲ願受シト請フ者アルトキハ其廳ノ公務時間中ハ何時ニテモ之ヲ聽ルス可シ但シ寫ヲ附與スル時ハ證書ト相違セサル樣緊密ニ讀ミ合セ且第二號丙ノ書式ニ從テ奧書ヲナスヘシ

第七條　船長以下ハ者船難證書ヲ了解シ能ハサル者或ハ全ク讀ミ得ザル者アレハ其明告狀ニ連署ヲナサシムルノ以前ニ於テ丁寧ニ之ヲ讀ミ聞セ充分其意味ヲ了解セシムヘシ

第八條　船難報告及ヒ船難證書トモ國字ヲ原文英字ヲ譯文トナシ必ス原譯兩文ヲ以テ記スヘシ然レ共場合ニヨリ原文ノミヲ記シ又ハ譯文ノミヲ記スルコトアルヘシ

第九條　船難報告船難證書及ヒ船難譯書ノ寫ヲ付與スル時ハ左ノ手數料ヲ收入スヘシ

船難報告	壹通　金壹圓
船難證書	壹通　金五圓

但シ寫壹通ヲ添フ

正本ニ添フタル者ヲ除クノ外ハ

船難證書寫	壹通　金壹圓

第十條　第二號書式用紙ハ適宜タルヘシト雖トモ第一號書式用紙ハ稅關又ハ領事館ノ費用ヲ以テ

製造シ收入シタル手數料ハ毎半年分取束ネ大藏省ヘ上納スヘシ

船難報告

明治何年（千八百七十何年）何月何日何一船商荷ヲ積載シ何國何々港ヨリ開帆シテ明治何年（千八百七十何年）何月何日何國何々港ニ到着シタル何々港何々丸（番號何番）船ノ船長何之誰明治何年何月何日何々港稅關長取ハ領事何之誰ノ目前ニ自身出頭シ何々ノ事故ニヨリ目下ノ損害ヲ懸念シ其次第ヲ報告スルニ付則爰ニ之ヲ登記候也

船長　何之誰

右拙者之目前ニ於テ請名候段相違無之候也

明治何年何月何日

何々港稅關長又ハ領事何之誰

船難證書

明治何年（千八百七十何年）何月何日何地何々號船ノ船長何之誰運轉手何之誰海員何之誰何國何々港稅關長又ハ領事何之誰ノ目前ニ自身出頭シ誠心眞意ヲ以左ノ事實ヲ公報ス（以下航中ノ獨況遭難ノ場所月日損害ノ多少等其他詳細ノ報告ヲ記入スヘシ）

是ニ於テ右出頭人ナル何之誰何月何日右稅關長又ハ領事ニ於テモ亦之ヲ證セリ

（甲）

右何々號船ノ船長何之誰運轉手何之誰海員何之誰等前文記載ノ件々ハ眞正確實ノ事實ニ相違無之此明告狀ヲ以テ相證候也

船長　何之誰

運轉手　同

海員　同

（乙）

右拙者ノ目前ニ於テ證名候段相違無之候也

年　月　日

船難證書寫ノ奥書

（丙）

前記證書ノ寫ハ當廳ニ收メ置キタル本書ニ就テ相認メ候ニ付本書ト照査シテ分毫ノ差異無之依テ拙者ノ記名官印ヲ以相證候也

年　月　日

何々港　稅關長又ハ領事　何之誰　印

十二、船切符發賣所　明治四五年の交以來神阪間及近海航行の小蒸滊船は曾に外人所有の小蒸滊船のみに止まらす邦人にして小蒸滊船廻漕業を營むもの漸次增加せるを以て當時運上所は是等廻漕業者に對し荷客の檢查を受くへきを命し且つ滊船切符の發賣は其指定せる場所に限り途上に於て發賣するを禁し小蒸滊船荷客取扱人より連署請書を徵して固く制止に背かさらしむ（第四篇第一章十八節參照）後該切符發賣所の散在せるは取締上不便なりとし五年九月再び取扱人に對して右發賣所は一ヶ所に限るへきを命せり茲に於て取扱人は連署を以て當關構內に其發賣所を設置せんと欲し直に連署請願して曰

乍恐口上

一小蒸滊船便乞人札渡候儀混雜仕候ニ付去三日從外務御役所一統之者共被爲召出候上右場所一ヶ所ニ取極候樣被爲仰渡依之右場所取設候迄假役所仕度乍恐御關內御高札場東手明御地面之內（二

間ニ九尺取置小家一ケ所取設度候何卒當分之内御拝借仕度奉願上候尤御用之節ハ早速取除可申候間此段御聞届被成下候ハヽ難有仕合奉存候此段奉願上候以上

明治五年壬申九月十五日

大阪港
御運上所

小蒸氣船取扱人
森田市五郎
中岡平治郎
藤田源七
藤田伊三郎
花澤龜松
柳井伊兵衛
辻本熊太郎
岩田彌助
岩本丈助
本田長兵衛
木村重助
安田岩吉
市瀬菊治郎
小野元七

運上所は直に之を許可し取扱人は之れに對する請書を呈出せり

奉差上御請書之事

一私共取設候小蒸氣船便乞人切符賣出方追々混雜仕候ニ付今般仲間中申談何レニモ引移可相成貳間ニ九尺程之假小屋組建御藏脇へ据置當分之間辨用仕度一同ヨリ奉願上候處御聞届被下難有仕合奉存候右就而ハ御場所柄之儀ニ付火之元大切ニ仕候儀ハ勿論便乞人等之儀モ不都合無之樣精々心附夕六時限右小屋〆切不取締無之樣嚴重ニ〆リヲイタシ置可申候尤御場所御入用之節ハ御沙汰次第何時ニ而茂速ニ取除候樣御達之趣一同奉畏候爲後證連印仕御請書差上申處仍而如件

明治五年壬申九月十六日

租稅寮大阪港
御運上所

取扱人連署

同年十月前記取扱人等は小蒸氣船申合規則なるものを定め之を屆出つ

口上覺

一小蒸氣船札賣場取設候ニ付別紙之通一統申合規則相定メ候間此段御聞濟被爲成下候樣奉願上候以上

明治五年壬申十月五日

小蒸氣船取扱人
惣代　藤田源七
森田市五郎

外國事務御廳

小蒸氣船申合規則

第一條

第九篇　船舶　西洋形船舶　四百十三

一乘船人切符賣渡方ニ付頭取毎日定勤之事

第二條

一夫々客船出港之節掛リ取扱人立會之事
幷ニ船印相建刻限ヲ張出ス事

第三條

一出港刻限時計ニ合セ無相違出港可致事

第四條

一札賣場其外諸入費トシテ百枚ニ四拾錢宛社中ヘ可申出事

第五條

一船勝手ニ付刻限ヲ早ク出ス事不苦事

第六條

一御場所柄ノ義ニ付別而火ノ元大切ニ可致事第一也出張所夕六時〆切之事

第七條

一家人ヘ對シ船々ノ善惡決而申事無用之事

右之條々堅ク相守可申事

小蒸滊船取扱人
頭取　藤田源七
森田市五郎

後六年一月港内取締規則の發布と共に船舶に對する諸般の取締はすへて是を地方廳に委ねたるを以て自然滊船回漕業者の關係を絶つに至れり

十三、官船と入出港手續　たとへ外國船舶と雖も政府若くは官廳の入出港手數を免し且貨物の積卸に對しても特に便宜の取扱をなさしめたりし而して明治五年以降海運の發達を告けんとすると共に各官廳所屬の小蒸滊船の如きも亦漸次其數を增加せるを以て遂に明治九年九月廿七日太政官より

院省使府縣

軍艦ヲ除クノ外各廳所屬ノ船舶及一時雇入ノ内國船トモ各開港場出入ノ節ハ明治八年十一月第百六十三號布告西洋形日本船各開港場出入規則ニ從ヒ其港稅關ヘ手數可致此旨相達候事

と達示し以て其取扱方を一定せしめ同年十月横濱稅關より租稅寮へ入出港を閑等に附したる塲合は官廳所屬船といへとも該規則第五條の過料を徵收すへきや否やの伺に對しても同樣心得へき旨の指令ありたるを以て爾來該規則に準して其取扱をなせり降て明治十八年神阪稅關長潁川君平より大阪兵庫の兩港に於ける水上警察署に屬する小蒸滊船に對して入出港手數をなさしむるは頗る困難の事情ありとし左の如く伺出てたり

明治八年第一月第百六十三號布告西洋形日本船各開港場出入規則ハ發行之後總而官衙ニ屬スル小滊船ノ類タリトモ規則之通取扱來候義勿論ニ候處近來大阪港神戸港共該府縣之水上警察ニ屬スル小滊船ニシテ其管内遭難船救援等時機緊急之際其時々右手數を經候義頗困難ノ事狀アル已ナラス本則第四條出港二時間前屆出云々等實施相成兼候譯モ有之隨而該規則ノ精神ニ於テモ或ハ是等ノ分迄包括シタルモノニ而無之哉トモ被存候條是等ハ右規則ノ範圍外ト看做シ酌量ノ取扱致候テモ可然哉此段相伺候也

神戸稅關長
三等主稅官　潁川君平印

主稅官長鄕純造殿

之に對して

伺之趣水上警察ニ屬スル小瀛船ハ出入港屆出ヲナサシムルニ及ハサル義ト可心得事

明治十八年十二月十九日　主稅官長　鄕　純　造　印

と指令あり茲に於て水上警察署所屬の小蒸瀛船に對しては總て入出港の手數を免除するに至りき

十四、木津川流域と西洋形船舶　由來大阪港域は四川の流域を抱括せるを以て船舶の出入密商逋稅の取締に對する設備の如きも大阪開港の當初にありては特に周到なる取締規則を定め安治川以下木津尻無傳法の諸川に船番所を配置し安治川の流域以外に於て外國貨物を積載せる船舶は其日本形たると西洋形たるを論せす猥りに出入するを嚴禁し爾來此慣例に基きて西洋形船舶は其內外國船の別なく安治川を限りて入碇せしめ其他の諸川に於ては特に稅關の免許を得すして出入繫留することを許さゝりき然るに時勢の推移は西洋形內國船の增加と共に明治十年以降に至りては瀛船帆船の出入するもの非常に多く爲めに安治川の流域のみを以てしては貨物の積卸又は運漕の不便あるを以て船主或は貨主より屢々木津川入出の自由を得んことを迫れり然れとも既に十餘年來の慣行と一方に於て取締上の設備に憂ふる處あるを以て之か處置に惑ひ終に當關より狀を具して之か指揮を關稅局に仰けり

元第九號

西洋形日本風帆船木津川口ニ碇泊ノ義ニ付伺

從來大阪港ニ於テ內地回漕ノ西洋形船ハ外國船ト同シク安治川ノ一方ニ碇泊致候ヲ以而其船ノ出入幷荷物ノ揚卸ハ天保山監視課出張所ト本關トニ於テ便宜取扱ノ處近來ノ帆船ハ多從前ノ北國通船ヲ改造セシモノナレハ專ラ木津川筋ニ出入ノ荷物アルヲ以而同所ニ於テ揚卸ヲナスニ船便ナレハ商人ハ之ヲ要シ候得共前顯ノ如ク安治一方ノ碇泊ハ先前ノ例規ナレハ他ノ西洋形船同樣安治川ニ碇泊シ艀ヲ以テ陸地ノ間ニ荷物運搬致候然レトモ其事タルヤ頗ル不便ナルヲ以テ或ハ木津川口ニ繫泊ノ特許ヲ乞ヒ候儀モ有之候處今日ニ至リ右等ノ船數漸々相增此許ヲ得ントスルモノ之レナキニアラス今一人ニ之ヲ許セハ他人ニ之ヲ許サヽルヲ得ス可相成場合ニ有之候去リ迚一港ノ區域中ナルニ安治川ニノミ碇泊セシメ木津川口ニハ不相成モノトシ之ヲ禁スルハ事理ニ相背クノミナラス其法苛小ニシテ商人ノ不便トナリ之カ爲メ一港ノ盛衰ニモ相關シ候譯ニ有之候左レトモ今內國船ノ碇泊ハ一般ニ木津川口ニ於而モ可ナリトスルトキハ別ニ取扱所ヲ同口ニ置カサレハ難相成是亦官家ノ冗費ヲ生シ可申儀ナレハ右ハ如何取計而可然哉至急何分ノ御指令相成候樣致度此段相伺候也

明治十二年二月一日

神阪稅關長

長岡義之

關稅局長遠藤謹助殿

之に對して關稅局は左の如く指令し木津川口の碇泊を許可せしむ

第一一一〇號

伺之趣一般ニ木津川口碇泊差許候樣可致右ニ付別段取扱所設置ニ不及候條取扱向ノ儀ハ本關ニ於而適宜處分可被致候事

明治十二年十月十八日

關稅局長　吉原重俊　印

然れとも是單に木津川口繫留を許すといふに過きすして地域の上下は依然封鎖せられ船主貨主に於ては實際何等の效果を受くる能はさるを以て遂に十四年二月再ひ關稅局に向ひ上申する處あり曰

內地廻漕之西洋形船木津川へ入出被差免度儀ニ付建議

當港出入之西洋形船（蒸滊帆走）漸次其數ヲ增加シ今ヤ〇名ヲ異ニスルモノ殆ント百餘艘ノ多キニ及ヒ隨テ河岸ニ碇泊スル者通常四十艘ニ下ラス以是入出港之際其繁雜名狀シ難ク就中帆走船ノ如キハ最モ困難ヲ極メ候趣ニテ船主荷主等ノ苦情見聞ニ堪ヘサルモノアリ夫々當港從來ノ慣行ニテ安治川ヲ除クノ外外國船同樣他ノ諸川ヘ入船（困難船修繕船ノ此限リニ非ス）スルヲ許サス故ニ木津川ノ如キ安治川ニ勝ルノ良港ヲ有スルモ更ニ其用ヲ爲サシメス之レカ爲メ常ニ船主荷主等ノ費用ヲ損失スルコト夥多ナルヲ以テ輓近木津川ヲ以テ定繫港ト爲シ直ニ同所ヨリ出入致シ度段出願スル者陸ミ有之左レトモ先例ニ倣ヒ差留置候得共元來木津川ト云ヒ安治川ト稱スルモ等ク是レ大阪港ノミ豊內國人民カ內地ノミヲ航海スルノ船舶ニ對シ外國人ト取結タル港規則ヲ以テ直ニ外國船同樣之ヲ施行スルノ理アランヤ況ヤ該川ノ如キハ蓋シ大阪繁榮之一大本源ナレハ最モ出入ノ便宜ヲ與ヘサルヘカラス然ルヲ即今ノ如ク聊カ船形ノ異ルカ爲メ均ク內國人民カ所有セル內地廻航ニテ同一ナル內國產物ヲ運搬シナカラ甲ハ自由ニ出入ヲ得ルモ乙ハ出入スルコトヲ得サルカ如キ理由アルヘケンヤ然レトモ此ハ是レ明治八年十二月一日以來開港場ヘ出入之節ハ必ス稅關ニ屆出且ツ稅關ノ許可ヲ得サレハ積荷ノ揚卸ヲ得サルコトニ定メラレタルニ根スルモノナレトモ當地ニテ最モ便宜ノ聞ヘアル木津川ヘノ出入ヲ免サヽルハ如何ニモ不公平ノ取扱ニシテ決テ政府ノ御旨趣ニモ非サルヘク樣被察候間以來木津川入出ノ船舶ハ恰モ神戶港ノ兵庫港ニ於ケルカ如ク稅關ニ於テハ之ニ關係セス一切地方官ノ取扱ニ任セルカ將タ同所ヘ稅關出張所ヲ設ケ其取扱ヲ爲致候歟右兩樣ノ中何レニカ御改正御決定相成候樣致度此段建議候也

斯くの如くにして屢々本省と往復交涉する處あり終に外國貨物を積載せさる船舶に限り日本形たると西洋形たるとを問はす木津川流域の出入を許さしむ

十五、碇泊稅及國內回漕規則　明治六年一月十二日太政官布告第八號を以て港內取締規則を發布し開港場其他の港灣河川等に出入する內國商船に對し其西洋形なるや日本形なるやを問はす出港手數碇泊稅の徵收及其他の取締はすへて是を地方廳の手に委ね翌七年十一月閣內廻漕規則を發布し（八年二月一日より施行）之れと同時に先きの港內取締規則を廢止せり然れとも該規則は依然地方廳の手に於て施行せられき然るに恰も仝月七日彼の外國形日本船輸出入稅未納貨物廻漕規則の發布となり（仝四月一日より施行）該規則第二條によりて開港場に於ける外國形日本船舶の入出港手數及貨物の積卸に關する事務は茲に再ひ地方廳の手を離れて稅關の所轄となれり然れとも從來地方廳に於て徵收せる碇泊稅は稅關に於て之を徵收すへきや否に付て仝年二月橫濱稅關より租稅寮に伺出つる處ありしか右碇泊稅は稅關に於て之を徵收すへく其手數料は國內廻漕規則に依るへきの指令ありしを以て仝年四月一日以後其碇泊稅は各港稅關に於て之を徵收せり然るに仝年十一月更に彼の西洋形日本船各開港場出入規則の發布となり仝年十二月一日より實施せらるゝと同時に國內廻漕規則は停止せられたるを以て爾來碇泊稅其他入出港手數料の徵收を廢せり今左に國內廻漕規則の全文を揭げ之れか參考に資せん

國內廻漕規則

第一條　商船甲港ヨリ乙港（定繫港）ヘ向ケ出帆ノ事

凡ソ諸商船日本形西洋形ニ不拘甲港ヨリ乙港ヘ出帆スルトキハ甲港ノ船改所或ハ其筋ノ役所ヘ第一號甲ノ書式ニ從テ記シタル願書二通ニ第二號ノ積荷目錄二通ヲ添テ差出スヘシ改所或ハ役所ニ於テ其積荷目錄ニハ改濟ノ檢印ヲ捺シ願書ヘハ第一號乙ノ書式ニ從テ奧書シ一通ハ役所ニ留メ置一通ハ船長ヘ下渡シ出帆可差許事（書式雜形略之以下皆同シ）

但甲港ノ船乙港ヘ入津シ其積荷ヲ揚陸シ更ニ他ノ物品ヲ積込內港ヘ出帆シ又ハ甲港ニ歸帆スルモ本文同樣ノ手續タルヘシ尤定繫港ニ限リ碇泊稅相納ルニ不及事

第二條　商船甲港ヨリ乙港ヘ入津ノ事

凡ソ諸商船甲港ヨリ乙港ヘ入津セハ着後二十四時間ニ其港船改所或ハ其筋ノ役所ヘ第三號甲ノ書式ニ從テ記シタル願書二通ニ船免狀或ハ船稅鑑札甲港ノ出帆免狀積荷目錄ヲ添ヘ差出スヘシ改所或ハ役所ニ於テハ第三號乙ノ書式ニ從テ記シタル入港免狀下渡シ荷物揚陸可差許事

第三條　商船免狀船稅鑑札等所持セサル者及ヒ入港屆等閑ニスル者科料ノ事

船免狀或ハ船稅鑑札幷ニ出帆甲港ノ免狀無之者或ハ入港屆等閑ニ致シ候者等有之ニ於テハ船ノ大小ニ從ヒ船稅規則ノ割ヲ以テ第十五條ニ照準シ科料可申付事

第四條　商船他港ヨリ定繫港ヘ歸着ノ事

凡ソ諸商船乙港ヨリ甲港定繫港ニ歸着セハ總テ第二條ニ準スヘシ但積荷無之節ハ第四號ノ書式ニ從テ記シタル屆書ニ乙港ノ免狀及船免狀船稅鑑札ヲ差出スヘシ尤入港免狀ハ下渡サヽル事

第五條

凡ソ諸商船出帆入港其免狀相渡候節ハ船ノ大小ニ拘ハラス免狀一通ニ付手數料トシテ貳錢宛可相納事

第六條　碇泊稅ノ事

定繫港ヲ除クノ外諸商船港內ヘ碇泊セハ第十五條ノ通リ碇泊稅ヲ納ムルニ不及ト雖トモ無證印ノ船有之時ハ本年第二十一號布告ニ照準處分スヘキ事

第七條　商船風潮不順ニ依リ入港ノ事

凡ソ諸商船風潮ノ不順ニ依リ一時無餘儀入港シ二十四時間ニ出帆スルモノハ屆書ヲ差出シ碇泊稅ヲ納ムルニ不及ト雖トモ右時間以上碇泊スルモノハ其港船改所或ハ其筋ノ役所ヘ第五號甲ノ書式ニ從テ記シタル屆書ヲ差出シ且碇泊稅ヲ納ムヘシ改所或ハ役所ニ於テハ第五號乙ノ書式ニ從テ記シタル免狀可下渡事

但買入積込候節ハ第一條ノ通タルヘキ事

第八條　商船避難ノタメ碇泊シ積荷賣買ノ事

諸商船一時避難ノタメ碇泊シ其船ノ都合ニ依リ其港ニ於テ積荷揚陸賣拂ヒ候節ハ通常入津ノ手續ヲ以テ第六號甲ノ書式ニ從テ記シタル願書船稅鑑札出帆免狀積荷目錄トヲ船改所或ハ其筋役所ヘ差出スヘシ改所或ハ役所ニ於テハ第六號乙ノ書式ニ從ヒ第二條ノ通リ免狀可下渡事

但買入積込候節ハ第一條ノ通タルヘキ事

第九條　出入港相定メ候郵船ノ類手數料並ニ碇泊稅ノ事

郵船ノ類甲乙兩港ノ間平生往來相定候分例令ハ東京ト橫濱大阪ト神戶ト如ク其間ニ限リ往來致シ候類出入ノ每度手數料碇泊稅取立候テハ時間相費營業ノ差支ニモ可相成ニ付右等ノ分ハ願ノ上一ケ月分出入ノ度數ヲ計リ手數料碇泊稅共碇泊稅ハ定繫港ヲ除クノ外都テ規則ノ割合半方宛半方前納候上ハ殘半方上納ニ及ハス取纏每月初旬中ヲ限リ第號甲ノ書式ニ從テ記シタル手形ヲ以テ一時上納スルニ於テハ第七號乙ノ書記ニ從テ記シタル免狀可下渡事

第十條　港則違犯ノ事

凡ソ諸商船出入共開港場ハ勿論其他ノ港內ニ於テモ積荷或ハ荷足品ヲ揚卸スル時ハ波戶場ノ順序等總テ其港ニ於テ定メタル規則ニ從フヘシ若シ之レヲ犯スモノハ第十五條ニ照準シ科料可申付事

第十一條　通船無之土地新規堀割口錢取立ノ事

從前通船無之土地ヲ願ノ上新タニ堀割運輸ノ便ヲ開キ候者堀割入費支消ノタメ年季ヲ定メ通船ヨリ口錢取立候類ハ此規ノ例ニアラサル事

第十二條　出帆願書其他諸書式ノ事

出帆願書其他ノ諸書式ハ雛形ノ通各府縣ニ於テ黑字ノ通上梓朱字ノ分其時々塡書候樣致シ置キ從テ記シタル免狀可下渡事

船改所或ハ其筋役所ニ於テ可下渡事（書式雛形略之）

第十三條　輸出入品届書ノ事

出入港品ハ品名箇數尺度斤量元價幷ニ其仕向ケ場仕出場等精細第八第九號書式ノ通記載致シ月末毎ニ各府縣ヨリ租稅寮ヘ可差出事（書式雛形略之）

第十四條　各港出入船舶届書ノ事

各港出入ノ船舶ハ管轄船形船名積高幷ニ仕出場入港日仕向ケ場仕出場等精細第十號書式ノ通記載致シ各府縣ヨリ租稅寮ヘ可差出事（書式雛形略之）

第十五條

碇泊稅幷ニ諸科料等ハ都テ左ノ算則ニ照準シ可取立事

碇泊稅

五十石以上貳百石迄	毎拾石	壹錢
貳百壹石以上五百石迄	毎拾石	七厘五毛
五百壹石以上	毎拾石	五厘

船免狀船稅鑑札所持セサル者科料

日本形船	毎百石	金五圓
西洋形瀛船	毎百噸	金七拾五圓
西洋形帆走船	毎百噸	金五拾圓

出帆免狀所持セサル者科料

日本形船	毎百石	金四圓
西洋形瀛船	毎百噸	金六拾圓
西洋形帆走船	毎百噸	金四拾圓

入港届等閉ニスル者科料

日本形船	毎百石	金參圓
西洋形瀛船	毎百噸	金四拾五圓
西洋形帆走船	毎百噸	金參拾圓

積荷無之船歸港届等閉ニスル者科料

日本形船	毎百石	金貳圓
西洋形瀛船	毎百噸	金參拾圓
西洋形帆走船	毎百噸	金貳拾圓

港則違犯ノ者科料

日本形船	毎百石	金壹圓
西洋形瀛船	毎百噸	金拾五圓
西洋形帆走船	毎百噸	金拾圓

但西洋形船噸數ヲ以テ唱ヘ候分碇泊稅ニ限リ壹噸ハ我六石七斗二升ノ割ヲ以テ石ニ直シ可取立事

第十六條

五十石未滿ノ小船ハ碇泊稅手數料等相納ルニ不及事

（備考）該規則施行以來改廢セラレタル事項ヲ左ニ蒐ム

今般第百二十三號ノ通リ廻漕規則布告候ニ付右ニ照準可取計但稅金手數料ハ上計帳ヘ組込大藏省ヘ諸科料ハ可法省ヘ納付可致此旨相達候事（七年十一月使府縣太政官達百四十八號）

昨七年十一月第百二十三號公布相成候御國内廻漕規則中第二號雛形積荷目錄ノ儀ハ願人ヨリ爲差出候儀ニテ各府縣ニ於テハ雛形冊尾ノ一葉ヲ彫刻イタシ目錄ニ綴添割印ノ上下渡シ候義ト可相心得此旨爲念相達候事（八年一月三十一日乙第七號内務省達）

明治七年十一月第百二十三號布告國内回漕規則中第十五條碇泊税算則左ノ通改正候條此旨布告候事（八年二月五日第十九號布告）

第十五條

一碇泊税幷ニ云々

碇泊税

五十石ニ付金五錢ト定メ二百石迄ハ十石毎ニ一錢宛ヲ增ス

二百十石ニ付同二十錢七厘五毛トス五百石迄ハ十石毎ニ七厘五毛宛ヲ增ス

五百十石以上ハ十石毎ニ五厘宛ヲ增ス

明治七年第百二十三號公布國内廻漕規則書式ノ内積荷目錄ヘハ賣買品ニ限リ輸出ノ節必ス其代價ヲ記載爲致候儀ト可相心得此旨布達候事（明治八年二月十九日内務省達甲第六號）

明治七年十一月第百二十三號布告國内回漕規則第十五條中船免狀船税鑑札所持セサルモノ科料ノ條下ヘ左ノ通但書追加候條此旨布告候事（明治八年三月四日布告第三十八號）

第十五條

船免狀船税鑑札所持セサル者科料

日本形云々

西洋形瀛船云々

但十石二十石等ノ端數モ右ノ割合ヲ以テ取立十石未滿ノ石數ハ切捨ヘシ以下諸科料ノ算則總テ之ニ準ス

明治七年十一月第百二十三號布告國内廻漕規則第十五條中港則違犯ノ者科料左ノ通改定候條此旨布告候事（明治八年四月五日布告第四十九號）

港則違犯ノ者科料

日本形船
西洋瀛船　金二十圓以内
西洋形帆走船

但書從前ノ通

明治七年十一月第百二十三號布告國内廻漕規則第十六條ヘ左ノ通但書追加候條此旨布告候事（八年五月三日布告第六十九號）

國内廻漕規則

第十六條

五十石未滿云々

但艀漁船幷湖川運用船ハ積石ノ多少ヲ問ハス碇泊税手數料等相納ルニ不及事

一今般回漕規則施行候ニ付テハ明治三年正月布告候商船規則中第十項廢止候條此旨布告候事（明治八年三月八日布告第四十號）

明治七年十一月第百二十三號布告國内回漕規則中第十七條左ノ通追加候條此旨布告候事（明治八年五月十七日布告第八十六號）

第十七條

一日本形西洋形ノ諸商船製造買入レトモ自分船免狀及ヒ船税鑑札ヘ定繫港名ヲ記載スヘシ尤從

前渡シ有之免狀及ヒ鑑札ヘ定繫港名ヲ記入スルハ本船入津ノ節其他船改所ニ於テ船長ヨリ其港名ヲ申出サセ免狀ハ船名ノ下鑑札ハ表面ノ右方ヘ記入シ而シテ其船主ノ本官廳ヘ通知シ本管廳ヨリハ免狀ノ分更ニ內務省ヘ可屆出事

但本文港名記入ノ儀ハ本年十一月三十日ヲ期限トス故ニ其期限以內ハ各地入津ノ本船長ニ於テ定繫港名綻ト難申分ハ記入ニ及ハス且船主營業ノ都合ニヨリ記則ノ後定繫港ヲ他ニ換ヘントスル時ハ其旨本管廳ヘ申立更ニ許可ヲ可受事

十六、模擬船に對する疑義　外國形日本船輸出入稅未納外貨物回漕規則及西洋形日本船各開港出入規則の發布施行以來西洋形船舶は其外國通航船なると沿海航通船なるとを問はす入出港手數若くは貨物積卸に關する事務は總て稅關の手に據りて處理せられ船體の區別は一に其取扱を異にするのみならす實に關稅警察上に於ける緊要の事項に屬せり而も當時內地造船業の進步に伴ひ和洋折衷船即ち模擬船の建造漸く其數を加へき偶々明治十三年十一日愛知縣人淺井某の所有帆船愛運丸當港へ入碇したりしか同船の構造は外部は殆んと西洋形なるも內部は全く日本形に屬し既に愛知縣に於ても日本形船としての鑑札を下附せり然らは當關は之を以て直ちに日本形船と見認むへきものにあらすと爲し愛知縣に照會して曰

貴縣下名古屋區押切町淺井佐吉船帆走愛運丸義本月廿四日當港へ入港候ニ付尋問ニ及候處該船儀貴縣ニ於テハ日本形船ノ御取扱ニ相成居候趣ニハ候得共當關ノ見認ニテハ全ク西洋形帆走船ニ相違無之即明治八年第百六十三號ノ公布ニ隨ヒ入出港届ハ勿論荷物積卸等ニ至ル迄夫々手數ヲ不經ニ於テハ難差許義ニ候得共事情酌量ノ上今回限リ差許置候條該船歸港ノ上ハ西洋形帆走船ノ御取計ニ相成候樣致度依而船略圖及鑑札寫相副此段及御掛合候也

明治十三年十一月廿七日

大阪稅關

愛知縣御中

之に對して同縣より同船新造の際圖面を附して其取扱方を內務省に伺出たるに右は日本形船と見做し取扱ふへきの指令ありたる旨を回答し來りしを以て當關は更に關稅局長に對して稟議して曰

愛知縣下淺井佐吉持船愛運丸ノ儀ニ付伺

愛知縣下名古屋區押切町淺井佐吉持船帆走愛運丸儀去十三年十一月廿四日當港へ入港候ニ付尋問爲遂候處該船儀愛知縣ニ於テハ日本形船ノ取扱ニテ即チ鑑札等モ日本形船同樣ノ者ヲ附與致シ居候得共當關ノ見認ニテハ帆檣網具ノ裝置ハ固ヨリ柁ヤリ出シノ取附方等其外形全ク西洋スクーナ形ニ相違無之尤モ船材ノ組立方ニ至リテハ少々西洋流ニ異ナリト雖モ外部ヨリハ容易ニ見認難ク勿論西洋形トハ其ノ形容ヲ指シタル語ニテ船骨木材ノ組立如何ニハ不係儀ト相考ヘ該船歸港ノ上ハ西洋形帆走船ノ取計ニ相成候樣致度旨直ニ該縣ヘ及掛合候處即チ別紙寫ノ通リ該縣ヨリ地第五十四號付ヲ以回報致シ來リ右ニ據レハ客年該船新規製造ノ際詳細圖面ヲ附シ取扱方ノ儀本省ヘ相伺候處既ニ本省ヨリハ日本形船ト看做シ成規ノ通リ取扱可然旨御指令相成候趣キ然レトモ該船ノ如キハ現ニ前述ノ如ク其形容西洋形帆走船ニ相違無之者ヲ區々タル船骨組立ノ如何ニヨリ即今日本形船同樣ニ致シ置候テハ他ノ西洋形帆走船ニ對シ幸不幸ノ差不尠且ツ將來奸商等ノ爲如何ナル弊害ヲ釀生スル哉モ難計旁以爨ニ本省ヨリ愛知縣ヘノ御指令御更正ノ上向後右等ノ船種ハ都而西洋形船ノ取計ニ可相成樣致シ度候依而別紙船形略圖相副此段上申仕候也

大阪稅關長　高橋新吉

明治十四年一月

關稅局長蜂須賀茂韶殿

然れとも關稅局は和洋船洋の區別は外部の形狀如何を問はす一に內部の構造に問ふて決し假令外部の西洋形なるも內部構造日本形なるときは稅關所轄外のものとして取扱ふへきを指令せり

第二章　日本形船舶

十七、外航日本形船舶、中古以前我邦人にして所謂日本形即ち大和船を操つて遠く海外に渡航せる勇壯なる事蹟は歷史の上に於て屢々見るところなり然るに德川府幕の初期に於ける夫の鎖國令は端なく邦人の海事思想を頓挫せしめ以來大和船にして到底遠洋の航行に堪ゆるものなかりしも時勢の推移は遂に安政の條約となり外國交通の途は茲に再ひ開始せられ海上唯一の交通機關たる我船舶は彼の西洋形船舶の堅牢快迅に比して到底企及すへきにあらさるを以て船舶改造の奬勵方法として先つ明治三年商船規則を發布し爾來官民の間に於て西洋形船舶の購入建造漸く行はれ年を逐ふて海事思想の發達を喚起せしめたるも一方に於ては價格の不廉と運用の未熟は依然として日本形船舶の建造を續行せしめたるを以て政府は其構造の脆弱にして遠洋の航行に宛つるは頗る危險なるものあるを以て明治二十年以降五百石積以上の船舶建造は斷して之を禁止せしむ時に明治十八年七月八日なりき

第十六號

一日本形五百石以上ノ船舶ハ明治二十年一月ヨリ其製造ヲ禁止ス

右奉勅旨布告候事

明治十八年七月八日

太政大臣公爵　三條實美

農商務卿伯爵　西鄉從道

勢ひ斯の如きを以て吾日本形船舶は大概ね內海に於ける運輸機關として宛用せられ其偶一葦帶水の清韓及露領沿岸に通航せしものあるも只僅に魚族及大豆肥料等を搭載せるに過きすして是を統計に徵するも實に寥々として僅指するに足らす今明治六年より明治二十三年に至る外國通航船として當港に出入せる日本形船舶を示さは左の如し

明治十六年	入港					出港				
國籍	種別	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數	
日本形（戎克船）	瀛船									
	帆船									
合計										
十七年	日本形（戎克船）	瀛船								
		帆船								
合計										
十八年	日本形（戎克船）	瀛船								
		帆船	一	一	一	一	一	一	一	一
合計			一	一	一	一	一	一	一	一
十九年	日本形（戎克船）	瀛船								
		帆船	二	二	二	二	二	二	二	二
合計			二	二	二	二	二	二	二	二
二十年	日本形（戎克船）	瀛船								
		帆船	五四	四七五	五四	四七五	五四	四七五	五四	四七五
合計			五四	四七五	五四	四七五	五四	四七五	五四	四七五
二十三年	日本形（戎克船）	瀛船								
		帆船	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
合計			一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三

而して是等日本形船舶にして其外國通航に屬するものに對する稅關に於ける取扱は即ち西洋形外國貿易船と毫も異なる處なかりし而して後明治十年七月九日政府より布告第五十二號を以て外航日本形船舶は大小の別なく國旗を揭揚せしむ

第五十二號

自今外國へ渡船ノ日本形商船ハ大小ノ別ナク國旗ヲ揭揚可致此旨布告候事

但國旗ノ寸法ハ明治三年正月布告商船規則中三種ノ內小形ノ分ヲ可用事

是れ大洋又は外國に於て我國旗の下に於て保護を受けしむるの趣旨たるや論なし

十八、艀船及客船　上來既に記述したる如く大阪港自然の配置は大船巨舶の碇泊に適せすとして殊に神戸港の發達に伴ひて外國貿易船の出入年を追ふて減少し外航船舶は悉く神戸を以て最終港となすに至れり去れは大阪港に於ける輸出入外國貨物は皆艀船によりて廻漕せられ明治十六年以降清韓國貿易の發達と共に外航船舶の出入稍盛ならんとして而かも地理上本船は直に安治川流域を遡ること能はさりしを以て常に川口波止場を距る約五哩の遠きに投錨し漸く艀船によりて荷客の輸送をなすの狀況なるを以て大阪港に於ける外國貨物の運輸機關は殆んと艀艇によりてなされたりと云ふも過言にあらす是より先明治六年三月當關に於ては大阪府と協議して輸出入品運送及客船規則を規定し是等艀艇に關する取締に任せり

輸出入品運送及客船規則

第一條

一大阪港ニ輸出入ノ貨物運送船及客船渡世向ノ儀者稅關所轄ニ歸シ候間殊更渡世人ヲシテ運送ノ利ヲ得セシメ且內外人民ヲシテ運送艀下ノ便ヲ得セシメ傍ニ密商脫稅ヲ防遏サセンカ爲ニ次條ノ規則ヲ相設ケ候間右船ニ差配人者勿論船夫一同稅關ノ示令ニ從ヒ規則相守可申事

第二條

一外國ヘ往復スル御國船幷港內碇泊ノ外國船等都テ稅關ニ係リ候貨物揚卸運送或ハ右船々ニ往復スル客船等稅關ヨリハ號旗相渡シ大阪府廳ヨリハ渡世鑑札相渡候間船夫銘々鑑札ヲ所持シ日中ハ號旗ヲ建テ夜中ハ號燈ヲ點シ可申右號旗鑑札等所持無之分ハ一切右渡世不相成候間常ニ大切ニ備置可申事

第三條

一右運送客船渡世致シ候者ハ圖式ノ通筒袖半天着用爲致可申事

第四條

一號旗鑑札所持無之モノ右職業相營候者勿論ニテ右ニ類シ候稼方致シ候者ハ其船取押ヘ早々稅關ヘ可訴出一應調査ノ上大阪府ヘ引渡於同府至當ノ處分可及候事

第五條

一港內碇泊ノ外國船ヨリ陸揚或ハ船積スル貨物ハ日出ヨリ日沒迄ヲ限リ夜中ハ一切持卸不相成規則ニ付右時限後貨物運送致ス間敷乍併夜中揚卸ノ許可ヲ得タル者ハ此限リニ非サル事

第六條

一密商脫稅ヲ謀ル者或ハ稅關檢印ノナキ貨物或ハ運送ヲ促スニ怪疑アル時ハ速ニ稅關又ハ立番ノ監吏ニ報告スヘシ時宜寄相當ノ賞ヲ與フ若其品密商脫稅等ニテ稅關ニ沒收致シ候ハヽ賣却代價ノ半高被下候事

第七條

一右密商脫稅ヲ謀ル奸詐ニ與スル歟或ハ默許シテ之ヲ運送スル者等發覺スル時ハ大阪府ヘ引渡同府ニ於テ至當ノ所分ニ可及候事

第八條

一陸揚スル貨物船積有之稅關波止場ニ夜泊スル連送船ハ立番ノ監吏ヘ屆出其示令ヲ受相繫ヘキ事

第九條

一右運送船客船トモ稅關ノ波止場ノ外ハ船客貨物共陸揚船積一切不相成候事

但石炭砂利等別段ノ許可アル品者此限ニ非サル事

第十條

一各外國船ヨリ揚卸シ運送シタル貨物箇數及ヒ來往ノ船客人員共其翌朝第十時過ニ稅關ヘ可屆出事

第十一條

一外國船ヘ往來スル船客ハ叮嚀取扱遣シ暴慢ノ所爲アルヘカラス尤病人等ニテ困却スルヲ見受候節ハ懇切ニ介抱遣シ決テ不情ノ取扱致スヘカラサル事

第十二條

一運送船客船賃錢ハ相對ヲ以相當ノ賃錢受取可申然トモ當港不案內ノ旅客ト見掛ケ不相當ノ賃錢ヲ貪リ候等決テネタリケ間敷義申掛候儀不相成候事

第十三條

一運送船客船ハ船主船夫ノ住所名前等稅關及ヒ大阪府廳ヘ相屆置キ向後右渡世ノ開休トモ其節ニ稅關ヘ願出ヘキ事

第十四條

一新規號旗號燈下ケ渡及ヒ引換ノ節等ハ手數料トシテ左ノ金額相納可申事

大號旗　金三十錢
小號旗　金廿五錢
號燈　金廿五錢

一大阪府ヨリ鑑札相渡候條稅金ノ儀ハ壬申年九月改正ノ通積石ノ一石ニ付一ヶ年銅錢五錢宛同府ヘ可相納候事

第十五條

一前件ヶ條規則相背候モノハ其事柄ノ輕重ニ因リ大阪府ヘ引渡至當ノ所分可有之候得共全ク違約ニ屬スルモノアル時ハ金三十錢ニ踰サル左ノ違約料可取立事

一號旗ヲ遺失スルモノ　金三十錢
但天災ニ罹リ遺失スルモノハ其事實承リ確證アラハ十三章ノ如ク手數料ヲ納メ新規號旗下ケ渡シ可申事

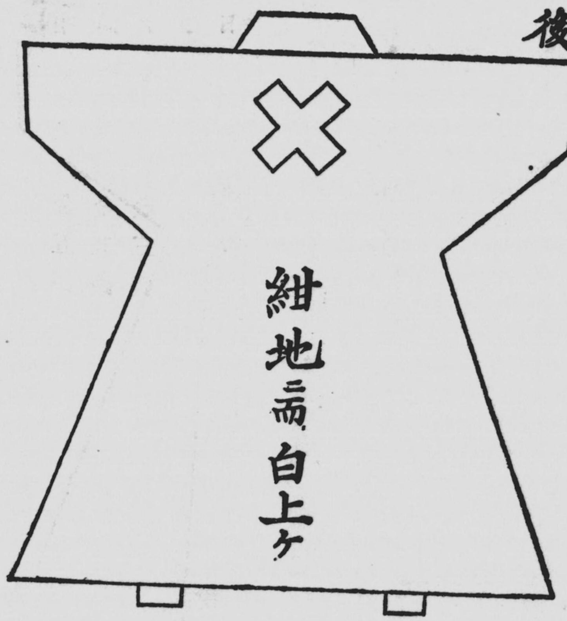
一日中旗ヲ掲ケサルモノ　金五錢
一夜中號燈ヲ掲ケサルモノ　金五錢
一印伴天着セサルモノ　金三錢

右規則堅相守可申事

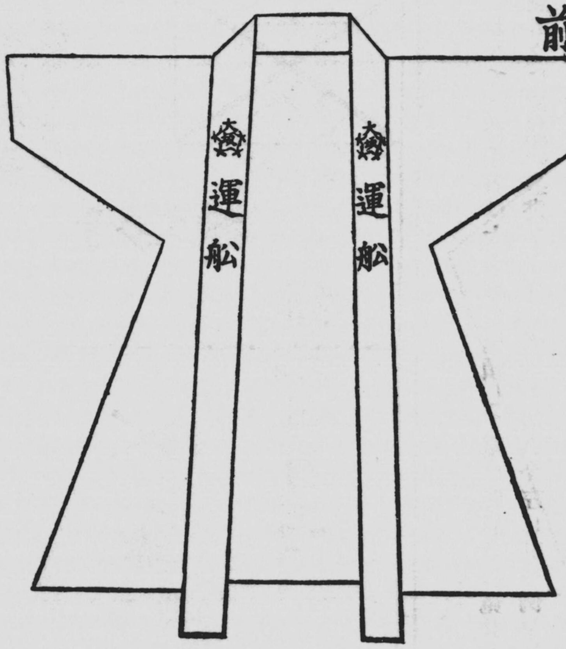
明治六年三月一日

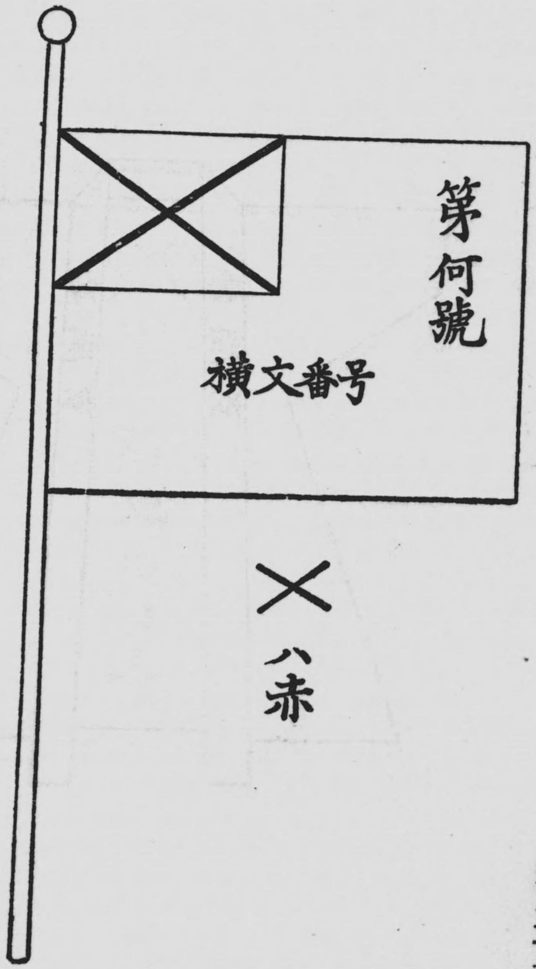
（別紙圖式）

後



前





該規則發布以前にありては營業者は大阪府に出頭して單に開届けの免許を得然る後戸長連署を以て
税關に出頭し税關も之に開届の裏書をなすに過ぎさりき今左に其一例を掲けん

乍恐以書奉願上候

一私義小四ッ足茶船渡世之義

阪府御廳ニテ御聞濟被爲成下候ニ付右船御運上所前波止場先ニテ諸鑑船差支無之様渡世仕度奉
存候間右御聞濟被爲成下候得ハ難有仕合ニ奉存候以上

小大組第貳十區富島町
吉井重太郎

戸長
藤澤紋三郎

外務御局

（朱書）開届候萬一荷物等積載候節ハ逸々運上所へ可届出事
壬申七月九日

然るに該規則發布以來營業者は先つ同業差配人の手を經て府廳に出願し其受けれる鑑札を添付して
更に當關監吏課に願書を提出せしめ而して後號旗及ひ號燈を下付せり次て明治八年六月十三日内務
省達丙第三拾六號を以て各開港場府縣へ

港内艀及ヒ客船取締ノ義從來税關ニテ取扱來候處自今右事務ハ都テ地方廳ニ於テ取扱候儀ト相心
得税關へ協議ノ上不取締ノ儀無之様適宜ノ方法相立施行可致此旨相達候事
と達せられ是等艀艇の取締はすへて地方廳の管掌に歸せしむ是より先當關は租税寮の達示によりて
艀船引渡の件を大阪府に照會して曰く

艀船及客船之義ハ當關ノ所轄ニ有之候處今回該件ハ舊ニ復シ各港共其地方官之所轄ニ歸シ且已來
取締方法設定之節ハ不都合無之様地方官ト遂協議候様本寮ヨリ達越候間此段及御通知候就テハ從
來之艀規則ハ取消度候ニ付於貴府更ニ取締規則御設置相成度右草案御調相成候ハヽ一應御照會有
之様致度此段及御懸合候也

八年五月十四日

大阪府知事宛　　租稅權助　長岡義之

茲に於て大阪府は直に當關と協議して前規則を刪除訂正し同年六月發布施行せしむ即ち左の如し

輸出入品運漕及客船規則

第一條

一大阪港輸出入之外國船貨物運漕及客船渡世向之儀ハ運漕舟之便ヲ得セシメンカ爲相設候條取締總代之者ハ勿論船夫一同其公布ニ從ヒ規則相守可申候事

第二條

一外國ヘ往復スル御國船幷港内碇泊之外國船ヘ運漕或ハ右船々ニ往復スル客船等號旗號燈筒袖半天等所持シ日中ハ號旗ヲ建テ夜中ハ號燈ヲ點シ可申右之品々常ニ大切ニ備置可申事

第三條

一港内碇泊之外國船ヨリ陸揚或ハ船積スル貨物ハ日之出ヨリ日沒迄ヲ限リ夜中ハ一切揚卸不相成規則ニ付右時限後貨物運漕致間敷乍併夜中揚卸許可ヲ得タルモノハ此限ニアラサル事

第四條

一右船ニヨリ陸揚及積入ノ荷物ハ稅關波止場ニ限リ揚卸致候規則ニ付若其荷主他ノ場所ヨリ上ケ卸シヲ要シ候ハヽ其旨直ニ稅關ヘ報知スヘシ是ヲ隱シ置時ハ其荷主ニ荷擔セシ者ト可見做候事

第五條

一外國船ヘ往來スル船客ハ叮嚀ニ取扱遣シ暴慢之所爲アルヘカラス尤病人等ニテ困卸スルヲ見受候節ハ懇切ニ介抱遣シ決シテ不情之取扱致スヘカラサル事

第六條

一運漕船客船賃錢ハ相對ヲ以相當之賃錢請取可申然レトモ當港不案内ノ旅客ト見ワケ不相當ノ賃錢ヲ貪リ或ハ風波モナキニ格外ノ賃錢ヲ貪リ候等決而ネタリケ間敷義申掛候義不相成候事

第七條

一新規業體之者有之候節ハ取締之者等ト取調且休業ノモノ共府廳ヘ可屆出候事

第八條

一前件ヶ條規則相背候モノハ其事柄ニ因リ裁判所ヘ引渡至當之所分可有之候得共自然組合相外レ候樣之事件有之候節ハ府廳ヘ可屆出候事

右規則堅相守可申候事

明治八年六月

（圖式從前ノ通ニ付略之）

而して先きに稅關に於て下渡したる號旗及號燈は營業者の申請によりて依然使用する事を許可せりしか降て明治廿二年に至り大阪府は艀船營業者の增加せるを以て其規則改正の必要を認め之か改正案を添附して當關に協議し來りしを以て當關は之に回答して曰

地第四七號

貴府下各港及四區接續河川内ニ於テ荷客運漕ヲ營業スル艀船取締規則御布令ノ御見込ヲ以テ該規則案相添御協議之趣領御即閲覽致候處該規則全體ニ於テ聊カ意見モ之無候得共唯附則文面ニ神戸港ヨリ回送貨物ノ如キハ安治川水上警察署ヘ願出標旗ノ貸渡ヲ得サレニ陸揚難出來樣相成居候處右等之貨物ハ大抵稅未濟船ニシテ之ヲ陸揚センニハ該標旗ノ貸渡ヲ乞ハサルヲ得サルニ付其内空シク時間ヲ費ヤシ貨物ハ搭載之儘波止場ニ繫泊シ本關ニ於テハ密脫之懸念モ有之其不取締不鈴候

且貨主ニ在テモ是等手數ノ爲メ頗ル迷惑ヲ來シ可申ニ神戸港之如キハ當地ヨリ回送ノ貨物ヲ神戸港碇泊ノ本船ニ積入ルルモノハ標旗ノ貸渡ヲ願候得共其回送シ來レル艀船ヲ以テ直ニ陸揚スルモノハ標旗ヲ要セサル事ニ相定マリ居候ニ付テハ本港ニ於テモ右同樣神戸港等ヨリ回送之上直ニ陸揚スルモノハ標旗ノ貸渡ヲ要セス其艀船ヲ以テ直ニ碇泊船ヘ積込ノモノニ限リ之カ貸渡ヲ乞フ事ニ御一定相成候樣致度此段御答ニ及候也

明治廿二年四月廿三日

大阪府知事　西村捨三殿

大阪稅關長　顯川君平印

茲に於て大阪府は調査改訂して終に同年十二月艀船營業取締規則を編成し之を通牒せり

警五五六八

艀船取締規則ノ義ニ付本年四月十一日警第一六九五號ヲ以テ及御協議候處同月廿三日地第四七號ヲ以テ御回答ノ次第モ有之候ニ付其後再應兵庫縣ニ照會ノ末協議調候間別冊ノ通制定シ來年一月一日ヨリ施行ノ見込ヲ以テ本月六日發令致シ置候御承知相成尙實施ノ上可致御打合義モ可有之候得共此段豫メ及御通知候也

明治廿二年十二月九日

大阪稅關長　顯川君平殿

大阪府知事　西村捨三

（別冊）

◎船營業取締規則

第一條　艀船營業トハ小廻船ヲ以テ繫泊船ニ客ヲ送迎シ又ハ貨物ヲ積入及陸揚スルモノヲ云フ其大阪府下ノ各港及ヒ大阪市並西成郡内ノ河川ニアリテ單ニ貨物ノ廻漕ヲ爲スモノ亦之ニ準ス曳船營業ニシテ前各項ノ營業ヲ爲ストキハ其使用スル被曳船ニ對シ本則第二條第一項第四條第十八條第十九條第二十條ヲ除クノ外總テ之ヲ適用ス

第二條　艀船營業ヲ爲サントスルモノハ族籍氏名年齡及每船ノ繫泊所ヲ記シ出願允許ヲ受クヘシ家族又ハ雇人ヲシテ船夫ノ業ヲ執ラシムルモノハ其族籍氏名年齡ヲ記シ屆出各別ニ取締鑑札ヲ受クヘシ

第三條　本業ニ係ル願屆ハ特ニ定メタル場合ノ外安治川水上警察署ニ差出スヘシ

但和泉國各港ノ營業者ニ在リテハ便宜上最寄水上警察署巡査派出所ニ差出スコトヲ得ル

第四條　左ノ事項ニ該當スルモノハ允許ヲ與ヘス

既ニ與ヘタル後ト雖トモ其之ニ觸レ若シクハ觸タルコトヲ發見シタルトキハ允許ヲ取消スヘシ

但第一項ニ觸ルヽモノハ爾後ノ行跡ニ依リ特ニ允許スルコトアルヘシ

一强窃盜詐欺取財又ハ賍物ニ係ル罪ヲ犯シタルモノ

二未丁年者ニシテ後見人ナキモノ

三白痴風癲者

四他人ノ名義ヲ以テ出願シタルモノト認ムルモノ

第五條　前條第一項第三項第四項ニ該當スルモノト認ムルモノハ船夫取締鑑札ヲ與ヘス既ニ與ヘタル後ト雖トモ其之ニ觸レ若クハ觸レタルコトヲ發見シタルトキハ鑑札ヲ返納セシムヘシ但第一項ニ觸ルルモノハ爾後ノ行跡ニ依リ時ニ鑑札ヲ與フルコトアルヘシ

第六條　艀船ハ當府管内ニ一定ノ繫泊所ヲ有スルモノニ限ルヘシ

第七條　營業者ハ艀船ノ使用前每船ノ鑑札寫ヲ添ヘ屆出檢査ヲ受ケ船體檢査證ヲ受クヘシ又每年

十月中指定シタル日時場所ニ於テ檢査ヲ受船體檢査證ニ檢印ヲ受クヘシ
但定期檢査期限内ト雖トモ破損汚敗セルモノハ修繕ヲ命シ若クハ使用ヲ禁止スルコトアルヘシ

第八條　船體檢査證ハ船内内部ノ見易キ箇所ニ釘付スヘシ

第九條　營業者ハ雛形ニ倣ヒ毎船ノ標旗ヲ調製シ届出檢印ヲ受クヘシ

第十條　左ノ場合ニ於テハ五日以内ニ届出鑑札又ハ檢査證ハ返納シ若クハ書換又ハ再渡ヲ乞ヒ標旗ハ消印又ハ再調シテ檢印ヲ受クヘシ

一、族籍氏名ヲ改メ又ハ轉任シタルトキ
二、鑑札又ハ檢査證又ハ標旗ヲ毀損シ若クハ其文字ノ不明ニ屬シタルトキ
三、廢業又ハ艀船ヲ賣却讓與解船又ハ使用ノ禁止ヲ受クルトキ
四、船夫ヲ解雇シ又ハ其失踪死亡シタルトキ
五、後見人ヲ變更シタルトキ

第十一條　鑑札檢査證標旗ハ賣買讓與貸借スルヿトヲ得ス

第十二條　就業中鑑札ハ携帶シ標旗ハ舳艫見易箇所ニ掲クヘシ

鑑札ノ開示ヲ求ムルモノアルトキハ之ヲ拒ムヲ得ス

第十三條　甲板ナキ艀船ト雖トモ海上衝突豫防規則ニ規定スル燈籠ヲ備ヘ置キ夜中ハ必ス點火スヘシ

第十四條　荷客ノ取扱ヲ鄭重ニナスヘキハ勿論老幼婦女ノ乘船スルトキハ勉メテ保護ヲ加フヘシ

第十五條　故ナク荷客ノ運漕ヲ肯セス又ハ約束ノ外ノ地ニ揭卸スルコトヲ得ス

第十六條　荷客搭載中ハ猥リニ其船ヲ離ルヘカラス

第十七條　積量過分ノ荷客ヲ搭載スルコトヲ得ス若シ過分ト認ムルトキハ臨時制限セシムルコトアルヘシ

第十八條　荷客ノ運賃ハ同業者ノ協議ヲ以テ一定シ届出スヘシ其變更セントスルトキハ亦同シ此運賃ハ判明ニ記載シ各船夫寄場及船内見易キ箇所ニ揭示スヘシ

第十九條　前條定額以上ノ運賃ヲ請求スルコトヲ得ス

定額以内ノ運賃ト雖トモ漕船主又ハ其他ノモノヨリ當然支拂フヘキモノハ乘客荷主ニ請求スルコトヲ得ス

第二十條　船夫寄場ノ位置及習慣ニ於テ定タル右寄場重立タル者一名ノ住所氏名ヲ届出ヘシ其變更シタルトキ又同シ

第二十一條　外國船及外國航行ノ内國船ニ搭載スル荷客ノ船積又ハ陸揚ヲ爲ストキハ特ニ左ノ各項ヲ遵守スヘシ

一、本條ノ艀船ハ大阪市及西成郡内ニ一定ノ繫泊所ヲ有スルモノニ限ルヘシ
二、本條ノ營業ヲ爲サントスルトキハ其旨届出第九條ニ揭クル標旗ノ文字ハ赤色ヲ用ユヘシ
此標旗ハ他ノ荷客ノ運漕ニ用ユルコトヲ得ス
三、荷客ヲ積載又ハ陸揚セントスルトキハ其旨大阪稅關ニ届出認可ヲ受クヘシ
四、稅關認可以外ノ貨物ヲ搭載スルコトヲ得ス
五、荷客ノ船積又ハ陸揚ハ北區富島町波止場稅關前ニ限ルヘシ
六、貨物ノ船積又ハ陸揚ハ日出ヨリ日沒マテニ限ルヘシ
若シ此時限ニ了ラサルトキハ稅關指定ノ場所ニ碇泊スヘシ
七、神戸港ニ回漕シタル貨物ハ陸揚又ハ船積前同港稅關ニ届出認可ヲ受クヘシ又途中ニ於テ陸

揚又ハ他船へ積移スヘカラス若シ天災等ノ爲メ止ムヲ得スシテ之ヲ爲シタルトキハ速ニ大阪稅關若クハ神戸稅關ニ屆出ツヘシ

第二十二條　本則第二條第七條第八條第九條第十條乃至第十九條及第二十一條ニ違背シタルモノハ一日以上十日以下ノ拘留ニ處シ又ハ五錢以上一圓五十九錢以下ノ科料ニ處ス

附則

兵庫ノ艀船營業者ニシテ同縣規定ノ標旗鑑札ヲ所持スルモノハ特ニ當府ノ允許ヲ受クルヲ要セス神戸大阪兩港間ノ回漕ニ係ル外國輸出入貨物ノ積卸ヲ爲スヲ得ヘシ

標旗雛形

一尺一寸

水第何號

大

阪營業艀船

府　營業者

一尺六寸

地白雲齋文字黑

番號

鑑札雛形略ス

船體檢査證雛形略ス

十九、艀船會所　大阪神戸間に於ける外國貨物の艀船廻漕の漸く盛なるに伴ひ艀船營業者の益々增加せるを以て明治六年五月之か取締上の方法として營業者の重なるものを招集して艀船積載の貨物品名其數量等を取調へ日々之を監吏課に屆出てしむるの責任を帶はしめ尙ほ之か手數料として一隻に對して其賃錢の二割を艀船持主より徵收する事を許し且つ其事務所を稅關附近に建設すへきを指命せるを以て右總代等は之に要する地所借用の件を願出る處あり

乍恐口上

一私共儀上荷茶船營業之者ニ御座候處此度外國人貨物幷客船請負被爲仰付候ニ就テハ當御稅關近邊へ外國貨物客船會所取建候樣被爲仰渡候ニ付右場所見繕ヒ候處外務御局南手ニテ明地面有之候ニ付右地所拜借奉願上候處御取調中ニ付彼是延日相成候ニ付右會所取建候迄當時當稅關御制札場裏手ニ而一坪半斗地面拜借仕板圍ヒ雨覆ヒ仕候舟方休息所相設ケ右場所ニテ荷請差配仕度候樣奉存候尤焚火之類ハ決テ相用申間敷候間右願之通御聞濟被爲成候ハヽ難有仕合奉存候以上

明治六年第六月十日

上荷茶船持惣代

南堀江三番町

柳川政右衛門

京町堀通二丁目

田中長右衛門

安治川南二丁目

井上善三郎

若松一番町

稅關御局

茲に於て當關は直に之を許可して其事務所を置かしむ當時之を艀船會所又は艀船社と呼へり

二十、艀船の賃銀問題　艀船の賃錢に付ては已に明治元年十一月在阪佛國副領事の注意によりて當時運上所長官五代才助は天保山沖碇泊の本船或は神戸よりの郵書幷に貨物輸送の艀船及苦力の賃銀表を定め之を一般に布告して不當の賃銀を貪るを得さらしめたり然れとも元と是等賃銀の如きは物價の騰落又は他の事情によりて變動する事あるの又止むを得さるや論なしされは明治六年三月前に掲けたる運送船及客船規則を定むるに當り第十二條に於て單に相對を以て之を定め不當の賃銀を貪るへからすと命し深く是に干渉せさりき然るに新たに艀船會所の設置せらるゝや差配人等の獨斷を以て遽かに賃銀を昂上せしめたるを以て當時艀船の顧客たる在阪清商等は大に其不當を鳴らし書を大阪府外務課に致して之か救濟を訴へ外務課は之を當關に移牒し來りしを以て當關は直に右差配人に就て糺明し之れを在神稅關長に上申せり

艀船會社之者共過當之運賃ヲ貪リ候趣ヲ以テ別紙飜譯ノ通リ清商共ヨリ訴出之由外務課ヨリ掛合申越候間差配人共承リ糺候處是迄當港船賃之義ハ區々ニ出候時ノ形勢ニ因テ高下有之賃價迚ハ無之今般會社取設ケ以來神戸同會社ノ定價ヲ基本トシテ監吏課ヘ屆之上則百五拾石積ハ六兩三分其他右之割合ニ應シ清商申立之賃錢ニ取定メ荷艀貸渡候儀ハ順番ヲ設ケ兼テ旗章申受タル者ト雖トモ必ス會社ヘ屆其定價ヲ增減スルヲ禁セシ趣申立右ハ神阪兩港運賃同一ニシテ船方銘々先ヲ競ハス或ハ廉下ニ過キ或ハ過當之賃ヲ貪ルノ憂モ無ク公平之良策ニ似タルト雖モ神戸ト大阪自ラ諸色ノ價高下有之一概ニモ難論殊ニ是迄五十石積ニテ壹圓五拾錢位（清商之申立ニテハ百五十石貳圓之處會社取設ケ以來俄ニ貳圓七拾五錢ニ騰貴致シ候テハ同社ヘ過當之賃錢ヲ貪ラセ陰ニ關ヘ其益ヲ得ル哉之疑惑ヲ生シ終ニハ外國人之苦情ヲ釀スニ至ラン此ノ差配人職掌ハ旗章ヲ配付シ專ラ拔荷密積等之事ニ注意スヘシト雖トモ前件ノ如ク定價極メ順番ヲ定テ船頭ヲシテ自已ノ欲スル所ヲ得セシメサル時ハ所謂モノポリーノ權ヲ差配人共掌握シ却テ船頭ハ自由之權ヲ失ヒ彼カ奴隷ニ等シクスルハ不條理ニ被存候因テ向後之處旗章下渡セシ後賃錢取極メ或ハ順番等ノ儀ニ付而ハ差配人共之ニ關係セス船頭銘々之勝手ニ其荷主トノ應對ニ任セ候樣申渡候而ニ如何有之候哉此段相伺候也

十一月一日

（別紙）

當時艀船社ニ於テ自儘ニ荷船ヲ引込賃錢相貪候儀ニ付私共清國商人中以書面願上候是迄大阪ヨリ神戶ヘ相廻リ候日本荷船賃錢百五拾石積賃金貳兩（此處刻下錢貳拾貫文）之價ヲ以雇來候處艀船相立候以來船賃外法高直相成百石積賃金壹兩貳步（此錢十五文）五十石積賃金四兩三步五拾石積金貳兩三步ニ相成右等意外之高價ト相貪候ハ强盜ニモ均シク當時貿易筋難澁之折柄賃錢不相當無之樣隨分下直ニ有之度既ニ上海ヨリ橫濱神戶長崎ヘ往復仕居候清國オヨヒ西洋蒸氣船之義ハ格外賃錢引下一噸ニ付元六弗之所ヲ當時三弗或ハ貳弗ニ相成萬里ヲ航海仕候艀船ヲヘ右樣下直ニ仕候義ニ相反シ一日二汐之間ニ着岸出來候僅相隔候神戶ヘ之船賃增方可仕所謂有之間敷奉存候何卒前條御洞察被成下神戶ヘ之船賃忘々不相貪樣同社ヘ急敷御沙汰被成下候ハ、難有仕合奉存候

外務局長官

清商連名

癸酉九月廿六日

然れ共税關は單に密商逋税の危險に備へんか爲に號旗及ひ號燈を下附するに止まり是等貨錢に對して干渉すへきものにあらすとし左の如く外務課に回答せり

過日舲船會社舟賃之儀ニ付清商共ヨリノ願書御廻シ御申越之趣委細致承知候然ル處右船賃之義ハ過當之廉モ有之清商歎願之筋愍然之次第ニモ相聞候得共全ク當關ニ於テハ旗章下ケ渡專ラ拔荷密積等取締之事所轄スル而已ニテ船賃之義ニ至テハ彼此相對ニテ取極候義故一切關係無之附而ハ右等之所御酌酌貴局ニ於テ可然御處分有之度被存候依而別紙清商願書ハ及御返却候此段御答旁申進候也

十月三月　　大阪税關

大阪府外務課御中

之に對して外務課は再ひ書を寄せて曰く

舲船會社賃錢之義ニ付清商共ヨリ歎願之次第有之書類相廻シ頃日及御掛合置候處御細答之趣致承知候然ル處右會社之義ハ規則方法ヨリ地所賃渡ニ至ル迄一切貴關ニオイテ御周旋開業之末船價之苦情耳當課ヘ御依托之理ハ有之間敷依テ彌適當之廉有之愍然之樣御聞屆之上ハ至當之賃錢乞受候樣其筋之者共ヘ御嚴達ニ相成度勿論税則ニ違背不致候得共無旗章之船ニ而モ彼等相對ヲ以借受物輸出入不苦義ニ候ヘハ其段ハ當課ヨリ清國人共ヘ相達可申此旨猶御懸合ニ及候也

第十月四日　　大阪府外務課

大阪税關御中

追而本文之賃錢彌過當之御見込有之候而モ貴關オイテ御關係無之當課ヘ處分御任相成候共別ニ良策無之右樣不辨理之會社ハ廢止先々之通リ相當之賃ヲ以テ相對傭之外見込無之候也

茲に於て當關は更に大阪府知事に交渉し外務課の處置に付て問ふ所あり曰く

舲船賃錢之義ニ付清商共ヨリ苦情申出云々過日貴府外務課ヨリ掛合相成候ニ付別紙甲號之通回答致候處再應乙號之通返簡申來候旨掛リ之者共ヨリ拙者ヘ申出候右舲船會社之義ハ初發貴府ト御熟談之上ニテ取設候義ニテ規則中ニ揭載有之候通當關ニ於テハ拔荷漏税等取締之タメ號旗號燈ヲ相渡候而已ニテ船價ハ勿論其者身上等ニ附テハ素ヨリ貴府之御所轄ニ可有之然ルヲ外務課ニオキテ右樣存違ヒヲ爲シ或ハ無旗章船ニテモ相對ヲ以テ借受不苦或ハ不辨理之會社ハ廢止先々之通不規則之備方不致見込ナリ云々被申越候義不得其意抑右等之不辨理ハ號旗號燈ヲ相渡候ヨリ相生候之理有之間敷都テ彼等身上ヨリ相釀候義ニ可有之然ルヲ前件之通被申越候儀ハ全ク外務課擔當之者心得違ニ可有之被存候依テ其邊篤ト御勘考同課ヘ可然御指令相成候樣致度此段及御懸合候也

六年十月四日　　瓜生租税助

大阪府渡邊權知事殿

同　參　事　殿

尚々神戸港ニ於テハ同參事外國領事協議之上舲賃錢取極有之趣ニ候故是迄右等之義ニ付外國人共ヨリ苦情申立候儀ハ更ニ無之候其邊モ篤ト御勘考有之度尤モ清商歎願書ハ外務課ヘ致返却置候也

之に對して知參事より

舲船賃錢之義云々御懸合之趣委曲致承知候篤ト取調ヘ追而何分之義可申入候此段及御回答候也

明治六年十月四日　　大阪府參事　渡邊弘

大阪府權知事　渡邊昇

瓜生租稅助殿

と回答し來り後終に大阪府は之等貨錢に關しては差配人の干渉を禁し貨主及船頭の相對を以て適宜に之を定めしむる事となして局を結へり

二十一、規則違犯の處分　輸出入品運送及客船規の實施以來該規則に抵觸せるものあるときは監吏課に於て之を審問し其調査中は「艀及船夫共船宿へ預け」調査の結果本人にして當港在籍のものなるときは直に科料其他の處分をなし若し神戸在籍のものなるときは手續書を徵して出帆を許し直に該手續書を添付して之を神戸稅關に通知し同關に於て其處分をなさしむ然るに八年六月該規則の改正により其取締は地方廳の管する處となりし以來稅關に於て其違犯者を發見したるときは單に手續書を徵し之を添付して其旨を地方廳に通知せり今之等違犯處分に關する一二の事例を左に示さん

例一

右之者共儀一昨三十日無號旗ニ而神戸港ヨリ外國人荷物運搬致シ來候ニ付尋問相遂候處別紙手續書之通申出候仍テ成規之通夫々御處分相成度此段及御照會候也

十二年十二月二日

大阪府御中

府下第六大區二小區
難波島十五番地
南川善右衛門
同
難波島十七番地
本田與三郎

大阪稅關

（別紙）

御手續書

一本日神戸小野キルヒー製作所ヨリ器械二十四個積登リ候ニ就而ハ兼テ御制規之御印フラス相用ヒ可申筈之處無其儀積登リ候段奉恐入候以後ニオイテハ右樣之不都合無之樣可仕候間何卒此度之義ハ幾重ニモ御用捨被成下度此段奉願上候也

明治十一年十一月三十日

府下第六大區
二小區難波島拾五番地
右同文言
南川善右衛門

例二

明治十一年十一月三十日

府下第六大區
二小區難波島十七番地
本田與三郎

神戸元町通四丁目松本嘉七船
第壹號　神力丸

該船義昨一日清商荷物積登リノ際無號旗ニ付取糺シ候處別紙書面ノ通リ申出候依テ歸港ノ義ハ差許置候條例ノ通リ御取斗有之度此段申進候也

十二年四月二日

神戸稅關御中

（別紙）

第九篇　船舶　日本形船舶

大阪秘

書附ヲ以御斷奉申上候

私儀此度神戸表ヨリ清國人荷物積登リ候處彼地出帆ノ際取急キ候而兼テ御下渡相成候雛旗號燈持參不仕候段奉恐入候得共右之番號船ニ相違無御座候間何卒御聞濟被成下度此段書附ヲ以御斷奉申上候也

十二年四月一日

神戸元町通四丁目
松本嘉七印

大阪港稅關御中

二十二、曳船廻漕會社の設立　明治十九年三月神戸に曳船廻漕會社なるもの起り支店を大阪富島町に置けり營業の目的は俗に所謂倉庫船を以て神阪兩港間の貨物を曳船廻漕せんとするに在り當時神戸稅關檢査課より該倉庫船に就て注意して曰く

神阪間引船營業之引船會社所有現今仕用之倉庫船ハ今般悉皆新造致候モノニ有之當關監視課ニ於テ檢査候處全ク是迄之分トハ大ニ其構造ヲ異ニシ假令封印ヲ施行スルモ勝手ニ蓋板等ヲ取除キ得ル程ノ不完全ナル構造ニ有之此倉庫船ニテ神阪間貨物回漕ハ實ニ不取締ノ義ニ有之時ニ依リ清商等犯則ノ恐レ無之トモ難申旁々掛念不少候間猶貴港ニ於而モ右御檢査相成度此段御注意迄申進候也

六月十三日

神戸稅關檢査課印

大阪稅關檢査課御中

茲に於て當關より其取扱方に對し照會するところあり

神阪間引船會社所有新造倉庫船之構造方不完全ニ付不取締云々御申越之趣承知致候右等不完全之船ニハ貴關ニ於テ決シテ封印施行ニハ相成ラサル義トハ存候得共若シ該船號旗等所持致居リ候節ハ封印ニハ相成ラストモ他小廻船同樣神阪間貨物之廻漕ハ御差許下相成御見込ニ候哉其邊承知致度候間至急何分之御回答有之度此段及御照會候也

明治廿年六月十四日

大阪稅關
檢査課

神戸稅關檢査課御中

之に對して神戸稅關より

第二十三號ヲ以テ本月十四日引船會社倉庫船號旗等所持スル節ハ他小廻シ同樣神阪間貨物之廻漕許否當關見込御問合ノ趣了承右ハ第四拾號ヲ以テ申進候通リ今般新造之分ハ構造方至而不完全ニ候間當港出船ニハ固ヨリ封印ノ効モ無之儀ニ付施行不致候得共號旗等所持シ居ル節ハ無論他小廻シ船同樣貨物廻漕ハ差許候得共一旦陸上之上改品シ本船へ積込方差許ヘキ見込ニ有之候間左樣御承知相成度此段御答申進候也

六月十五日

神戸稅關檢査課印

大阪稅關檢査課御中

と回答し來り幾くもなく是等艀船に對して單に封鎖を施すのみに滿足するの危險なるものあるを以て之を廢し一々檢査改品することゝせり

二十三、艀船統計　由來神戸大阪兩港に於ける艀船は常に外國貨物の運輸のみを專業とせるものにあらすして本船の入碇若くは神阪間廻漕貨物の有無によりて臨時荷主の雇入に應するに過きす即ち此場合に於てのみ彼の艀船規則によりて稅關の管督を受けしめたるものなれは實際に於て當港に

出入せる舟船の統計は之を知るに由なしと雖も當時大阪港に碇繫所を有して兩港間を往復し外國貨物を廻漕せる舟船の隻數噸數及其運賃等に關しては十八年十月の調査により一斑の狀況を伺ふに足らん

大阪港ヨリ神戸港ヘ輸出貨物ヲ運漕スル舟船數噸數幷ニ運賃表
（神戸稅關ヘ回答セル者）

一百五十石積舟船　拾貳艘
　此惣噸數貳百六十七噸八五七
　運賃一艘ニ付金七圓五十錢
　一泊金壹圓拾錢
一百五拾石同　八艘
　此惣噸數百拾九噸〇四七
　運賃一艘ニ付金五圓貳拾五錢
　一泊金九拾錢
一五拾石同　七艘
　此惣噸數三十貳噸〇八三
　運賃一艘ニ付金三圓
　一泊金六拾錢
右大阪港ニ船籍アルモノ而已

第三章　臨時開廳及積卸特許

二十四、臨時開關規則の發布　明治五年以前にありては稅關の休日若くは開廳時間外に於て入出港其他貨物積卸等に關する手數は時に郵船に限りて之を許可し其貨物積卸に對する特許手數料の如きは別に之を徵收せさりき然るに同年十月橫濱稅關に於て臨時開關規則なるものを起草し之を租稅寮に提出して稟議する處あり租稅寮は直に決定執行すへきを指令せるを以て同年十一月橫濱稅關より該規則によりて翌六年一月一日より各港一樣に實行すへき旨を通達し來れり是れ吾稅關に於ける臨時開廳及貨物積卸特許の始めなり然れとも神阪兩稅關に於て突然該規則發布實施するときは後日外人の異議を挾さましむるの虞なきにあらさるを以て豫め渠等をして承認せしむるに若かすとなし神阪在留の各國領事を會して協議する處あり果然各國領事は其手數料に就て異議を挾み容易に決せさるを以て稅關長は狀を具して橫濱稅關に照會し是か處置に就て問ふ處ありき然るに橫濱稅關より該規則の如きは敢て領事等の容喙を許すへきものにあらす稅關長の職權を以て實施すへきを回答せり然れとも大阪稅關の如きは其開港規則の規定により從來午前九時を以て開廳せるの慣行あるを以て之に修正を加へ斷然下の如く各國領事に通知して該規則を實施せしむ

以書翰啓達致候然ハ日曜日其他祭日休業及平日閉關後商貨船積陸揚便利ノ爲メ其手數料ヲ相納メ開關許容スル規則過日集會ノ上及御協議候處右手數料莫大等ノ云々ニテ終ニ結局不相纏依之右ノ趣我政府ニ達シ上裁ヲ仰クノ外無之ト存已ニ其異論ノ次第各港本局橫濱稅關長官迄申遣候處右等ノ事件ハ必竟各稅關長官ノ權利內ニ有之儀ニテ更ニ上裁ヲ仰ク迄モ無之速ニ施行可致旨申來候間即チ別紙ノ通規則施行致候條來ル六月一日ヨリ右ニ照準シ開關許容可致候間貴國人民ヘ夫々御布達有之度此段及御依賴候拜具

明治六年五月十五日

各國領事宛

瓜生租稅助

（別紙）

稅關布告第六號

商賣品陸揚船積便利の爲日曜日祭日及平日閉關後たり共之を許容するの規則左の如し

第一條

日曜日祭日及平日閉關後ニ至リ商貨ヲ陸揚又ハ船積スルコトヲ願出ルモノアリテ稅關長官之ヲ承諾セハ右總代ヨリ稅關長官ニ其船名ヲ記載セル願出ヲ差出スヘシ

第二條

稅關年官之ヲ差閊無キト視察スルトキハ其許容スル仕法如左

第一　貨物陸揚船積ニ付稅銀納方ハ朝第九時ヨリ午後四時ヲ限ルヘシ其他稅濟無稅品ハ何レモ願出ノ時間ニ依リ取扱ノ事

第二　右惣代タルモノハ稅關長官ニ手數料ヲ納ムヘシ其手數料ハ非常取扱人ノ報酬タルヘキ事

日曜日及祭日手數料

午前九時ヨリ午後四時ヲ過キサレハ　二十五弗

同六時ヲ過キサレハ　四十弗

同夜十二時ヲ過キサレハ　七十弗

同夜十二時ヲ過キレハ　百二十弗

平常閉關後手數料

午後第四時ヨリ同六時ヲ過キサレハ　十五弗

同夜十二時ヲ過キサレハ　四十五弗

同夜十二時ヲ過ル時ハ　九十五弗

右之通相定候事

明治六年五月十五日

大阪稅關司長

瓜生租稅助

然れとも大阪港の如き本船は常に波止場（川口）を距る約五哩の遠きに碇泊し輸出入貨物は皆艀船によりて本船に積卸をなさゝる可からさるの不便あると同時に風浪の際の如きは直に本船に至る能はす爲めに特許時間を空過し出願者の不利不便尠からす爲めに屢々異議を鳴らせるものあるを以て遂は艀船に對する積卸特許規則を設けんとし先つ横濱稅關に咨へり

日曜祭日及閉關後貨物積卸取扱方手數料貴港ニ倣ヒ神戸港ニ於テハ已ニ實際及施行候處今般大阪港ノ儀ハ他港ト違ヒ稅關ヨリ碇舶船ハ凡二里餘モ相隔リ隨而艀ノ運漕ニ時間ヲ費ヤシ四時後開關ヲ願出輸出免許ヲ得候トモ其品六時內ニ本船迄送達スルヲ得ス加之渺漠タル港灣動モスレハ風潮遽ニ變シ船積不相成終ニ立戻リ候事再三有之他港ノ規則ニモ照準難致且英領事ヨリ彼是苦情モ申立事實無據次第ニ付大阪港ニ限リ稅關ノ輸出免許ヲ得タル安治川ニ滯留スル艀ノ貨物ノミ別紙ノ通規則相設施行致度此段相伺候可否電信ヲ以テ御報知有之度候也

明治六年十一月廿七日

中島租稅權頭殿

七等出仕　長岡義之

（別紙）

稅關開關中輸出スル手數濟ノ免許ヲ得タル艀ニ積在スル貨物ハ願出ノ時間ニヨリテ本船ニ積入レヲ取扱フ事

日出ヨリ日没迄　十五弗
同夜十二時ヲ過キサレハ　二十五弗
同夜十二時ヲ過クレハ　四十弗
平日船積ノミノ手數料
日没ヨリ夜十二時ヲ過キサレハ　十弗
同刻ヲ過クレハ　二十五弗

右之通大阪稅關ニ限リ取設ク候事

之に對して橫濱稅關より左の如く回答を寄せ來れり

（前略）御伺出ノ趣承知致候然ルニ平日開關後午後第四時ヨリ日没迄ノ間ハ貿易章程ニ對シ暫ク手數料不取立積リニ取極メ有之附テハ大阪港米輸出ニ於ケルカ如ク日没迄ニ輸出ノ免許ヲ得已ニ解船ヘ積込輸送ノ途中風待ノ爲メ滯留シ日没ヲ過キ本船ヘ積込ムノ如キハ唯積込ノ時限ヲ過キ候迄ニテ本船ニハ監吏モ乘監候義ニ付取締ニ關係セサルハ勿論ノ義ニ付別段ノ手數モ不相掛義ニ付手數料ハ不取立特別ニ差許候テ可然候又非常ニ手數相掛リ手數料可取立之節アレハ一定ノ手數料取立可然强テ減額致ニモ不及義ト存候間此段及御回答候也

明治六年十二月四日

中島租稅權頭

瓜生租稅助殿
長岡七等出仕殿

茲に於て終に之か實施を見すして止めり翌七年十月十三日租稅寮より規則追加を爲して之を達示す

開關時間中ニ手數既濟ノ輸出物ヲ休日日出後及（休日）平日日没後船積シ又ハ輸入品ヲ上屋ヨリ引取又ハ本船ヨリ假ニ上屋ヘ陸揚セシヲ願フモノハ其時限ニ四テ次ノ割合ヲ以テ謝金ヲ出スヘシ

休日日出後日没迄ハ一時間毎ニ一弗宛
（休日）平日　日没後日出迄ハ一時間毎ニ一弗五十錢宛

此に於て始めて臨時開廳以外に貨物の積卸又は引取等に對する特許をなすに至れり同年十一月十二日神戸稅關より右臨時開關規則追加中には貨物船移の場合に對する明文なきも手數濟貨物を甲乙兩郵船間若くは郵船と庫船間に船移する場合に於て之を許可するの可否を租稅寮に問ひ租稅寮よりは可なりの指令を與へたり後九年三月神阪稅關長より各商船荷仕役手數料取立方の儀に就て伺を爲せり

明治七年十月中第十九號ヲ以テ御達有之候追加荷仕役ノ義ハ假令一會社ヨリ同時ニ兩隻以上願出候共臨時開關トハ異リ其船毎ニ監吏ヲ乘セ且官員出務モ隨而增加セルニ付手數ハ各船別ニ爲相納候而可然ト存候得共各港之振合モ有之事ニ付爲念此段相伺候也

明治九年三月十八日

租稅權頭吉原重俊殿

租稅助　長岡義之

租稅寮より「伺ノ通可被心得候事」と指令し爾來各船別に特許料を徵收する事となれり次て明治十一年五月關稅局達局達を以て再ひ該規則に追加せり

平日日出後ヨリ常例開關時刻迄　二十弗

但右手數料ハ本文時間仕役ヲ始ムル者ニ限リ前ヨリ引續ク者ニ課スルニ非ス

後明治十四年八月當關に於ては內外船舶仕役謝金取立方內則なるものを規定し乘監々吏をして貨物積卸特許の場合に於ける本船の荷役終了時間を報告せしめ以て料金徵收に對する出願者の異議なからしめんことを期せり即ち左の如し

內外船舶仕役時間ニ應シ晝夜共謝金徵收方以來便利ノ爲メ左ノ通內則相定候條右照準可被取扱此

旨相達候事

明治十四年八月二十四日

大阪稅關長　高橋新吉郎

內外船舶仕役謝金取立方內則

一晝間並ニ夜中仕役共其船ノ願時間前ニ終リタル時ハ乘勤監吏補ニ於テ其船司若クハ副船司等ニ仕役濟ノ時抄ヲ自記セシメ歸課ノ上之ヲ監吏ニ出シ直ニ關係ノ課係ニ通知スヘシ

但シ殘リ時間一時以內ノ節ハ此限ニアラス

一仕役濟ノ期ト定ムルハ乘勤監吏補艙口ノ封印等相濟本船ヲ離去セントスルノ際タルヘシ

一前項監視課ヨリ仕役濟通知ノ時間ヲ證トシ其殘ル時間ノ謝金一時間分丈ハ之ヲ徵收スヘシ

二十五、回漕貨物ト臨時開廳　大阪港より艀船を以て神戶港に回漕せんとする輸出手數濟貨物の中途風波に妨げられ之を積戻し更に陸路輸送せんと欲する場合に於て休日又は閉關後なるときは之か陸揚其他の手數をなす能はす空しく明日を待つか如きは貨主等の苦痛とする所にして是等の場合常に少なからさりしを以て明治十九年に至り閉關中積戻貨物取扱方心得なるものを規定し貨主の申請を待つて何時にても宿直員に於て之を受理し直に臨時開關規則に基きて便宜の取扱をなさしめたり當時配布せる該取扱心得は左の如し

閉關中積戻貨物取扱方心得

一日曜日祭日及平日日沒ニ至リ稅濟無稅品之別ナク凡テ輸出手數濟之貨物暴風或ハ逆浪等之爲神戶港ヘ回漕難出來ニ付余儀ナク積戻リ直ニ滊車便ヲ以テ神戶港ヘ差廻度旨願出候時ハ臨時開關規則第三項ニ依リ取扱フ者トス

一貨主前條ノ手數ヲ願出候時ハ其事情ヲ尋問シ不得止ル時ハ仕役差許置其旨各課長ヘ通報スヘシ

一前條ノ願意許可相成候時ハ檢查課收稅課倉庫課勤務之判任官之內一名出關シ當宿直者ト共ニ其事務ヲ取扱フヘシ

一免狀面ノ貨物悉皆積戻リ候時ハ個數斤量等悉皆點檢シ輸出檢印ヲ取消シ貨物ノ引取ヲ許シ別紙雛形ノ通リ免狀ヘ裏書シ改品表ヘ其旨ヲ記シ記名捺印ノ上翌日開關ニ至リ其掛ヘ引繼クヘシ

一若シ免狀面ノ貨物悉皆積戻ラス內幾分歟ヲ積戻リ候節ハ其積戻リタル貨物ノ個數斤量等悉皆點檢シ輸出檢印ヲ取消シ貨物之引取ヲ許シ別紙雛形ノ通リ免狀ヘ記載シ右免狀ヲ貨主ヘ返附シ改品表ヘ積戻リ之旨ヲ記シ記名捺印ノ上翌日開關ニ至リ其掛ヘ引繼クヘシ（別紙雛形略ス）

二十六、臨時勤勞手當　由來各稅關に於て休日若くは出務時限外に出務したる吏員に對し特に之か手當金を給與し來れり之れ即ち前に揭けたる臨時開廳規則の第二條第二項の規定によりて當時其手數料を出務の者に分割給與せるに基くものにして明治六年四月橫濱稅關より左の如く通達し來れり

今般彼我商民ノ便利ヲ量リ稅關定例ノ休日ト雖モ荷主ヨリ願立次第開關シ貨物輸出入ノ手數ヲ爲シ夫レカ爲メ關係ノ官員平常ノ通出勤事務取扱方格別勉勵ニ付テハ別紙ノ割合ノ通リ其日出勤ノ官員ヘハ手數料ノ分合被下候事ニ一定致候間其港ニ於テモ休日開關貨物取扱致節ハ右振合ニ準シ手數被下度御取計可有之此段申進候也

明治六年四月二十二日

橫濱稅關長中島信行代理

星　亨

瓜生寅殿

（別紙）

割賦例

取立方

洋銀二十五弗　何月何日　手數料

此三分二洋銀十六弗六十七セント此金拾六圓六拾七錢

此譯

一金壹圓貳錢六厘宛　大關ヨリ十五等出仕マテ　十人

但物數貳ッ取十人分金拾圓貳拾六錢

一金七拾六錢九厘宛　等外出仕　五人

但物數一ッ五分取五人分金參圓八拾四錢五厘

一金五拾壹錢參厘宛　附屬ノモノ

但物數一ッ取リ五人金貳圓五拾六錢五厘

右ノ通追テ殘三分ノ一高ハ稅關へ積立置候事

これに據れは其手數料額の三分の二を以て出務人員に割賦し其三分の一は臨時開廳に對する雜費に宛てしむるの目的を以て之を稅關に積立てしむるなり然るに後十月横濱稅關に於て勤勞手當の配賦率を改正し之を各港に通達せり

式日幷日曜日平日閉關後共便利ノ爲メ陸揚船積差免シ候節取立候手數料之儀當四月中別紙ノ通リ御取極有之候處三分ノ一雜費ノ償トシテ諸務課ニ積置候分仕拂方之儀平素ノ雜費ト臨時開廳之雜費ト區分相立候儀者實地難被行去迚其儘積立置候モ別ニ費消ノ目的モ無之元來右手數料之儀者非常取扱之報酬タルヘキ旨規則中明文モ有之儀ニ付三分ノ一除置ノ儀ハ御取消相成更ニ最前ヨリ之分當日取扱之官員以下へ割賦之方至當ニ可有之ト奉存候且又右割合之儀三井組手代之義ハ最初之伺ニ相洩レ居候得共臨時出張勞力イタシ候儀ハ同一ノ儀ニ付左之通リ取極申度併テ此段相伺申候也

第十月三十一日

判任	物數二ッ
等外	一ッ半
目利人	同
三井組手代	同
附屬	一ッ
三井組手代手傳	同

爾來之によりて勤勞手當は手數の全額を分配給與する事となせり當時大阪に於ける手數料の實例を示さは左の如し

三月三十日英國ヘリークロス船午後六時ヨリ翌朝迄開關願出ニ付手數左之通割符致シ度候

一金八拾圓八拾錢

四十五枚　一ッニ付壹圓七拾九錢五厘

此譯

一金參圓五拾九錢ヅヽ

植村大屬

荒木中屬

栗山少屬

吉田一學

都築爲記

野田米十郎

一金貳圓六拾九錢三厘ッヽ

一金八拾九錢八厘
一金六圓貳拾八錢三厘
一金貳圓六拾九錢三厘
一金參圓五拾九錢

後明治十九年五月十五日大藏大臣達(二百七十九號)に依り翌二十年四月以降臨時開廳手數料は國庫へ收納し其勤勞手當は別途支給することになり同年五月大藏大臣達第三一一五七號を以て該手當金

松尾呂澄
岡部兵二郎
三宅敬直
佐波貞太郎
益田賀眞
竹內清秀
〃
永宮晴尙
前野直久
監吏四人代 石原信唯
監定二人代 小島市兵衛
銀行一人
〃
給仕一人
小使七人 伊藤德藏
定人足三人 倉橋鶴吉
水夫四人代 石原信唯
〃

の割合を定む即ち左の如し

第三一一五七號

臨時開關勤勞者手當金支給割合別表ノ通相定ム

明治二十年五月九日

大阪稅關

大藏大臣伯爵　松方正義

（別表）

臨時勤勞者每一時間手當金額表

	自日出 至日沒	自日沒 至午後十二時	自午後十二時 至日出
判任官	金拾五錢	金貳拾錢	金三拾錢
傭員	金拾壹錢	金拾五錢	金貳拾貳錢五厘
附屬以下	金七錢五厘	金拾錢	金拾五錢

二十七、豫定時間　曩に揭けたる臨時開關規則の發布せられたる最初の規定によれは其特許時間及手數は單に何時より何時を過されは何程とありて日出日沒の限界をなさゝりしも發布の當時橫濱稅關長よりの內達によりて平日閉關後午后四時より日沒に至るまては特に其手數料を徵せさりき然るに明治七年十月該規則の追加は特に日出日沒を限界として其手數料を異にせるも當時午後六時迄は條約面の公許時間なりしを以て之を徵せす午後六時以後にありては稅關に於て日の長短により適宜に之を徵收し來りしか明治二十年十月當關に於ては始めて日出日沒の豫定時間を定め同月廿五日より之によりて手數料徵收の標準を定めしむ

日出　日沒

一月一日ヨリ三月十八日迄　午前七時
三月十九日ヨリ五月六日迄　午前六時
五月七日ヨリ八月五日迄　午前五時
八月六日ヨリ十月廿一日迄　午前六時
十月廿二日ヨリ十二月卅一日迄　午前七時

一月一日ヨリ二月廿五日迄　午後五時
二月廿六日ヨリ五月十三日迄　午後六時
五月十四日ヨリ八月十九日迄　午後七時
八月廿日ヨリ九月四日迄　午後六時
十月一日ヨリ十二月二日迄　午後五時
十二月三日ヨリ十二月九日迄　午後四時
十二月一日ヨリ十二月卅一日迄　午後五時

第四章　波止場

二十八、川口波止場の擴張　貿易の盛大に伴ひ貨物の集散益々繁劇を極め爲めに當時大阪税關所屬の川口波止場は狹隘を告けんとするを以て茲に十年七月三十月之か擴張に就て始めて大阪府に交涉を開始し以來現況に達せり今之か沿革を知るの捷路として左に之に關する往復文書を輯めて記述

に易へんとす先つ

イノ一

當港波止場之義ハ外國輸出入荷物ノ揚卸場ト川漁船繫維所トハ已ニ先年標杭ヲ建豫メ境界取設相成候得共其筋川漁船ハ唯神阪間往來ノモノ而已ニテ其繫維中モ暫時故現實ニ於テ互ニ差閊無之樣場所ノ操合モ相成候處鐵道開業后ハ各川漁船專ラ內海之廻漕ニ換業セシニ付空船ニテ數日間繫維スレハ前條ノ如キ操合難相成ハ勿論ノ上ニ追日支那人ノ輸出入品ハ夥多ニ相成旁以現今標杭內ノ揚卸場ニテハ事實狹隘ニテ差閊ニ及候間從前ノ場所ニ引續キ猶倍數丈ケ取擴ケ相成候樣致度尤右樣相成候トモ內海往復船ノ旅客昇降幷荷物揚卸等ニ差閊候義ハ無之ト存候依テ此段及御照會候也

十年七月三十日　大阪税關長
渡邊大阪府知事殿　長岡大藏少書記官

イノニ

黃第三千五百十七號

當港波止場ニ於ル外國輸出入荷物揚卸場取擴之儀ニ付テハ客月一日附ヲ以テ不取敢及御回答置候處今般當ミニスバル議事掛リ一同協議之上別紙譯書之通リ回答申越候間不日該場取擴ニ着手可致候條右樣御承知有之度此段及御回答候也

明治十年九月四日　渡邊大阪府知事判
長岡大藏少書記官殿

（別紙）

第九篇　船舶　波止場　四百六十七

本月四日附之貴翰ミニスパル議事官一統へ相廻候處稅關前蒸滊船荷揚場取擴之義ハ別紙之通多數之議員ニ於テ承諾致候右早々御回答可申筈之處領事之中一名不在之者有之候ニ付如斯遲延仕候讓言

千八百七十七年八月廿八日

大阪府知事渡邊昇貴下

大阪シユニシパル書記
フランク、メシヨル

ロノ一

黃第二千五百五十九號

其御廳前波戶場東續ニ有之電信分局敷地長十間八分三厘幅三間五分ノ場所於同局當今不用ニ付內務省へ返地相成候處右波止場接近適宜之場所ニ而其筋へ伺出更ニ當府へ請地之上波止場ニ樣樣替可致ト存候間此段御打合オヨヒ候也

十一年七月十一日

大阪稅關御中

大阪府

ロノ二

當關前波止場東續キ電信分局敷地之處方今不用ニ付內務省へ還付相成候處該地所之義ハ波止場接續適宜之場所ニ付其筋之伺ヲ經更ニ貴府へ御請地之上波止場御取擴メ可被成旨ヲ以テ御打合之趣致承知候於當關モ至極御同意之至ニ候此段御回答申進候也

十一年七月十七日

大阪府御中

大阪稅關

ハノ一

當港波止場內外國輸出入荷物揚卸場取擴之義ニ付過日黃第三千五百十七號之御回答ニヨレハ其際不日御着手可相成趣ニ候處爾今御取擴無之日々差閊候ニ付至急御着手相成候樣致度御掛合旁及御依賴候也

十年十一月十三日

大阪府御中

大阪稅關

ハノ二

當港波止場輸出入荷物揚卸場取擴之義ニ付御掛合之趣致承知候右ハ今明日ノ內ニ是非取擴メニ着手致候間右樣御承知有之度御答旁此段申進候也

明治十年十一月十七日

大阪港稅關御中

大阪府

ニノ一

第四十一號

當港波止場之義近來海外輸出入ノ貨物夥多ニシテ漸次繁盛ニ赴キ當今標杭內ノ揚卸場ニ而ハ現ニ事務上ノ差閊不尠候間別紙圖之通リ在來ノ杭ヨリ更ニ當關上屋西隅迄十間丈取擴ケ相成候樣致度且右區域內ニハ人力車ヲモ置カサル樣御禁制相成候樣致度尤右樣相成候共內國回漕船ノ旅客昇降幷荷物揚卸等ニ至リテハ決シテ差閊候義ハ無之ト存候依テ此段及御照會候也

十三年十月八日

大阪稅關長
高橋大藏少書記官

建野大阪府知事殿

大阪稅關波止場略圖

波止場	○元杭ヨリ西ノ方ヘ拾間○	道路		
		借庫		
		借庫		
		税關上屋		
		商船學校		

如斯順序を以て漸次阜頭の擴張を爲せるも後二十二年六月十一日大阪税關は更に西方に向つて波止場の擴張を大阪府に需めたるも當時府に於ても同一の計畫ありといふの故を以て此協議を斥けり

本月十一日付ヲ以テ貴關波止場取擴之議御協議之趣了承然ルニ該地以西當府波止場ノ如キモ追々狹隘ヲ來シ自今取擴計劃之際ニ候間追テ取擴メノ上ナラテハ御協議ニ應シ兼候間左樣御承知相成度此段及御答候也

明治二十二年六月四日

大阪府知事　西村捨三

大阪税關長頴川君平殿

二十九、波止場と警察　明治十三四年以來川口阜頭に於ける貨物の集散益頻なると共に該區域内に於ける雜沓甚たしきを以て嘗て税關より大阪府へ交渉して該區域内に人車放置の制禁を需め大阪府の同意を得たり然るに拘らす實際此事の行はれさるを以て遂に十四年六月之か實行を大阪府に促かして曰く

第三十七號

客年十月八日第四十一號ヲ以テ當港波止場區域内人力車ヲ置カサル樣御制禁相成度旨及御照會置候處本年二月三日附貴府第七六五號ヲ以テ前條御承知之趣御回答有之候得共方今實際之模樣ニテハ更ニ御制禁ノ樣子不相見矢張從前之如ク人力車置据候者續々有之輸出入貨物運送ノ障碍ニ相成候ニ付尚嚴重御制禁相成候樣致度此段重テ及御照會候也

十四年六月十日

大阪府御中　　大阪税關

降つて二十年の頃街路取締の上より大阪府警察は常に波止場區域内に於ける貨物の堆積に干渉し税

關事務上大に不便なるものあるを以て稅關より之に對し直接同府に協議して事務の上に支障なからんことを以てせり然るに後神戸在任の我關長より協議後に於ける事情を知らんと欲して之を大阪稅關に照會して曰く其關前貨物堆積シ人民通行之妨害ト可相成ニ付時々巡査ニ於テ制止スルカ爲メ大ニ稅關事務上ノ不便ヲ來スヲ以テ右樣之義無之樣大阪府今井書記官へ拙者ヨリ懇談ニ及置候義ハ御承知之通ニ候處別紙來翰之通巡査等へ夫々通牒相成居モノト相見へ爾來ノ景況如何ニ候哉ト申來リ候就テハ右ニ對シ可然返答可致筈之處果シテ當時ハ貨物ノ堆積ヲ制止スルコトモナク且波止場貨物輻湊之際人民人力車ニテ通行スルヲ差止メ候事等相行ハレ居候哉右等ノ事巡査ニ於テ最早一々心得居候儀ニヤ其邊巡査ヘモ御問合之景況併セテ通報有之度此段申入候也

二十年五月十日　　穎川大阪稅關長印

大阪稅關五島稅關屬殿

之れに對して當關より左の如く回答せり

當關前貨物輻湊之際人民通行之義ニ付運日大阪府書記官へ御協議相成候處爾來前顯之場合ニ於テ警察官ヨリ右貨物之堆積ヲ差止メ或ハ人民之人力車ニテ通行スルヲ差止メ候哉且巡査ニ於テ御協議之件一々心得屆候哉目今之景況逐一御通報可申上御下命之旨了承仕候早速當關前巡査交番所ニ就キ及問合候處四五日前署長ヨリ稅關前道路之義ハ外國人ニ最モ關係アル場所ニ就キ街路取締規則ニ照シ之レカ處分ヲナス場所ニ無之今後假令貨物輻湊道路ニ堆積スルモ凡二人乘人力車通行シ能フ丈ケノ余地有之節ハ敢テ制止スルニ及ハス同所ニ有之荷物ニ對シテハ幾分カ保護ヲ加フヘキ樣心得トノ達シヲ受ケ候趣併シ前件ノ場合ニ於テ人力車ノ通行ヲ差止メ候義ハ未タ承知不致由申答候將又方今ハ幾分カノ貨物通路ニ散積アルモ夫ニ付警部巡査ヨリ何等之掛合申越候儀無之此段不取敢御答申上候也

二十年五月十二日　　稅關長穎川平君殿　　稅關屬　五島貞眞

三十、假波止場　現在稅關所屬川口波止場と稱するものは古川支流の突堤より起り監視部の前岸を通して西の方約八十二間に亘る安治川南岸の一帶をいふ然れとも三十一年以前に在りては現在監視部所在地一圓は初め外務局に後商船學校船舶司檢所の占有に係るを以て當時波止場の延長約四十六間餘に過きさりしのみならす明治五年以前に於ては安治川橋の位置稅關所屬波止場の下流に架せるを以て出入口滊船の便宜を圖り假りに梅本町若くは古川町の波止場を設け回船陸揚を許可し來れるに安治川橋の移轉以後永く慣例となり十五年の初めに當り遂に同所を假波止場となし貨物の陸揚を許せり

是迄荷主之都合ニ寄リ當港波止場ヨリ貨物陸揚致候テハ不便ノ廉モ有之時ハ荷主之願ニ依リ梅本町或ハ古川町等ノ假リ荷揚場へ回船上陸揚差許來候處右之爲附セシ免狀トテ一定ノ書式無之臨時同紙へ記載致居候得共人々記載方區々ニ相成居候間監吏補ニ於テ免狀ノ眞僞見認方ニ疑惑ヲ生シ候事モ不勘候依之爾來別紙之通書式版刻致度此段相伺候也

明治十五年一月

（別紙一例）

陸揚證

荷主　清商　萬舍

YH SK 720　二十俵　蒼述

30　一俵　大黃

第九篇　船　舶　波止場　四百七十三

HS　一箱

右之荷物其波止場ヨリ陸揚差許候也

明治十五年　月　日

大阪税關　倉庫課

沈　香

梅本町監吏補御中

後十九年五月監視上假波止場陸揚の不利なるを以て之を禁止せしむ

梅本町假波止場之儀從來之習行ニテ（元關五番館前　亀井橋西詰）梅本町寄場之三ヶ所ニテ陸揚可致候處爾後（元關五番　前亀井橋　西詰）之二ヶ所ニ限リ爾後ハ一切揚卸共差止メ可申旨五島課長ヨリ口達有之事

但シ古川筋ハ一切差止メ可申事

明治十九年五月十九日

大阪税關沿革史　第三期

凡例

一本期は筆を明治二十三年十一月稅關法及稅關規則の發布に起し同三十二年關稅法實施前に擱けり而して此間章を頗つこと二、題して官制及分課、分課事務と命せり

一抑も稅關か國家の機關として眞に其體制を具備せるは夫の稅關法及稅關法規則發布の以後に在りとせは本期間に於ける稅關の沿革は寧ろ必要と興味の上に於て肅條たらすんはあるへからす何則新法規の發布は各稅關を通して遂に稅關徵收事務を統一せしめ夫の所謂第二期第三期の時代に於ける如く不文の例規慣行なるものは全く其跡を絕てはなり故に本史は各稅關を通する法規令條は其主要なるもの、外部て省略に從へり

大阪稅關沿革史目次

第三期

第一章　官制及分課……一
一、稅關官制の改正……一
二、分課規程の配布……七
三、監視官吏の任用……一〇
第二章　分課事務……一五
一、檢査課事務……一五
四、處務細則……一六
五、臨時開廳及貨物積卸特許……二二
六、輸出及回漕特許……三一
七、貨物出入運搬仲間……三六
八、戰時禁制品に就て……三七
九、貨物取扱に關する方針……三九
十、外國人所屬小船……四一
十一、事務改正の決議……四二
十二、船舶出入統計……五四
口、鑑定事務……五五

十三、處務細則……五五
十四、鑑定官吏の協議及決議……五八
　八、徴收課事務……七五
十五、處務細則……七五
十六、租稅及租稅外諸收入……七八
　ニ、倉庫課事務……九一
十七、處務細則……九一
十八、各倉庫及上屋……九三
十九、保稅倉庫……九六
　ホ、庶務課事務……九九
二十、處務細則……九九
二十一、給與……一一一
二十二、宿直……一一二
二十三、電話交換機の架設……一一四
二十四、土曜日半休の廢止……一一五
二十五、經費……一一六
二十六、經費に關する注意二件……一一八
　ヘ、監視部事務……一一九
二十七、處務細則……一一九
二十八、吏員の配置……一二六
二十九、執務規定の配布……一二七
　一、各監所執務規定……一二七
　二、監船員執務規定……一三二
　三、水上巡回執務規定……一三五
　四、貨物係執務規定……一三七
　五、水陸巡察規定……一四二
　六、船內檢查手續……一四三
三　十、旅具檢查……一四八
三十一、積卸特許と信號規定……一五四
三十二、監視官吏の賞罰……一五六
三十三、服制禮式及被服取扱內規……一六九
三十四、欠勤償金の配與……一七五
　ト、稅關長官房……一七七
三十五、處務細則……一七七
三十六、文書の發受……一八九
三十七、官吏心得概則の配布……一九一
三十八、文書類の取扱、編輯及保存規程……一九八
三十九、官吏出勤心得幷宿直規則……二〇二
四　十、犯則處分の實例……二〇八
四十一、新條約實施に關する訓示……

大阪税關沿革史第三期目次　終

大阪税關沿革史　第三期

第一章　官制及分課

一、税關官制の改正　明治二十三年七月税關官制を改正したる以來同三十二年四月現行税關官制を發布するに至る十年の間税關官制を改正すること二回一は二十六年十月に於て一は三十年六月に於てせり此間官制一部の改正其他之に伴ふ名稱の改廢等は都て各税關を通して實施せるものに係るを以て多くは省略に從ひ但た主なるもの而已を掲けん明治二十三年七月二十四日勅令第百四十二號を以て發布せる税關官制に據れは左の如し

税關官制

第一條　税關ハ大藏大臣ノ管理ニ屬シ海關税務ヲ掌ル

第二條　税關ニ左ノ職員ヲ置ク

税關長	六人	奏任
税關副長	二人	同
鑑定官	五人	同
鑑定官試補	五人	
屬	二百七人	判任
鑑定吏	二十一人	同
監吏	二十四人	同
監吏補	二百七十四人	同六等

第三條　稅關長ハ大藏大臣ノ指揮監督ヲ承ケ稅關ニ關スル一切ノ事務ヲ掌理ス

第四條　稅關副長ハ現在ノ稅關長ノ次等以下トス

横濱神戸兩稅關ニ限リ之ヲ置キ稅關長ノ事ヲ助ク稅關長事故アルトキハ其事務ヲ代理ス

第五條　鑑定官ハ稅關長ノ指揮監督ヲ承ケ貨物檢查鑑定ノ事ヲ掌理ス

第六條　屬ハ各上官ノ指揮ヲ承ケ書記計算簿記ノ事ニ從フ

第七條　鑑定吏ハ各上官ノ指揮ヲ受ケ貨物檢查鑑定ノ事ニ從フ

第八條　監吏ハ各上官ノ指揮ヲ承ケ監吏補ヲ監督シテ密商脫稅監視ノ事ニ從フ

第九條　監吏補ハ監吏ノ事務ヲ助ク

後九月六日勅令第二百四號を以て各稅關の管轄區域を定め同十一月一日より實施せしむ而して當關所管に屬する區域は參河より攝津（西成郡以東）に至る七個國にして即ち參河、尾張、伊勢、志摩、紀伊、和泉、攝津（西成郡以東）七個國の沿海等なりとす越へて二十四年七月二十七日勅令第百二十三號を以て稅關官制の一部を改正す

第二條　稅關ニ左ノ職員ヲ置ク

稅關長	四人	奏任	
稅關副長	二人	奏任	
鑑定官	五人	奏任	
鑑定官試補	五人	判任	
屬	二百七人	判任	
鑑定吏	二十一人	判任	
監吏	二十四人	判任	
監吏補	二百七十四人	判任	

大阪稅關長ハ神戸稅關長若クハ副長之ヲ兼ネ新潟稅關長ハ新潟縣收稅長之ヲ兼ヌ

附　則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

二十六年十月三十日大藏省官制を改正し主稅關稅の二局を併合して主稅局と稱し內國及海關稅務を主管せしめ同日稅關官制（勅令第百三十五號）の改正を見る

備考　二十六年十月三十日大藏省官制改正せられ主稅關稅の二局を合して主稅局とし內國及關稅事務を主管す

稅關官制

第一條　稅關ハ大藏大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

一、各開港ニ於ケル西洋形船舶及外國通航ノ日本形船舶ノ出入ニ關スル事項

二、貨物ノ輸出入ニ關スル事項

三、各開港外ニ於ケル外國貿易取締ニ關スル事項

四、各開港外ニ於ケル輸出入貨物搭載ノ船舶出入ニ關スル事項

五、海關稅及稅外諸收入ノ徵收ニ關スル事項

六、稅關管理ノ倉庫ニ關スル事項

第二條　左ノ六港ニ稅關ヲ置ク

武藏國　橫濱　攝津國　神戸　攝津國　大阪

肥前國　長崎　渡島國　函館　越後國　新潟

第三條　前條稅關外稅關ノ事務ヲ行フヘキ場所ニ稅關出張所ヲ配置ス其ノ配置ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第四條　各稅關ニ稅關長一人ヲ置ク奏任トス
大阪稅關長ハ神戸稅關長新潟稅關長ハ新潟縣收稅長（二十九年十月二十日新潟縣收稅管理局長と改む）

第五條　各稅關ヲ通シテ左ノ職員ヲ置ク

鑑定官	二人	奏任
屬	百七十人	判任
鑑定吏	十二人	同上
監吏	二十四人	同上
監吏補	二百七十四人	同上

第六條　稅關長ハ大藏大臣ノ指揮監督ヲ承ケ稅關ニ關スル一切ノ事務ヲ掌理ス
第七條　鑑定官ハ稅關長ノ指揮監督ヲ承ケ貨物檢查鑑定ノ事ヲ掌理ス
第八條　屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス
第九條　鑑定吏ハ上官ノ指揮ヲ承ケ貨物檢查鑑定ニ從事ス
第十條　監吏ハ上官ノ指揮ヲ承ケ監吏補ヲ監督シテ密商脫稅ノ監視ニ從事ス
第十一條　監吏補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ監吏ノ事務ヲ助ク

附　則

第十二條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス
後三十年六月二十二日勅令第二百二號を以て更に稅關官制を改正すること左の如し

稅關官制

第一條　稅關ハ大藏大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

一、各開港ニ於ケル西洋形船舶及外國通航ノ日本形船舶ノ出入及港內舟船ノ取締ニ關スル事項
二、貨物ノ輸出入ニ關スル事項
三、各開港外ニ於ケル外國貿易取締ニ關スル事項
四、各開港外ニ於ケル輸出入貨物搭載ノ船舶出入ニ關スル事項
五、海關稅及稅外諸收入ノ徵收ニ關スル事項
六、稅關管理ノ倉庫ニ關スル事項
七、私設保稅倉庫監督ニ關スル事項
八、保稅倉庫藏置ノ貨物運搬取締ニ關スル事項

第二條　左ノ六港ニ稅關ヲ置ク

武藏國	橫濱	攝津國	大阪
肥前國	長崎	越後國	新潟
		渡島國	函館
		攝津國	神戸

第一條　前條稅關ノ外必要ノ場所ニ稅關支署又ハ稅關監視署ヲ設置ス其設置ハ別ニ定ムル所ニヨル

第四條　各稅關ニ稅關長一人ヲ置ク　奏任
第五條　各稅關ヲ通シ左ノ職員ヲ置ク

檢查官	奏任	監視官	奏任
屬	判任	鑑定官	判任
監吏	任	鑑定官補	判任
監吏補	任	技手	判任

第六條　稅關長ハ大藏大臣ノ指揮監督ヲ承ケ稅關ニ關スル一切ノ事務ヲ掌理ス
第七條　檢查官ハ稅關長ノ指揮ヲ承ケ輸出入申告書其他諸文書ノ監查ニ關スル事務ヲ掌理ス

第一章　官制及分課

第八條　鑑定官ハ稅關長ノ指揮ヲ承ケ輸出入貨物ノ檢査鑑定ニ關スル事務ヲ掌理ス
第九條　監視官ハ稅關長ノ指揮ヲ承ケ監吏監吏補ヲ監督シテ關稅警察ニ關スル事務ヲ掌理ス
第十條　屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス
第十一條　鑑定官補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ輸出入貨物ノ檢査鑑定ノ事務ニ從事ス
第十二條　技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ工事ニ從事ス
第十三條　監吏ハ上官ノ指揮ヲ承ケ監吏補ヲ監督シテ關稅警察ニ從事ス
第十四條　監吏補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ監吏ノ事務ヲ助ク
第十五條　各稅關支署ニ署長一人ヲ置キ稅關屬ヲ以テ之ニ充ツ
第十六條　各稅關監視署ニ署長一人ヲ置キ稅關監吏若クハ監吏補ヲ以テ之ヲ充ツ
第十七條　稅關支署長ハ稅關長ノ指揮ヲ承ケ其署主管ノ事務ニ從事シ部下ノ監吏ヲ監督ス
第十八條　稅關監視署長ハ上官ノ指揮ヲ承ケ水陸監視ノ事務ニ從事シ部下ノ官吏ヲ監督ス

又明治三十一年十月二十二日に至り大藏省官制の改正と共に稅關官制（勅令二百七十一號）中を改正す

第五條　各稅關ヲ通シテ左ノ職員ヲ置ク

事務官	專任	奏任	鑑定官	專任	奏任
事務官補	專任	判任	鑑定官補	專任	判任
技手	專任		監吏	專任	判任
監吏補	專任	判任			

第七條　事務官ハ各稅關ニ分屬シ稅關長ノ事務ヲ助ク稅關長事故アルトキハ之ヲ代理ス
第九條　削除
第十條　及第十五條中「屬」ヲ「事務官補」ニ改ム

附　則

本令ハ明治三十一年十一月一日ヨリ施行ス

次て翌三十二年四月二十一日（勅令第百六十一號）稅關官制を改正す之れ即ち現行官制なり

二、分課規程の配布　曩きに二十三年七月改正稅關官制を發布すると共に稅關の分課規程を配布せり

稅關分課規程別冊之通相定ム

明治二十三年七月二十一日

大藏大臣　伯爵　松方正義

稅關分課規程

第一條　各稅關ニ檢査課鑑定課調定課收入課倉庫課監視課製表課文書課會計課ヲ置キ其事務ヲ分掌セシム
第二條　檢査課ハ檢査スヘキ輸出入貨物ノ指定輸出入ニ關スル諸文書類ノ取扱及稅務ノ監査ニ關スル事
第三條　鑑定課ハ輸出入貨物ノ性質價値ノ鑑定仕入書ノ審査及數量尺度ノ査定ニ關スル事務ヲ掌ル
第四條　調定課ハ關稅及稅關諸收入ノ豫算決算收納調定ニ關スル事務ヲ掌ル
第五條　收入課ハ關稅及稅關諸收入ノ收納ニ關スル事務ヲ掌ル
第六條　倉庫課ハ倉庫ノ管守開閉及貨物ノ出納ニ關スル事務ヲ掌ル
第七條　監視課ハ船舶ノ取締海陸ノ巡察旅人旅具ノ檢査門戸上屋ノ管守及密商脫稅ノ監視ニ關スル事務ヲ掌ル

第一章　官制及分課　七

第八條　製表課ハ貿易ノ統計及諸表ノ編製ニ關スル事務ヲ掌ル
第九條　文書課ハ内外諸文書ノ取扱記錄ノ保管飜譯及職員ニ關スル事務ヲ掌ル
第十條　會計課ハ經費ノ豫算決算及其出納諸拂戻金及雜收入ノ取扱物品ノ購賣拂下保管出納所屬建物ノ營繕諸傭人ノ取扱ニ關スル事務ヲ掌ル

後二十六年十月改正官制の發布と共に更らに分課規定をも改正して之を配布せり即ち左の如し

稅關分課規程別紙之通相定メ來ル十日ヨリ施行候條此旨相達ス

明治二十六年十一月七日　大藏大臣　渡邊國武　印

（別紙）

稅關分課規程

第一條　稅關ニ檢査課鑒定課徵收課倉庫課庶務課監視部ヲ置キ其事務ヲ分掌セシム
第二條　檢査課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
一、檢査スヘキ輸出入貨物ノ指定ニ關スルコト
二、船舶及輸出入貨物ニ係ル諸文書ノ調査ニ關スルコト
第三條　鑒定課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
一、輸出入貨物ノ性質及價値ノ鑒定ニ關スルコト
二、輸入貨物仕入書ノ審査ニ關スルコト
三、輸出入貨物ノ數量及尺度ノ査定ニ關スルコト
第四條　徵收課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
一、海關稅及稅關諸收入ノ豫算決算ニ關スルコト
二、海關稅及稅關諸收入ノ調定ニ關スルコト
三、海關稅及稅關諸收入ノ徵收ニ關スルコト
第五條　倉庫課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
一、倉庫ノ管守開閉及貨物ノ出納ニ關スルコト
第六條　庶務課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
一、内外諸文書ノ取扱記錄ノ保管及飜譯ニ關スルコト
二、職員ニ關スルコト
三、貿易ニ係ル法令ノ違犯者處分ニ關スルコト
四、貿易ノ統計及諸表ノ編製ニ關スルコト
五、稅關經費ノ豫算決算及其出納ニ關スルコト
六、諸拂戻金及雜收入ニ關スルコト
七、物品ノ購買拂下保管出納ニ關スルコト
八、所屬建物ノ營繕ニ關スルコト
九、諸傭人ノ取扱ニ關スルコト
第七條　監視部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
一、密商脫稅ノ監視ニ關スルコト
二、船舶ノ取締ニ關スルコト
三、船客及旅具ノ檢査ニ關スルコト
四、稅關ノ門戸及上屋ノ管守ニ關スルコト

後二十九年六月九日右規則中に改正を施し新たに稅關長官房を設け其分掌を左の如く定めたり

稅關長官房ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

第一章　官制及分課　九

第一章　官制及分課

一、官印廳印ヲ管守スルコト
二、官吏ノ進退身分ニ關スルコト
三、內外諸文書ノ受授及記錄ノ保管ニ關スルコト
四、外國文書ノ飜譯ニ關スルコト
五、貿易ニ係ル法令ノ違犯者處分ニ關スルコト
六、貿易ノ統計及諸表ノ調製ニ關スルコト

三、監視官吏の任用　明治二十三年七月稅關官制の改正と同時に勅令第百四十四號を以て稅關監吏及監吏補ハ大藏大臣別ニ試驗規則ヲ定メ之ヲ採用スルコトヲ得其規則ニ依リ採用セラレタルモノハ普通試驗ヲ經ルニアラサレハ他ノ判任官ニ轉任スルコトヲ得ス

と達せられ是れに基きて同年八月九日稅關監吏監吏補試驗規則を發布せり

稅關監吏監吏補試驗規則

第一條　稅關監吏及監吏補ノ試驗規則ハ大藏大臣特ニ命スル所ノ試驗委員之ヲ執行ス

第二條　監吏ノ試驗及其程度ハ左ノ如シ

一　讀書　漢字交リ文及漢文ノ講讀
二　作文　假名交リ文　書牘記事若クハ論說
三　算術　加減乘除分數比例
四　筆寫　楷行兩體
五　外國語（英獨佛ノ內）　講讀書取會話飜譯
六　地理　內外地理大意
七　歷史　內外歷史大意

八　各國條約書稅關規則海關稅則港則等
九　船舶及其航海ニ關スル諸例規

第三條　監吏補ノ試驗ハ前條第一第二第三第四第五ノ五科目ヲ以テ之ヲ執行ス

第四條　監吏補志願者ハ軀幹五尺三寸以上身體強壯ニシテ年齡滿二十歲以上三十歲以下ノ者ニ限ル

第五條　試驗ヲ執行スルトキハ一箇月前官報ヲ以テ其期日及場所ヲ公告スヘシ

第六條　筆記試驗ハ受驗人總員ヲ一室又ハ數室內ニ閉鎖シ一室毎ニ試驗委員監視シテ之ヲ行フ但受驗人一名ナルトキハ該委員二名以上之ヲ監視スルヲ要ス

第七條　筆記試驗ノ問題及其數ハ各科目ニ付試驗委員之ヲ議定シ試驗ノ時刻ニ至ラサレハ受驗人ヲシテ知悉セシメス

第八條　筆記試驗ハ豫メ其答書ヲ出スヘキ時間ヲ定メ之ヲ猶豫スルヲ許サス

第九條　口述試驗ハ筆記試驗ヲ終リタル後試驗委員三名以上ノ列席ニ於テ受驗人一名毎ニ試問シテ卽時答辯ヲ爲サシム

第十條　試驗ノ評點ハ一科目ノ滿點ヲ一百點トシ各科目ノ評點ヲ合計シ科目ノ數ヲ以テ除シ得タルモノヲ平均點數トス

平均點數六十點以上ヲ得タル者ハ合格者トス但一科目四十點以下ヲ得タル者ハ平均點數六十點以上ナルモ合格者トスルヲ得ス

第十一條　受驗人試驗時間中退室スルトキハ當期ノ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第十二條　受驗人試驗委員長ノ定メタル時日及時刻ニ出席セサルトキハ當期ノ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第十三條　受驗人ハ其試驗ヲ受クルノ際試驗手續ニ關スル規則及試驗委員ノ命令ヲ遵守スヘシ犯ス者ハ監視ノ試驗委員ニ於テ退室ヲ命シタルノ後之ヲ試驗委員長ニ報告シ其試驗ヲ拒ムコトヲ得

第十四條　受驗者多クシテ一日ニ試驗ヲ執行スル能ハサルトキハ別ニ問題ヲ撰ミ試驗期日ヲ異ニスルコトアルヘシ

第十五條　受驗者ハ書類ヲ携帶シテ試驗室ニ入ルコトヲ許サス

第十六條　受驗者ハ試驗問題ニ付試驗委員ニ質問スルコトヲ得ス

第十七條　受驗問題ノ答書ハ楷書若クハ行書ニテ字體分明ニ記載スヘシ

第十八條　受驗者ハ答書ニ豫定ノ番號ヲ記スヘシ姓名ヲ掲クルコトヲ得ス

第十九條　試驗合格者ハ其試驗終リタル日ヨリ三週間以内ニ於テ試驗委員ヨリ各本人ニ其旨ヲ通知スヘシ

第二十條　試驗合格者ニハ合格證書ヲ交付シ需用アル毎ニ任用スルモノトス

第二十一條　試驗委員長ノ許可ヲ得タル者ノ外試驗室ニ入ルコトヲ許サス

備考　明治三十年六月三十日大藏大臣達ヲ以テ前揭試驗規則中左ノ如ク改正セリ

第二條五號中「外國語」ノ下「英獨佛ノ內」ノ五字ヲ削ル

第四條中「三十歲」ヲ「三十五歲」ニ改ム

第五條中「一箇月前官報」ヲ「少クモ十日前ニ官報又ハ新聞紙」ニ改ム

次テ明治二十六年十月勅令第百九十一號ヲ以テ更ニ左ノ如ク達セラル

朕稅關監吏及監吏補任用ニ關スル明治二十三年勅令第百四十四號ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

稅關監吏監吏補任用方

第一條　稅關監吏及監吏補ハ大藏大臣定ムル所ノ試驗規則ニ依リ之ヲ任用スルコトヲ得

第二條　前條ニ依リ任用シタル稅關監吏及監吏補ハ文官普通試驗ヲ要セス稅關屬ニ任スルコトヲ得

第三條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

後明治三十年四月六日別ニ稅關監吏監吏補任用令ヲ發シ其採用資格ノ範圍ヲ擴張セリ

稅關監吏及監吏補任用令（勅令第七十七號）

第一條　稅關監吏監吏補ハ大藏大臣定ムル處ノ試驗規則ニ依リ之ヲ任用スルコトヲ得

第二條　左ニ揭クルモノニシテ前條試驗ニ依リ外國語ノ試驗ニ及第シタル者ハ直ニ稅關監吏及監吏補ニ任用スルコトヲ得

一、陸海軍服役滿期ノ下士

二、公立小學校ノ正敎員

三、稅關雇員ニシテ滿二年以上勤續シタル者

第三條　本令ニ依リ任用シタル稅關監吏及監吏補ハ文官普通試驗ヲ要セス稅關屬ニ任用スルコトヲ得但シ第二條ニ依リ任用シタル者ハ滿三年以上勤續シタル者ニ限ル

同年六月稅關官制の改正ありて監視官吏として新に監視官を置かれ同時に之れか特別任用令を發布せり即ち左の如し

稅關監視官特別任用令（明治三十年六月勅令二〇五號）

豫備後備ノ海軍將校及滿五年以上稅關ノ事務ニ從事シ判任官四級以上ノ俸給ヲ受ケ現職ニ在ル者ニ限リ當分ノ內試驗ヲ要セス文官高等試驗委員ノ詮衡ヲ經テ稅關監視官ニ任用スルコトヲ得

斯の如く監視官吏として監吏補の任用はこれか任用令及試驗規則に依るの外普通判任官以上の資格を有するものは都て任用せられき而して後二十八年四月當税關に於て監吏補拜命の誓約規定に基き監吏任用の都度左の誓約書及保證書を徴せり

今後監吏補拜命ニ先チ誓約規定ニ從ヒ誓約書ヲ徴シ差出サスヘク依テ別紙規定條欵誓約書式保證書式ヲ添ヘ此旨相達ス

明治廿八年四月十六日　　監視部

大阪税關長　潁川君平　印

（別紙）

誓約規定

一監吏補試驗合格ノ上採用ニ決シタルモノハ誓約書ヲ徴シタル後任命スヘシ

一官吏服務紀律ハ勿論諸制規ニ從ヒ上官ノ命令ヲ遵奉スルコト

一職務上商人ニ對シ親切ヲ旨トスルハ勿論ナルモ猥ニ狎昵スル等ノ事ナク嚴正ヲ旨トスヘキコト

一奉職ノ上五ケ年未滿ニ一身ノ故ヲ以テ辭職セサルコト

一品行ヲ正シクシ威儀ヲ失スルコトナク苟モ体面ヲ傷フ如キ外觀擧動ヲ爲サヽルコト

一公務ノ餘暇必ス洋學ヲ研究スルコト前書ノ條欵領諾ノ上ハ誓約書ヲ出シ任命ノ上即日保證書ヲ差出スヘシ

年　月　日　　大阪税關長　潁川君平

（別紙）

誓約書式

一官吏服務規律ハ勿論諸制規ニ從ヒ上官ノ命令ヲ遵奉スルコト

一職務上商人ニ對シ親切ヲ旨トスルハ勿論ナルモ押昵スル等ノ事ナク嚴正ヲ旨トスヘキコト

一奉職ノ上五ケ年未滿ニシテ一身ノ故ヲ以テ辭職セサルコト

一品行ヲ正シクシ威儀ヲ失スルコトナク苟モ体面ヲ傷フ外觀擧動ヲ爲サヽルコト

一公務ノ餘暇必ス洋學ヲ研究スルコト

右ハ當關奉職中決シテ違背致サヽルニ付此段誓約仕候也

年　月　日　　姓　名

税關長宛

（別紙）

保證書式

府縣國郡市町村番地身分

姓　名

右今般税關監吏補拜命仕候ニ付テハ諸規則ヲ遵奉セシメ本人在職中總テ引受可申仍テ此段保證仕候也

年　月　日　　何府縣國郡市町村番地身分

保證人

姓　名　印

第二章　分課事務

イ、檢査課事務

第二章　分課事務

四、處務細則　曩きに二十六年十月改正稅關官制の發布と共に稅關分課規程を配布して稅關管掌の範圍を定めしむ爰に於て當稅關は直ちに分課規程を体として各課に於ける處務の細則を編んで之を配布せしむ其檢査課に屬するものは左の如し

檢　査　課

第一條　本課ニ賦稅係調査係ヲ置キ其事務ヲ分掌セシム

第二條　賦稅係ハ左ノ條項ニ依リ其事務ヲ取扱フヘシ

第三條　輸出入ニ關スル申告書ヲ受理シ其檢査スヘキ貨物ノ指定ヲ爲スヘシ

第四條　輸出入ニ關スル諸願届書類ヲ受理シ成規ニ依リテ之ヲ處分スヘシ

第五條　輸出入船移積戻其他ノ申告書類ヲ受理シ申告簿ニ番號又ハ要件ヲ記入シ及申告書ニ其號ヲ記入スヘシ

第六條　輸入貨物ノ陸揚願書ヲ査閲シ陸揚免狀ヲ調製スヘシ

第七條　鑒定課ヲ經過シタル輸出入貨物ノ申告書ヲ成規ニ照シ之ヲ査閲スヘシ

第八條　積荷目錄ニ記載セサル貨物ハ其事實ヲ檢覈シ重稅單稅ノ區別ヲ定ムヘシ

第九條　仕入書ヲ付セサル輸入貨物ハ鑒定價ニ從ヒ納稅スヘキ旨ヲ自記セシムヘシ

第十條　輸出入貨物ニ關シ當該課ノ過誤ヲ發見シタルトキハ之ヲ訂正セシメ又ハ其課長ニ通牒シテ之ヲ關長ニ具申スヘシ

第十一條　輸入損傷品ノ割引ヲ願出タルトキハ之ヲ査閲シ其處辨ヲ爲スヘシ

第十二條　返稅願ヲ受理シタルトキハ其事實ヲ調査シ之カ追徵又ハ還付ノ手續ヲ爲スヘシ

第十三條　諸收入金既納後過不足アルトキハ之ヲ鑒定課ニ通知シ及回議書ヲ製シ之ヲ庶務課ニ通牒スヘシ

第十五條　帝室皇族御用品在外公使ニ屬スル物品ニ關シ外務大臣又ハ大藏大臣ヨリ無檢査無稅通關ノ達アルトキハ其通關ノ取扱ヲ爲スヘシ

第十六條　輸出入貨物ノ船積陸揚其他ノ證明ヲ願出タルトキハ其手續ヲ爲スヘシ

第十七條　在港締盟各國海軍及同病院用品ノ陸揚若クハ船積ヲ願出タルトキハ各成規ニ依リテ其取扱ヲ爲スヘシ

第十八條　輸入ヲ申告シタル藥用阿片ニシテ輸入ヲ禁スヘキ性質ノモノタルトキハ之ヲ積戻サシムルノ手續ヲ爲スヘシ

第十九條　輸出シタル內國品ヲ積戻シ來リタルトキハ輸出免狀ヲ調査シ成規ニ照ラシ輸入稅免除ノ取扱ヲナスヘシ

第二十條　輸出製造烟草ノ印紙稅又ハ輸出酒類醬油造石稅ノ返戻願ヲ差出シタルトキハ調査ノ上證明ヲ與フヘシ

第二十一條　禽獸類及保護ニ困難ナルモノハ假通關ヲ願出タルトキ之ヲ許可スヘシ

第二十二條　包裝ノ損傷シ易キ又ハ巨大ナル貨物ノ艀船內檢査ヲ願出タルトキハ之ヲ許可スヘシ

第二十三條　監視部ニ派出シ旅客提携品中有稅品アルトキハ收稅ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十四條　外國船舶ヲ內國人ニ於テ買收シタルトキハ其賣買ノ届書ニ依リテ噸稅徵收ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十五條　內國船舶ヲ外國人ニ賣渡シタルトキハ其賣買ノ届書ニ依リテ內外國船ノ取扱ヲ區別スヘシ

第二十六條　預リ稅ノ手續ヲ爲ストキハ其金額ヲ假預稅通知書ニ記入シ之ヲ收入官吏ニ通知スヘシ

第二章　分課事務

シ

第二十七條　臨時開廳及定時外又ハ關外ニ於テ貨物ノ揚卸ヲ願出タルトキハ之ヲ關係ノ課係ヘ通知シ其手數料金額ヲ定メ併セテ徵收ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十八條　爆發物ヲ搭載セル船舶ハ其爆發物ニ對スル稅金ヲ預リ置キ港外ニ於テ之ヲ船卸シ其置場ヘ廻漕スルノ手續ヲ爲スヘシ

第二十九條　輸出入貨物通關免狀ノ謄本下附ヲ願出タルトキハ其手數料徵收ノ手續ヲ爲シ原書ニ依リ之ヲ調製スヘシ

第三十條　輸入手數濟貨物ヲ關內ヨリ他所ヘ回漕スルコトヲ許可スヘシ

第三十一條　調查係ハ左ノ條項ニ依リ其事務ヲ取扱フヘシ

第三十二條　出入港船舶ノ船名國名噸數日時仕出仕向港名及入港手數濟ノ日時ヲ進口簿ニ登記スヘシ

第三十三條　外國船籍證書ヲ預ケタル領事ノ證明書ヲ查閱スヘシ

第三十四條　船舶ノ入港屆ニ依リ其時刻ト豫テ進口簿ニ登記シタル時刻トヲ照合スヘシ

第三十五條　積荷目錄ヲ受領シ輸入庫入又ハ船移等ノ貨物申告書ノ記號番號個數ヲ目錄ト照合スヘシ

第三十六條　積荷目錄ハ正副二通ヲ出サシメ一通ハ監視部ニ送附シ一通ハ之ヲ保管スヘシ

第三十七條　輸入貨物ヲ積荷目錄ニ照合シ符合セサルモノヲ追加又ハ修正セシムル手續ヲ爲スヘシ

第三十八條　積荷目錄照查ノ後尙目錄上殘餘アルトキハ之カ究明調理ヲ爲スヘシ

第三十九條　輸出入商品中些細ノ見本品船積引取ノ許可手續ヲ爲スヘシ

第四十條　船舶出入港屆ヲ查閱スヘシ

第四十一條　船舶移申告書ヲ查閱シ其處理ノ手續ヲ爲スヘシ

第四十二條　輸入品ヲ海外ヘ積戻シ又ハ他港ヘ回漕スル申告書ヲ查閱シ輸入手數ノ濟否ヲ檢定之ヲ許可スヘシ

第四十三條　他港稅關ノ預リ稅品回漕免狀ヲ查閱シ其陸揚ヲ證明スヘシ

第四十四條　他港ヨリ回漕ノ貨物ニ個數等ノ差違アルトキハ其事由ヲ尋究シ之カ處分ノ手續ヲナスヘシ

第四十五條　本港ニ領事ヲ置カサル外國船舶ノ滯港中其船籍證書ヲ預リ置クヘシ

第四十六條　本港ニ於テ外國船舶ヲ他ノ外國人ニ賣渡シタルトキハ各其國ノ領事ヨリ通知書ヲ得テ之ヲ認可スヘシ

第四十七條　外國通航內國船入港シタルトキハ其船籍證書及船鑑札ヲ預リ置キ出港手數ヲ了シタル後之ヲ還附スヘシ

內國通航船ヲ外國通航船ト爲シ又ハ外國通航船ヲ內國通航船ト爲スノ屆出アルトキハ其船證書及船鑑札ヲ預リ置キ外國通航船ト爲スモノハ其出港手數料ヲ收納スル迄又內國通航船トナスモノハ外國ヨリ搭載シ來リタル貨物ヲ船卸シ內國通航ノ認可ヲ與フル迄之ヲ留メ置キ其手數ヲ了シタル後之ヲ還附スヘシ

第四十八條　內國船ノ外國ヘ航行スルトキハ出港手數料ノ收納ヲ了シタル後出港免狀ヲ附與スヘシ

第四十九條　關內ニテ公賣ヲ願出タルトキハ之ヲ許可シ關係ノ課ヘ通知スヘレ

第五十條　輸出入諸申告書ニ依リテ各書式ニ品名記號番號貨主ノ氏名等ヲ記入シ免狀ヲ調製スヘ

シ

第五十一條　內國廻漕免狀ニ回漕又ハ陸揚許可ノ記入ヲ爲スヘシ

第五十二條　稅金收入濟ノ領收證ヲ點檢シ免狀ニ關印ヲ押捺シテ之ヲ貨主ニ交付スヘシ

第五十三條　無稅品輸出入ノ申告書又ハ他港回漕申告書ト其免狀トヲ照合シ申告書及免狀ニ關印ヲ押捺シ之ヲ貨主ニ交付スヘシ

第五十四條　輸入申告書番號簿ヲ備ヘ置キ貨物輸入手數ヲ完了セシメ免狀附與ノ後之ニ納稅ノ月日ヲ記入スヘシ

第五十五條　積荷目錄中爆發物又ハ危險物ヲ記載シアルトキハ之ヲ其關係ノ課ヘ通知スヘシ

第五十六條　神戶港ヘ解船ヲ以テ船移願出ルトキハ許可ノ手續ヲナスヘシ

第五十七條　神戶港ヘ船移ノ貨物ハ即日載送目錄ヲ調製シ同港稅關ヘ遞送スヘシ

第五十八條　輸出入無稅申告書類及船移書類ヲ每日纏メテ徵收課ヘ送付スヘシ

第五十九號　船用諸品ノ船積願ヲ免許スヘシ

後二十九年六月稅關分課規程ヲ改正し新たに稅關長官房を設くると共に各課處務細則を改定せり然れとも檢查課事務の中に何等修正を加へさりし降つて三十一年四月二十七日各課處務細則を廢し更らに各課分掌規程を配布し檢查課に屬する分掌を定めて曰く

第四條　檢查課ニ於テハ左ノ事項ヲ取扱フモノトス

一、船舶ノ出入ニ關スル事項

二、積荷目錄ニ關スル事項

三、輸出入貨物ニ關スル諸申告書ノ受理及調查

四、檢查スヘキ貨物ノ指定

五、諸申告書ニ對スル免狀ノ調製

六、危險物ニ關スル取扱

七、無檢查及無稅通關ニ關スル事項

八、非商品ノ積卸ニ關スル取扱

九、禁制品ノ取扱

十、派出檢查ニ關スル取扱

十一、船用品ニ關スル取扱

十二、旅具ニ關スル取扱

十三、戾稅ニ關スル檢查證明

十四、船移貨物ニ關スル事項

十五、回漕貨物ニ關スル事項

十六、積戾貨物ニ關スル事項

十七、從價稅品買上ニ關スル事項

十八、稅金ノ假預、返戾及追徵ニ關スル事項

十九、開關仕役ニ關スル事項

二十、外國船外航船ノ船籍書類保管

二十一、免狀謄本其他證明ニ關スル事項

二十二、手數料及罰金科料ニ關スル事項

二十三、船舶ノ賣買ニ關スル事項

二十四、船舶ノ國籍及資格變更ニ關スル事項

二十五、船積品ノ調査
二十六、出入貨物幷外航船舶ニ關スル諸願届書ノ取扱
二十七、出入貨物幷外航船舶ニ關スル公文記錄請書ノ整理編纂及保管
二十八、航海奬勵法ニ依ル船舶ノ發着證明
二十九、生糸直輸出奬勵法ニ依ル生糸輸出ノ證明
五、臨時開廳及貨物積卸特許　明治二十三年九月發布したる稅關規則に基き同月十二日大藏省令第二十二號を以て臨時開廳及貨物積卸特許に對する手數料を定むること左の如し

稅關平日貨物積卸特許手數料		
一、日歿ヨリ日出迄	每一時間	壹圓五十錢
同休日貨物積卸特許手數料		
一、日出ヨリ日沒迄	每一時間	壹　圓
一、日沒ヨリ日出迄	同	壹圓五十錢
同平日臨時開廳特許手數料		
一、午後四時ヨリ同六時迄		拾　五圓
一、同　四時ヨリ同十二時迄		四拾五圓
一、同　四時ヨリ同十二時ヲ過クルトキ		九拾五圓
一、午前六時ヨリ十時迄		貳　拾圓
但シ前日ヨリ引續キ開廳ノ場合ハ此限ニ非ス		
同休日臨時開廳特許手數料		
一、午前十時ヨリ午後四時迄		貳拾五圓
一、同　十時ヨリ午後六時迄		四拾圓
一、同　十時ヨリ午後十二時迄		七拾圓
一、同　十時ヨリ午後十二時ヲ過クルトキ		百貳拾圓
同出張所平日貨物積卸特許手數料		
一、日沒ヨリ日出迄	每一時間	七拾五錢
同出張所休日貨物積卸特許手數料		
一、日出ヨリ日沒マテ	每一時間	五拾錢
一、日沒ヨリ日出迄	同	七拾五錢
同出張所平日及休日臨時開廳特許手數料		
一、日出ヨリ日沒迄	每一時間	壹　圓
一、日沒ヨリ日出迄	同	壹圓五拾錢

備考　明治二十三年十一月大藏省令第四十號により稅關休日臨時開廳特許手數料に左の如く追加す

一、午前六時ヨリ同十時マテ
但前日ヨリ引續キ開廳ノ場合ハ此限ニアラス

從來當關に於ては臨時開廳を特許するに際し關吏總員を出務せしめたりしも遂に左の如く達して爾來各課一員宛出務せしむることゝなせり

當關開關ノ節ハ總員出勤ノ處自今各課壹名宛出勤可致旨昨二十八日稅關長ヨリ口達有之候ニ付別紙之通リノ組合ニテ壹名ツヽ出勤可致樣課長ノ命令ニ候間此段及御通知候也

二十四年一日廿九日

文書課印

各課御中

二十四年十一月大藏大臣より前掲特許手數料表中の日出日沒は總て曆日に依るへしと達せられしか貨物積卸特許の時刻をして右曆日に依らしむるときは日々之れか異動を生し手數料の計算上頗る煩雜を極むるの不便を免れさるを以て當時横濱稅關に於て日出沒の豫定時刻表を作り翌二十五年十月大藏省の認許を得爾來各稅關を通して該時刻表により手數料を徴收する事となれり

貨物積卸特許ニ關スル日出沒豫定時刻表

二十四節期間日割	毎期中	間曆時豫定時刻	
	日出	日沒	日出	日沒
從一月五日至同十九日	六時五十三分	四時四十六分	七時	五時
從一月二十日至二月三日	六時四十七分	五時	七時	五時
從二月四日至同十八日	六時三十五分	五時十七分	七時	五時
從二月十九日至三月四日	六時十八分	五時三十一分	六時	六時
從三月五日至同十九日	五時五十七分	五時四十五分	六時	六時
從三月二十日至四月三日	五時三十六分	五時五十七分	六時	六時
從四月四日至同十九日	五時十五分	六時十分	五時	六時
從四月二十日至五月四日	四時五十五分	六時二十三分	五時	六時
從五月五日至同十九日	四時四十分	六時三十五分	五時	七時
從五月二十日至六月四日	四時三十分	六時四十七分	四時	七時
從六月五日至同二十日	四時二十六分	六時五十六分	四時	七時
從六月二十一日至七月六日	四時二十九分	六時五十九分	四時	七時
從七月七日至同二十一日	四時三十七分	六時五十六分	五時	七時
從七月二十二日至八月六日	四時四十八分	六時四十六分	五時	七時
從八月七日至同二十二日	五時	六時三十分	五時	六時
從八月二十三日至九月六日	五時十三分	六時十分	五時	六時
從九月七日至同二十一日	五時二十四分	五時四十八分	五時	六時
從九月二十二日至十月七日	五時三十六分	五時二十六分	六時	五時
從十月八日至同二十二日	五時四十九分	五時四分	六時	五時
從十月二十三日至十一月六日	六時三分	四時四十七分	六時	五時
從十一月七日至同二十一日	六時十七分	四時三十四分	六時	五時
從十一月二十二日至十二月五日	六時三十一分	四時二十七分	七時	四時

從十二月六日至同二十日	六時四十四分	四時二十七分	七時	四時
從十二月二十一日至一月四日	六時五十二分	四時三十四分	七時	五時

降而明治二十七年三月當關に於ては新に右臨時出務に關する規定を設けて配布せり

各課掛

臨時開關及貨物積卸特許ニ關スル出務人員來ル四月一日ヨリ別紙之通リ相定メ候條右ニ基キ出務可被致此旨相達ス

明治二十七年三月二十八日

大阪稅關長　潁川君平

（別紙）

大阪稅關臨時開關及貨物積卸特許ニ關スル出務人員豫定

—內外郵船及商船—出入港手數船—船內檢査

檢査課				
賦稅係	壹人	壹人	壹人	△壹人
調査係	壹人			
下使又ハ給仕	壹人			
鑑定課				
査定係	壹人			
開裝夫	壹人			
徵收課				
調定係	△壹人	壹人	△壹人	
收入係				
倉庫課兼査定係	壹人			
監視部	△貳人			
貨物係	壹人			
陸務係監吏補	壹人			
押印夫	壹人			
計 吏員	八人	二人	二人	
計 監吏補	壹人			
計 開裝夫	貳人			
計 押印夫	壹人			
計 下使又ハ給仕	壹人			

一乘勤監吏補臨時開關及荷仕役特許願ノ船舶ニ各貳名ヲ出務セシム

一荷仕役特許ノ節本關ハ當直員ヲ以テ兼務セシメ監視部及天保町出張所ハ常務員ヲ以テ兼務セシム

一小使水夫ノ如キハ當直員ヲ以テ兼務セシム

但非常繁忙ノ時ハ非番ノ者ヲ呼出スヘシ

△一本表ノ外非常繁忙ノ節ハ特ニ關長ノ認可ヲ經テ增員スル事アルヘシ

（備考）△は二十七年八月の改正に係るもの

後三十年七月大藏省令第十一號を以て臨時開廳及貨物積卸特許手數料を更に左の如く改正し同年八

月一日より施行せしむ

税關平日臨時開廳特許手數料		
一午後四時より同六時迄	一時間	參拾圓
一同　四時より同十二時迄	一時間	九拾圓
一同　四時より同十二時ヲ過グルトキ	一時間	百九拾圓
一日出ヨリ午前十時迄	一時間	四拾圓
但前日ヨリ引續キ開廳ノ場合ハ此限リニ非ラス		
税關休日臨時開廳特別手數料		
一午前十時ヨリ午後四時迄	一時間	五拾圓
一同　十時ヨリ午後六時迄	一時間	八拾圓
一同　十時ヨリ午後十二時迄	一時間	百四拾圓
一日出ヨリ午前十時迄	一時間	四拾圓
但前日ヨリ引續開廳ノ場合ハ此ノ限ニアラス		
税關平日貨物積卸特許手數料		
一日沒ヨリ日出迄	一時間	參圓
税關休日貨物積卸特許手數料		
一日出ヨリ日沒迄	一時間	貳圓
一日沒ヨリ日出迄	一時間	參圓
税關平日及休日臨時特許手數料		
一日出ヨリ日沒迄	一時間	貳圓

一日沒ヨリ日出迄	一時間	參圓
税關支署平日貨物積卸特許手數料		
一日沒ヨリ日出迄	一時間	壹圓五拾錢
税關支署休日貨物積卸特許手數料		
一日出ヨリ日沒迄	一時間	壹圓
一日沒ヨリ日出迄	一時間	壹圓五拾錢

本令ノ特許手數料ハ船舶壹艘毎ニ之ヲ徴收ス

翌三十一年三月二十六日大藏大臣達第六五四號を以て税關臨時出務規程を定む即ち左の如し

税關臨時出務規程

第一條　臨時開廳及時限外貨物積卸ヲ特許シタル時ハ税關長又ハ税關支署長ハ此規定ニ據リ吏員及傭人ヲ出務セシムルモノトス

第二條　臨時開廳若クハ時限外貨物積卸ヲ特許シタル場合ニ於テ税關長又ハ税關支署長出務セサル時ハ代理監督官吏ヲシテ出務セシムルモノトス

第三條　臨時開廳若クハ時限外貨物積卸ヲ特許シタル時ハ別紙甲號表（略ス）定ムル處ニ從ヒ常時其事務ヲ專擔スル吏員及傭人ヲ出務セシムルモノトス

但事務ノ狀況ニ依リ已ムヲ得サルトキハ出務人員ヲ增減スルコトヲ得

第四條　別紙甲號表二種已上ノ船舶ニ對シ出務人員ヲ定ムル時ハ其多キニ準據スルモノトス

第五條　此規程ニ據リ出務シタル者ハ毎一時間左ノ區分ニ據リ手當ヲ支給ス

資格區分	自日出至日沒	金拾壹錢	自日沒至日出	金拾五錢
判任官				

第二章　分課事務

雇　員――金九錢――金拾貳錢
傭　人――金五錢――金七錢

第六條　宿直ノ吏員及傭人ハ臨時開廳若クハ時限外貨物積卸特許ノ事務ニ從事スルト雖トモ手當ヲ支給セス

第七條　別紙乙號樣式（略ス）ニ據リ臨時出務人員簿ヲ設ケ監督官吏之レヲ整理スルモノトス

附　則

第八條　明治二十三年十月第四一二五號及明治二十六年三月第三七四號當省達ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

右規則第五條の出務手當は已に明治二十六年三月大藏大臣達第三七四號を以て從前の手當額を改正せられたるものにして該手當額に付ては別に異なる處なし且第八條中の明治二十三年十月第四一三五達は「監吏補ニ支給スヘキ額ハ傭人ノ額ニ依ルヘシ」を指すものにして爾來之に據りて監吏補に支給し來りしも前規定發布後は監吏補に對しても判任官と均一の額を支給する事となれり後三十一年四月に至り貸物係仕役出務員假心得を配布せり

貨物係仕役出務員假心得

一、貨物係仕役出務員ハ貨物係執務規定ニ依據シテ諸般ノ事務ヲ處理スヘキハ勿論ニシテ特ニ夜間ハ事務處辨ノ傍ラ上屋内外ノ火締人夫等ノ出入ニ注意シ火災盜難等ノ異變ナキヲ圖ルヘシ

一、貨物係仕役出務員ハ仕役船ノ多少波止場荷役ノ繁閑ニ拘ラス每時一人トス但特ニ部長ヨリ增員ノ命アルトキハ此限リニアラス

一、晝間（日出豫定時ヨリ日沒豫定時迄）ノ仕役ニハ必ス出務ヲ要スルモノトス

一、夜間（日沒豫定時ヨリ日出豫定時マテ）ノ仕役ニハ波止場ニ於ケル上屋内外ノ荷役中ニ限リ出務ヲ要スルモノトス

第二章　分課事務

一、夜間ノ仕役ハ其特許時限中ト雖トモ荷役ヲ了ヘシトキハ其旨監視本部ニ報告シ後事ヲ託シテ退廳スヘシ但荷役完了後ト雖トモ猶ホ引續キ出務ヲ要スル調査其他ノ要件アルトキハ之レヲ處理シタル後退廳シ翌日其事由ヲ書面ニ具シ部長ニ報告スヘシ

明治三十一年四月一日

六、輸出及回漕特許　二十四年十月十九月大藏省令第二十四號を以て勅令第百九十九號に據る外國に輸出する昆布、木材及板の三品を不開港に於て外國通船に積載し外國に航行の特許に關する手續を定めて之を公布せり

第一條　昆布木材及板ノ三品ヲ不開港ニ於テ外國通航船ニ積載シ外國ニ航行ノ特許ヲ得ントスル者ハ其都度左ノ書式ニ據リ大藏大臣ニ出願スヘシ

（願書式）

不開港ヨリ貨物輸出特許願

一輸出貨物　輸出貨物ノ名及數量ヲ記スヘシ
一船　種　蒸滊又ハ帆走
一船　名　何丸
一仕　出　港　貨物積載港ニ向ケ出港セントスル開港ノ名ヲ記スヘシ
一外國仕向港　船舶ヲ仕向ル國及港ノ名ヲ記スヘシ

右明治二十四年勅令第百九十九號及大藏省令第二十四號ニ據リ何國何港ニ於テ船積ノ上直ニ輸出仕度候間特許相願候也

何年何月何日

何府縣何市郡何町村何番地
何會社長（若會社ナルトキハ）
氏名印

第二條　前條ノ特許ニ據リ不開港ニ於テ輸出貨物ヲ積載セントスルトキハ乘監官吏ノ檢査ヲ受クヘシ但積載港若シ稅關出張所ヲ設ケタル港ナルトキハ官吏ヲ乘監セシメサルコトアルヘシ

（仕出港出港ノ期日切迫シ稅關ニ電報ヲ請ハントスル者ハ仕出港出港日ヲ追記出願スヘシ）

第三條　稅關官吏乘監ニ係ル費用ハ出願人ヨリ辨納スヘシ

第四條　貨物積載港ニ於テ貨物ヲ船積セントスルトキハ乘監官吏ノ檢査ヲ受クヘシ

第五條　貨物ノ輸出ニ關シ貨主ヨリ稅關ニ對シ爲スヘキ一般ノ手續ハ貨物積載港管轄區內ノ開港ニ於テ出願人之ヲ履行スヘシ

（參照）

勅令第百九十九號（明治廿四年十月十六日官報）抄錄

第一條　大藏大臣ハ帝國臣民ニ限リ外國ニ輸出スル昆布木材及板ノ三品ハ不開港ニ於テ外國通航內國船ニ積載シ直ニ外國ニ航行スルノ特許ヲ與フルコトヲ得

第二條　前條ノ特許ニ關スル手續ハ大藏大臣之ヲ定ム

後二十七年九月十九日大藏省令を以て內地貨物回漕の便利を得せしむる爲め當分の內海運營業者にして外國船を雇入れ內地諸港間に貨物を回漕せんと欲するもの其雇入れんとする外國船の國名、船種、船名、登簿噸數、船長姓名、現に碇泊しある港の名及貨物を回漕せんとする港の名幷本件に關する命令を遵守すへき旨を記したる願書を地方長官を經由して大藏大臣に提出する時は詮議の上六ケ月以內を標準として之を特許すへしと爲し左の規定を各稅關沿海府縣及ひ北海道廳へ配布して曰

第一　雇主ハ雇外國船航行中該船ニ乘込ムヘシ但雇主自ラ乘込ム能ハサルトキハ代人ヲシテ乘込マシムヘシ

第二　雇主特許ヲ得タル後初メテ其雇外國船ヲ回漕事業ニ使用セントスルトキハ開港ニ於テ稅關官吏ノ船內檢查ヲ請ヒ雇外國船貨物回漕特許證ニ檢查濟ノ證明ヲ受クヘシ特許期限滿ツルカ若クハ特許期限中外國船ノ解雇ヲ爲ストキ亦前項ニ同シ

第三　雇外國船開港又ハ稅關出張所ヲ設置シタル港ニ入港スルトキハ其雇主ハ入港ノ時ヨリ二十四時內ニ稅關又ハ稅關出張所ニ書面ヲ以テ其旨ヲ屆出スヘシ

前項ノ船舶出港セントスルトキハ其出港ノ時ヨリ四時前ニ屆出ヘシ

第四　雇主ハ稅關官吏又ハ地方官吏ノ要求ニ應シ何時ニテモ其船舶ノ積荷及雇外國船貨物回漕特許證等ヲ提示シ又其質問ニ應答スヘシ

第五　稅關ニ於テ必要ト認ムルトキハ本船ニ官吏ヲ乘監セシムルコトアルヘシ

第六　雇主ハ其雇外國船ヲシテ貨物ヲ回漕スル港ニ於テ船舶ニ對スル規則ヲ遵守セシムヘシ

第七　雇主ハ其雇外國船ヲ特許外ノ港ニ航行セシムヘカラス

第八　特許期限滿ツルカ若クハ特許期限中外國船ヲ解雇スルトキハ直ニ其雇外國船貨物回漕特許證ヲ返納スヘシ

第　號

雇外國船貨物回漕特許證

何府縣何市郡何町村何番地
何會社長（若シ會社ナルトキハ）

一國　名
一船　種
一船　名
一登簿噸數
一船長姓名
一回　漕　港

右何年何月何日ヨリ何年何月何日マテ前記幾港間ニ限リ貨物ヲ回漕スルコトヲ特許ス

大　藏　省

茲に於て大阪税關より之に對し内地回漕特許雇外國船雇主心得を制定し之を管轄沿岸府縣知事へ通牒せり

利第　　號

内地貨物回漕ノ便利ヲ得セシムルタメ當分ノ内海運營業者ニ於テ外國船雇入特許ノ件先般九月十九日第一九三四號ヲ以テ大藏大臣ヨリ被相達候ニ付テハ當關ニ於テ右取締ノ爲メ別紙心得書之通雇入之際夫々雇主へ相達置候條貴管下沿海諸港警察署等へ豫テ注意ノ爲メ御通達相成置候樣致度此段御通牒旁申進候也

明治二十七年十一月廿二日

大阪税關長　顯　川　君　平

管轄沿岸府縣知事宛

（別紙）

第一　本船特許ノ各港ニ於テ積入ル、回漕貨物及必要ノ船用品ヲ除ク外其他ノ貨物及何等ノ物品ヲモ一切本船ニ積込マシムヘカラス又本船ニ行商等ノ到ルヲ差止ムヘキ事

第二　不開港ニ於テハ外國船員ハ妄リニ上陸シ又ハ陸上ト交通セシムヘカラサル事

第三　特許ノ各港ニ到リタル日時該港滯留ノ日數及出港ノ日時幷ニ該港ニ於テ積卸セシ貨物ノ品名個數ヲ詳記シ置キ本港ニ歸港シタル時必ス之ヲ當税關ニ報告スヘキ事

各港ニ於テ必要ノ船用品ヲ積入レタル時ハ品名數量ヲ詳記シ置キ前項同樣當税關ニ其報告スヘキ事

第四　避難ノ爲メ特許外ノ港ニ入リタル時ハ其地警察署ヨリ其證明ヲ受ケ本港ニ歸港シタルトキ之ヲ當税關ニ出示スヘキ事

後二十八年五月十税局より該特許船にして回漕特許港に限り旅客の便乘をも許可して之を通達せり

内地諸港間ニ貨物回漕ノ特許ヲ得タル雇外國船ハ其回漕特許港ニ限リ便宜旅客ヲ搭載セシムル義差支無之義ト御承知有之度此段省議ヲ經及御通牒候也

明治二十八年五月九日

主税局長　目賀田種太郎　印

大阪税關長　顯　川　君　平　殿

越へて翌二十九年三月遂に該特許の件を廢止せしむ

第四七〇號

北海道廳
沿海府縣
税　關

去二十七年九月第一九三四號ヲ以テ及内訓候雇外國船ヲ以テ内地諸港間貨物廻漕特許之件ハ本年二月限リ廢止候條此旨相達ス

第二章　分課事務

明治二十九年三月九日　　大藏大臣　子爵　渡邊國武　印

七、貨物出入運搬仲間　二十七年一月稅關阜頭の仲仕等一種の組合を設け之を波止場貨物出入運搬仲間と稱し當稅關の認可を得て稅關波止場に於ける輸出入貨物の運搬に從事せり然れとも當時日清戰役の起るに共に川口阜頭の出入貨物頓みに減退せるを以て遂に纂年ならすして解散せりといふ今當時の屆書及規約を示せは左の如し

御　屆

今般私共申合別紙規定ニ依リ人足仲間創立仕波止場貨物出入運搬仲間ト相稱シ度候間御認可被爲成置度此段御屆申上候也

明治二十七年一月十日

大阪市北區中島五丁目百十六番邸　士族　高橋雪

同　西區本田三番町百二十七番邸　商　清水寅次郎

同　西成郡上福島村二百十番邸　商　竹田房吉

大　阪　稅　關　御　中

（別紙）

規　定

一諸貨物輻湊ノ際御關運搬夫ニ於イテ御手間之節ハ御手傳可仕候事

一上屋及波止場等ニ於イテ荷物上不都合無之樣精々注意可仕候事

一稅關構內及ヒ波止場等之掃除幷ニ夏季ニ際シ打水等相勤可申候事

一其他御用向ノ節者何時タリトモ御申付被成下度候事

一印袢天兩襟ニ波止場貨物出入運搬仲間ト記載脊ヘ西洋形(大)ノ如ク付ル事

右之通相勤可申人名左ニ申上置候

高橋雪　清水寅次郎　竹內房吉　井上猪之介

伊藤武之介　岸三造　淡路重三郎　坂井榮太郎

岩井嘉造　梶川喜太郎

諸人名中不都合有之候節ハ其旨御申聞被下候ハヽ何時タリトモ引換可申候事

以上

八、戰時禁制品に就て　明治二十七年八月二日至急官報を以て大藏大臣より清國ト開戰ニ付貿易上ニ關シ清國人ニ對シテハ都テ無條約國人ト齊シク我稅關法及稅關規則ヲ適用スヘシ

と達示すると同時に一般戰時禁制品取締に就て注意せるを以て我大阪稅關は當時淸國へ向け輸出さるゝ鐵道枕木及硫黃に對し左の如く內達せり

內外人民ヨリ淸國政府ニ於テ建築ノ鐵道ニ供給スル枕木ノ輸出ハ其海陸軍用ニ供セラルヽモノト認ムルモノハ戰時禁制品ナル旨ヲ告知スヘシ若シ帝國臣民ニシテ強テ之ヲ輸出セントスルモノアルトキハ刑法百三十條ノ犯罪ト認ムル義ト心得ヘキ旨其筋ヨリ內達有之候間御通知致置候也

明治二十七年八月廿一日

局外中立國人ニシテ淸國へ硫黃輸出セントスルトキハ戰時禁制品トシテ輸出ヲ停止スヘシ

右其筋ヨリ達有之候ニ付御廻達オヨヒ候也

二十七年八月十三日

後同月二十七日戰時禁制品取扱方心得を定め之を關中に配布せしむ

戰時禁制品取扱方心得之義別紙之通相定メ候條此旨相達ス

明治二十七年八月二十七日　大阪税關長　穎川君平 印

（別紙）

戰時禁制品等取扱方ノ義心得方左ノ通

第一項

一戰時禁制品ハ直接ニ軍需ニ供スル物品即チ鐵炮刀劔及彈藥等ノミニ限ル然レトモ此禁制品部類ニ屬スヘキヤノ疑アル物品ニ至テハ其時々部課長ヘ申出ツヘシ尤馬匹馬具獵銃烟火ハ禁制品ノ部類外ナリ

第二項

一中立國外ノ人ハ總テ中立國人ト同樣ニ見做スヘシ

第三項

一敵國ヘ輸出セントスル禁制品アルトキハ速ニ部課長ニ申出ツヘシ

第四項

一戰時禁制品ヲ交戰國外ニ仕向ケ輸出スルハ妨ケナシ

但內地開港間ニ回漕スル亦同シ

第五項

一入港ノ外國船舶ニ搭載シタル戰時禁制品ヲ清國外又ハ香港ニ仕向クルハ妨ナシト雖モ其事故ヲ部課長ニ申出ツヘシ

第六項

一入港ノ外國船舶ニシテ敵國ヘ仕向クル禁制品ヲ搭載シアルヲ認知シ又思料スルトキハ部課長ニ申出ツヘシ

第七項

一總陸揚貨物中禁制品アルカ又ハ禁制品ノ疑アルモノアルトキハ之ヲ部課長ニ申出ツヘシ

第八項

一清國ヘ向ケ乘船スル清國人ノ提携品中禁制品アルモ單ニ護身用ト認ムルモノハ之ヲ許シ然ラサルモノハ其國籍ノ何タルヲ問ハス其品ハ警察ヘ回付スヘキモノニ付部課長ニ申出ツヘシ

以上

九、貨物取扱に關する方針　二十九年六月六日輸入貨物取扱に關する方針を定め之を檢査鑑定の兩課及監視部へ配布す

指定ヲ省略シ檢査ノ上通關ヲ爲スヘキモノ左ニ

綿糸、金巾、帆布、麻袋、赤白黑砂糖、ペイント油、ロクソードエキス、フオスチックエキス、重炭酸ソーダ、パラピン蠟、機械油、アルコール、洋酒類、鐵釘、電線、鐵線、綱線、鋼線索、鐵線索、電鍍鐵板類、黃銅板、條芋、箍、帶、板ノ鐵、鐵塊、鉛塊、錫塊、亞鉛錠、薄亞鉛板、（樽入）水銀、窓硝子、空瓶、麻苧、黃麻、綿ノ實、牛角、牛蹄、糖蜜、蠟燭、洗濯石鹼、黑鉛、籐、麻織物、ブランケット、牛肉及熟皮類（函入ノモノハ除ク）

但一種ノ貨物ニシテ異同ナキモノハ本項ニ準シテ取扱フモノトス

一輸出品ハ都テ指定ヲ省略ス

一艀船若クハ本船ニテ檢査ノ貨物ハ其指定ヲ省略ス

輸　入　品

一艀船内ノ檢査ノ上通關ヲ爲スヘキモノ

一石炭、コーク、磚炭、蒸溜器鑵及機械重量機械、穀類、豆類、板及材木、碇、肥料用牛骨、棉花、羊毛、食用及運送用動物、穀粉、晒粉、油糟、レール、腐蝕ソーダ、セメント、煉火石、鐵管、鳥糞、硝石、タル及ピッチ、碎硝子、明礬、滑石、石羔、糖蜜

但斤量檢定ヲ要スル分ハ若干ヲ陸揚セシムルモノトス

一棧橋繫留若クハ港内碇泊ノ船内ニ於テハ重量機械其他粗大貨物ノ檢査ヲ特許スルトキハ本船ニテ許放ス

輸　出　品

艀船内ニテ檢査ヲ爲スヘキモノ

魚油、樟腦油、屑布、竹、敷物、硫黄、石炭、焦炭、磚炭、マンガン鑛、アンチモニー、鑛、枕木、紙製箱、綿糸板木材、セメント、種油、五升芋、茯苓、枕木、昆布

但斤量推定ヲ要スル分ハ若干ヲ陸揚セシムルモノトス

旅具中無稅ニ屬スル品類

帽、傘、杖、長短刀及「スルーブ」ノ類、旅氈、肩掛、「ブランケット」、金巾

化　粧　具

衣服及自體粧飾品、懷中時計及附屬品

以上ノ各項ハ携帶者ノ人品資格等ニ依リ當該官吏其數量ノ多寡ヲ定ムルモノトス

旅用自轉車一個、カメラ一個、望遠鏡一個、双眼鏡一個、旅用食器類一個、旅用小寢臺及椅子、旅用ノ製藥類少許、婦人小兒自携ノ玩具少許、旅用ノ筆紙墨少許、旅中提携スル樂器一種ニ付一個宛、旅用食物凡五圓以下

旅用飲料（旅中飲料入及既ニ栓ヲ拔キタル瓶ニ入レタルモノニ限ル）

葉巻莨百本入包裝ヲ開キタルモノ

紙巻莨二百本入包裝ヲ開キタルモノ

刻莨　一斤

嗅莨又噛莨　各半斤

但以上ノ各項ハ當分携帶者ノ人品資格等ニ依リ當該官吏其數量ヲ增減スルコトアル可シ

自家職業又ハ研究ニ關シ必要ノ携帶學術用具及工藝用器遠洋出漁ノトキ豫メ屆ケ置キタル潜水器具漁具類

十、外國人所屬小船　各開港間に往來する外國人所屬の小船取扱方に就て大藏省より左の如く達示せり

各開港間ニ往來スル外國人所屬ノ小船取扱方ニ付テハ各關區々々ニ渉レル趣之處右ハ自今外國ニ向ケ出港シ又ハ外國ヨリ入港シタル場合ノ外出入港手數料徵收ニ及ハサル義ト心得ヘシ此旨相達ス

明治三十年四月二十三日

大藏大臣　伯爵　松　方　正　義　印

甲第四〇號

外國人所屬小船ノ儀ニ付伺

第二章　分課事務

然るに小船といへる範圍に就て新潟稅關より大藏省に質議して曰

三十年四月二十三日第九三七號ヲ以テ各開港間ニ往來スル外國人所屬ノ小船取扱方ノ儀ニ付御達相成候處右小船ノ範圍ハ如何ナル程度迄ヲ限リテ可然哉バッテーラ樣ノモノ、ミヲ指スモノトモ存セラレス或ハ船種ノ如何ヲ問ハス不登簿船以下ノモノヲ指示スルヤニモ被考候得共其範圍ニ於テ聊カ疑義ニ相渉リ候條何分ノ御指令相仰相度此段相伺候也

明治三十年五月一日　　新潟稅關長　竹村欽二郎

大藏大臣　伯爵　松方正義　殿

これに對し大藏省より左の如く指令し各稅關の例規となさしむ

本年五月一日甲第四〇號伺外國人所屬小船ニ關スル範圍ノ件ハ船種ノ如何ヲ問ハス船籍證書ヲ受有セサルモノハ小船トシテ取扱フ儀ト心得ヘシ

明治三十年五月十二日　　新潟稅關

大藏大臣　伯爵　松方正義

十一、事務改正の決議　三十一年二月神戸稅關に於て神、阪兩稅關の各課長を命し檢査、鑑定、徵收倉庫其他庶務に關する諸般の事務に就て審査決議の結果之を實施せしむ今左に該決議錄を揭けん但た該決議の事項は各課事務の上に亘れるも檢査事務最も主要の部分を占むるを以て之を此章に收めたり

積荷目錄整理ノ件

從來輸入品積荷目錄ノ整理ニ付テハ檢査課ニ於テ船舶入港申告書ト共ニ積荷目錄貳通ヲ受理シ一通ハ監視部貨物係へ回付シ同係ニ於テモ之カ整理ヲ分擔シ來リシカ元來目錄ノ整理ハ重ニ檢査課ニ屬スヘキモノナルニ今前陳ノ如ク貨物係ニ於テモ同樣ノ取扱ヲナスモノトセハ是レ一個ノ任務ヲ二途ニ分チ管掌ノ分界ヲ亂ルハ勿論事端重複ニ渉リ不都合ナルノミナラス之カ爲メ貨物係ニ於テハ實際非常ノ繁雜ヲ滋シ反テ主管事務即チ貨物陸揚引取取締ノ事務ヲ阻碍スルノ狀態ニ陷ルヲ以テ爾後ハ右貨物係ニ於ケル目錄ノ調査ヲ全廢シ大要左ノ方法ニ依リ整理ノ實ヲ擧クヘシ

一、檢査課目錄整理ノ參考ニ供スルタメ陸揚及引取貨物ノ各品種數量ヲ每日貨物係ヨリ檢査課へ報告スルコト

二、檢査課ニ於テハ目錄整理ノ爲メ貳通ノ內一通ハ申告書トノ對照ニ供シ一通ハ貨物係ノ報告ト對照シテ陸揚現品ノ調査ニ供スルコト

三、通常貨物ノ外上陸船客ノ提携品中往々積荷目錄ニ揭載セルモノナキニアラス故ニ豫メ檢査課ニ於テ目錄ニ就キ右該當品ノ拔萃表ヲ調製シテ監視部へ送附スルコト

輸出品船積高ヲ申告書面ト照會スルノ件

輸出品船積ニ關シ實際成規ノ手續ヲ經シモノナルヤ否ヲ調査シテ中途姦詐ノ手段ヲ施スモノヲ發見スルタメ左ノ方法ヲ設クヘシ

一、檢査課ニ於テ輸出免狀交付後每日乘監者ヨリ船積品調査ノ回付ヲ得テ取扱濟ノ申告書面ト一々照合スルコト

申告書ノ授受ヲ嚴重ニスル件

輸出入申告書ハ受理後檢査徵稅手續ノ爲メ當該各課ヲ經由スルノ間若ハ徵稅結了後臨時調査ノ必要ヨリ各課授受ノ際往々紛失ノ虞又ハ所在搜索ノ不便アルヲ以テ左ノ方法ニ依ヲ之カ取扱ヲ鄭重ニスヘシ

一、輸出入有稅品申告書ヲ授受スルニハ各課必ス送達簿ヲ付シテ領收者ノ認印ヲ徵スルコト

返稅金防備案

元來本案提出ノ主旨タル鑑定課ニ於テ一旦査定ヲナシ其數量ニ依テ徵收ヲモ了シタルモノヲ實際ニ於テ過不足ヲ生シタリトテ現行手續ノ如ク再ヒ該課ニ於テ追徵若クハ返稅決議ニ參加スルトセハ是レ當初査定ノ實ヲ失ヒ其時申告書ニ押捺シタル查定者ノ認印ハ所謂盲判ニ屬シ職責上不都合ト謂ハサルヲ得ス依テ豫メ返稅金防備ノ方案ヲ講スルカ又ハ返稅若ハ追徵決議ニ自今該課ノ參加ヲ廢スルト謂フニ在リ然ルニ貨物檢查ノ法タル指定ノ方法ニ依リ全數ヲ量定スルモノナルヲ以テ時々納稅後ニ至リ實際過不足ヲ生スルコトアルハ實ニ免レサルノ數ニシテ元ヨリ相當理由ノ存スルアリ今之ヲ豫防スルノ方法ヲ他ニ求メントセハ勢ヒ他ノ取扱ニ於テ一ノ煩累ヲ惹起スルヲ免レス一利一害交々發生シ結局從來ノ取扱ニ依ルノ簡便ナルニ如カス況ンヤ盲判トイフモ實際右等理由ノ存スル且ツ貨物數量ノ查定ハ鑑定課ノ主管ニシテ必スヤ原量ノ變更ニ當リ最初査定者ノ認諾ヲ要スヘキハ當然ノ順序ニシテ實際過不足ノ結果ノミ獨リ檢查課ノ調理ニ一任シ鑑定課ノ參加ヲ要セス換言スレハ該課ノ關知スル所ニアラストスルハ事務手續上甚穩當ナラス依テ本件ハ左ノ如ク決議ス

一、成ルヘク下戻稅減少ノ方針ヲ執ルヘキモ實際過不足ノ爲メ追徵若ハ返稅ヲ要スル時ノ取扱方ハ大體ニ於テ從前ノ例ニ依ルコト

但本件ニ關シ橫濱稅關鑑定官會議決議ニ據ルニ（原量ニ朱線ヲ畫シ其下部ニ訂正數量ヲ記入スルコトハ是レ稅金調定ノ基本タル數量ヲ改作減却スルモノニシテ施テハ調定ノ效果ニモ關係ヲ及ホスヲ以テ寧ロ其儘存在セシムルヲ至當トス故ニ本關ニ於テハ原量ニ朱線ヲ畫セス一部ニ訂正數量ヲ記入シテ取扱者其傍ニ認印スルコトニ一定ス其各港取扱ヲ區々ニスルノ點ハ之カ調理ヲ石川主稅官ヘ依賴スヘシ

二、從來決議書ニ監視部貨物係ノ合評ナキモ爾後ハ同係ノ合評ヲ加フルコト

三、貨物ノ全數ヲ分割シテ申告セシメ其殘數ニ對シテ預稅ヲナサシムルハ下戻稅減少ノ方針ニ於テ大ニ便宜アルヲ以テ出來得ル限リハ從來糖蜜石油取扱ノ範圍ヲ擴張シテ返稅ノ煩ヲ豫防スルニ注意スヘキコト

四、塊鐵及熟鐵等ハ下戻稅ノ多寡ニ關係アルノミナラス實查上最確實ナルヲ要シ一定ノ陸揚場ヲ設クルハ極メテ必要ナリ故ニ小埜濱波止場完成マテ該品ノ陸揚場ヲ本關前灣南側ノ場所ニ限ルコト

申告書面記載ノ貨主姓名ヲ仕入書記載ノモノト同一ナラシムル件

從來申告書面記載ノ姓名往々仕入書面ト符合セサルモノアリ之ヲ受理スルハ取扱上不都合ナルカ如シト雖是レ輸入本人ヨリ委託ヲ受ケタルモノ自己ノ姓名ヲ記載スルカ故ニシテ之ヲ條約書ニ照スニ（ヲーナト）若ハ（コンサイニー）トアリ稅關規則ニ依ルモ貨主ト稱スルハ貨物ノ所有主若ハ其受託人ヲ云トアリ結局輸入本人ノ委託ヲ受ケテ申告セシモノト見ハ不可ナカラン但所有權ノ存在ヲ確ムルノ點ニ於テ受託人ハ所有主ヨリ合法ノ委任ヲ受クルヲ要シ稅關ニ於テモ之ヲ調查確認スルノ必要アラサルヤ否ハ猶研究ヲ要スルモノアリ依テ他日ノ再議ニ讓ルコトヽナシ姑ク舊慣ニ從フ

右ノ如ク申告書ニ受託人ノ姓名ヲ記載スルノ結果輸入本人ハ外國人ナルモ受託人日本人ナルカ爲メ統計上實際外人ノ輸入ヲモ表面日本人ノ輸入トナサヽルヲ得サルニ至リ頗ル穩當ナラサル嫌アリ寧ロ受託人ニ對シテハ仕入書面ニ依リ何々代某ト記載セシムル方至當ナラントノ一說アリ記シテ後日ノ參考ニ供ス

大阪ヨリ稅濟ノ輸出貨物神戶ヘ回漕ノ件

當港後藤勝造ヨリ大阪稅濟貨物ヲ神戶港ヘ回漕スル艀船ヘ監吏補ノ乘監ヲ乞ヒ且其旅費ヲ辨シ當

港ニテ本船ヘ積込ノ節ハ再檢査ヲ行ハスシテ積込ヲ許可センコトヲ願出シカタメ議題トナル監吏補ヲ乘監セシメ途中ノ姦詐等ヲ豫防セシムルコトセハ可ナルカ如シト雖現今ノ定員ニテハ迚モ其都度之レカ乘監ヲ辨スル能ハス貨主ヨリ旅費ヲ徵シ之レヲ官吏ニ付與スルコトハ會計法ノ精神ニ背戻スルヲ以テ橫濱稅關ノ如キモ已ニ此事ハ廢セリ故ニ是等ハ不可ナリト石川主稅官ノ談話アリ

從來大阪稅關ヨリ稅濟ニテ回漕シ神戶碇泊ノ外船ニ積込ムモノハ其艀船着ノ上ハ大阪稅關ヨリノ回漕免狀ヲ添ヘ更ニ申告書ヲ神戶稅關ニ差出サセ其現品ヲ檢シ大阪免狀ノ僞之ヲ利用シ小廻船ヘ云々ノ文字ヲ消シ何號船ヘト書改メ積込ヲ許可スルノ證トナスノ慣行ト爲リ居レリ然ルニ已ニ大阪稅關ニ於テハ檢査ヲ經納稅ヲモ了シタルモノヽ更ニ神戶ニ於テ再檢査ヲ行フハ商人ノ不便少ナカラス因テ直ニ再檢査ヲ廢センカ艀船ニテ回漕ノ途中或ハ姦詐ヲ爲スノ虞ナキニ非サレハ之ヲ全廢スルニハ之ニ對スル取締ノ良法ヲ講セサルヘカラス故ニ其良方法ヲ看出サヽルノ今日ニ在テハ左ノ通取扱フノ外ナカルヘシ

大阪稅關ヨリノ稅濟貨物ヲ神戶ヘ回漕スル艀船ニシテ鎖錠ヲ以テ貨艙ヲ鎖シ容易ニ在中ノ貨物ヲ引出スノ虞ナク其構造完全ノ點ヲ稅關ニ於テ認メ之ニ認可ヲ與ヘタル艀船ニ限リ其積載セル貨物ハ神戶稅關ニ於テ再檢査ヲ行ハス本船ニ積載ヲ許スコト

右ノ如ク一應決セシカ尙熟議セシニ艀船ヲ完全ニセントセハ其建造ノ價直ヲ高メ之ニ應スルノ利益ナケレハ實際完全ナル艀船ヲ建造セサルヘシ然ルトキハ右ハ徒法ニ屬シ其詮ナカルヘシ曾テ曳船會社ニ於テモ鎖錠アル艀船ヲ製シタルモ外部薄弱封鎖ノ効ナク遂ニ其事モ永續セスシテ今日ニ至リシ現例アリ故ニ右等鎖錠等ノ事ハ實行ヲ猶豫シ寧ロ從來ノ取扱方法ヲ良全ナラシムルノ點ニ注意シ即チ免狀面ノ文字ヲ改作スルカ如キ不當ノ點ヲ廢シ其良法ヲ講セハ可ナラント

テ委員ニ附託シ左ノ如ク決ス

大阪稅關輸出手數濟貨物ヲ當港ニ於テ外國航船ヘ積込ントスル時ハ大阪稅關輸出免狀ヲ申告書ニ添ヘ檢査課ニ差出サハ申告書ト免狀ヲ對照シ相違ナクハ左記ノ如ク免狀ニ裏書ノ上申告書ハ檢査課ニ留置キ免狀ハ貨主ニ交付ス貨主ハ之ヲ貨物係ニ差出シ記號數量等對照ノ上之ヲ許可シ若シ相違アルカ又ハ疑點ヲ生スルコトアルトキハ之ヲ檢査課ニ回付シ檢査課ハ相當ノ處分ヲナスヘシ

表書之貨物　係印　船ヘ
船積差許候也
木判
年月日　神戶稅關印

申告書ト
免狀トノ
割印　廳印

輸入稅未濟貨物大阪回漕ノ件

輸入稅未濟貨物ノ取締ニ至テハ現今取締手續ノ外ニ別ニ適當ナル取締ノ方法ヲ看出ス能ハス依テ

大阪稅關管轄區域ヨリ當神戶稅關管轄區域迄茅渟海ノ沿岸ハ其區域中ニ各監吏補ヲ巡回セシメ且西ノ宮ニ監視署ヲ置キ以テ其取締ヲ完全ナラシムルノ計畫ヲ後日ニ實行スルヲ企圖スヘキ事

輸出入貨物申告番號ノ件

從來輸出入品申告書ノ番號ハ輸入品ヲ除クノ外總テ受理ノ際之ヲ附記セス免狀調製ノ時ニ至リテ之ヲ記入シ就中無稅品ノ如キハ別ニ申告番號簿ノ設ナク單ニ申告書ト免狀ニ之ヲ記入スルニ止マ

リ取扱順序統一ナラス依テ之ヲ改正スルコト左ノ如シ

一、輸出入品申告番號簿ハ輸出及輸入ノ二冊トナシ有無稅品共申告書受理ノ都度之ヲ登記スルコト

但輸出品ニシテ第三波止場若ハ兵庫出張所ニ於テ現品ノ査定ヲ要スルモノニ限リ査定ノ後之ヲ番號簿ニ登記スルコト

二、申告書ノ番號ハ一月ヨリ十二月迄一ケ年ヲ通スルコト

三、申告書及免狀ノ番號ハ總テ申告番號ヲ用ユルコト

四、免狀交付ノ時ニ至リ有稅品ハ稅金領收書番號ヲ無稅品ハ無稅ノ旨ヲ番號簿ニ記入スルコト

五、番號簿ハ便宜日ヲ定メテ前日登記ノモノニ對シ免狀交付ノ濟否ヲ調査シ未濟ノモノアルトキハ事由ヲ詮索スルコト

六、前項詮索ノ結果中途引下ノモノアルトキハ其旨ヲ番號簿ニ記入シ置クコト

兵庫出張所輸出無稅品取扱方ノ件

從來兵庫出張所ヲ經テ無稅品ヲ輸出スルニハ專ラ貨主ノ便宜ヲ主トセシカ爲メ却テ寬大ニ失シ取締上欠點ナキ能ハス依テ其取扱方法ヲ改定スルコト左ノ如シ

一、兵庫ヨリ輸出スル貨物ニ限リ本船入港前ト雖申告書ヲ受理スルコト

二、兵庫出張所ニ於テ輸出無稅品ノ申告書ヲ受理シタルトキハ豫メ同所員ノ下調ヲ了シタル後貨主ヲシテ之ヲ本關檢査課ヘ轉致セシメ尋常ノ手續ヲ經テ免狀ヲ交付スルコト

但申告書及免狀ニハ兵庫積出品ナルコトヲ明記スルヲ要ス

三、本船入港ノ後ニアラサレハ右出張所ニ於テ貨物船積ノ許可ヲ與ヘサルコト

海關稅其他收入書類再調査委員ノ件

一、海關稅其他收入書類再調査ノ事務ハ特ニ主任ヲ命シテ之ヲ取扱シムルコト

一、右委員ハ一定ノ期日內ニ必ス調査ヲ結了シ會計檢査院ヘ提出ノタメ之ヲ徵收課ヘ引繼クコト

危險品鑑別方ノ件

上屋入ノ貨物總陸揚ノ節ハ其品種ノ何タルヲ論スルニ暇ナク一同ニ上屋ヘ投入スルヲ以テ往々上屋貯入ヲ許スヘカラサル危險品ヲ混入スルコトアリ故ニ上屋貨物ノ出入ヲ整理セント欲セハ先ツ之ヲ防止スルノ方法手段ヲ講セサルヘカラス其方法左ノ如シ

第一　貨物係ニ於テハ其包裝ノ模樣ニ依テ危險品タルコトヲ識別スルニ注意スルコト

第二　檢査課ニ於テハ積荷目錄中ニ判然タル危險品ヲ認メハ直ニ貨物係ヘ通知スヘキ事

第三　鑑定課ニ於テハ仕入書調査ノ際危險品アルヲ認メハ直ニ貨物係ヘ通知スヘキ事

第四　波止場ニ於ケル危險品檢查場ハ標木ヲ立ツルコト

第五　危險品ハ無請求ノモノアラハ其置場ハ小野濱ニ限ル

第六　危險品ノ品目ヲ一定スルコト

船用品取扱方ノ件

從來船用品ニシテ少量ノ燃料食物等ハ監視課ニ於テ直ニ船積ヲ許シ其多量ナルモノニ限リ申告書ヲ出サシメ檢查鑑定ノ兩課ヲ經テ之ヲ許スノ手續ナルカ實際ハ兩課ヲ經ル迄ニシテ其實品ヲ檢查シ鑑定スルニモアラス其手數ハ徒ニ其煩アツテ益ナシ況ンヤ其多少ノ量ヲ測定スルノ準據スヘキ基本アルニ非ス寧ロ監視課ニ於テ之レカ許否ヲ擔任スルノ優レルニ加カストノ說アリシカ一體外國條約書ニハ船用品ニハ申告書ヲ出サスシテ可ナルモノトナリ居リ稅關規則ニハ之ニ反シ內外其取扱ヲ異ニスル筈ナルモ今日ニ在テハ前述ノ如キ慣行ヲ爲セリ故ニ此等ハ遠カラス改正セサルヲ得ス先ツ今日ニ在テハ從來ノ慣行ニ依ルヘシ唯其申告ノ如キ多クハ暫ク食料商又ハ石炭商等ノ名

ヲ以テセシハ其當ヲ得サレハ後來ハ船長又ハ代理ヨリ申告セシムルコトニ改ムヘシ

波止場外ヨリ陸揚貨物ノ件

從來重量器械其他石油等ノ物質ヲ波止場外陸揚ヲ願ヒ許可ヲ得シモノハ僅ニ其一部ヲ臨檢シ又ハ其一部ヲ艀船ニテ定規波止場ニ搬送セシメ之ヲ檢スル迄ニシテ其他ハ本船ヨリ逐次指定ノ場所ニ陸揚スルコト、ナレハ其檢査ノ方法モ精密ヲ欠キ爾來監吏員ノ附與セシ切免狀モ陸揚後ハ貨主ヨリ返付ヲ怠慢スルコトナキニ非ス今左ノ條項ヲ議決ス

第一　右等ノ物品ノ陸揚場ハ凡ソ小野濱蟹川高濱和田岬ニ限ルコト

第二　切免狀ノ整理ヲ嚴重ニスルコト

第三　檢査監視等ノ方法ヲ嚴ニスルニハ吏員ノ增加ヲ要スルヲ以テ後日ニ於テ之レカ增員ヲ圖ルコト

第四　檢査課ヨリ豫メ波止場外陸揚物品特許スル其品目ヲ一定シ置クコト

第五　器械油等ノ如キハ檢印代證ヲ廢シ現場ニ於テ個々ニ檢印スル方法ヲ取ル然レトモ現今ノ人員ニシテ之ヲ辨スル能ハサルヲ以テ之ニ對スル增員ヲ圖ルコト

入庫無請求品船移ノ件

無請求品ヲエゼント等ヨリ出庫シ船移願出ルトキハ之レヲ開裝セサレハ其品種ヲ知リ其庫租ヲ算定スル能ハス之レカ開裝ヲ諾セサル時ハ漫ニ之ヲ強行スヘカラサルハ明治十五年六月二十日神戸稅關伺元第九十八號ニ對スル指令ノ意ヲ推スモ明カナリ然レトモ其庫租ハ徵セサルヲ得サルヲ以テ其取扱ハ左ノ如ク定ム

倉庫課ニ於テハ其貨物外部包裝ノ模樣ニヨリ之ヲ鑑別シ其種類ノ指定シ難キ時ハ雜貨ノ庫租ニ準ス

右等開裝ヲ拒ム場合ニハエゼントヨリ稅關指定ノ庫租額ニ承服スル旨ノ受書ヲ徵スヘキコト

無稅品幷稅濟品ヲ借庫ニ貯藏ノ件

借庫ノ性質ハ稅未納品ヲ貯藏スルモノニシテ無稅品又ハ稅濟品ヲ貯藏スヘカラサルハ條約第十條借庫規則第十八條ニ依リ明カナリ然レトモ從來ヨリ上屋ノ貨物堆積シ整理上引取ラサル貨物等不得已借庫ニ移搬シ貯藏スルコト、ナレリ今遽ニ之ヲ改メントスルモ實行ニ難ム故ニ成ルヘク之ヲ逐ヶ暫ク慣行ノ儘ニ施行スルコト

空地貸幷庶庫ノ件

空地貸ハ規則上之ヲ施行セシモノニ非ス粗大ノ貨物差置方ヲ貨主ヨリ願ヒ稅關ニ於テ之ヲ特許セシ迄ノ慣行ナルカ現今波止場ニ貨物堆塞シ狹隘ヲ告ケ居際此慣行ヲ繼續スル時ハ他物揚卸ノ防害ヲナスニ付從來ノモノハ其期限ノ滿ツル迄トシ今日ヨリ以後ハ一切貸與セサルコト

庶庫ハ全ク貸庫營業ノ部ニシテ官ニ在テ營ムヘキ事ニ非ス其初之ヲ設ケシモノハ條約ニ基キシモノニアラス又規則ニ從フニモアラス故ニ今日ニ在テハ庶庫ハ之ヲ廢スルコト

上屋人足ノ件

上屋規則ニ依リ假庫又ハ借庫ニ搬入スル人足賃ハ從來倉庫課ニ於テ其貨主ヨリ請求シ之ヲ上組ニ附與スルノ例ナルヲ以テ倉庫課ハ其現金ヲ取扱ヒ煩擾ヲ受ケルノミナラス且無請求品ヲ搬入セシモノ杯ニ於テハ其賃錢ハ一ケ年ヲ過キテ之レカ仕拂ヲ爲サヽルヲ得サルノ場合アリ彼レ之ヲ怠ヒ嗷々セサルモ一體此等ノ賃金ハ官ヨリ之ヲ人足ニ給シ官ハ之ヲ貨主ヨリ徵スルヲ至當ノ法トス只如何セン今日ニ在テハ是等支給ノ定額金ナキヲ以テ先ツ倉庫課ニ於ケル現金取扱ノ方法ヲ改正スルノ必要ヲ認メ其方法ハ監視倉庫庶務三課ノ調査ニ付托スルコト

上組人足ハ稅關波止場ニ於テ荷物運搬ノ專權アルカ如キ狀況アルヲ以テ運搬賃錢ノ高低モ自カラ

專恣ノ擧動アリ何トカ別ニ矯正ノ方法ヲ講スルヲ可ナリトスルノ說アリシカ其方案ハ別ニ構內ニ出入スル車馬取締規則トモニ委員ニ附託スルコト

保稅倉庫藏置出願ノ貨物ニシテ上屋規則期限經過ノモノ取扱方ノ件

保稅倉庫藏置出願ノ貨物ニシテ入庫前貨主ノ都合ニヨリテ上屋規則ニ依リ借庫ニ移納ヲ要スルノ結果ヲ生スルモノアリトセンニ當初ヨリ保稅倉庫へ藏置出願ノ貨物ニ對シ別途上屋規則ノ拘束ヲ受ケシムルハ稍不穩當ノ感アリ然レトモ本來保稅倉庫法ニハ上屋規則ノ範圍ヲ含蓄セサルハ勿論右ノ場合ニ對シテ適用スヘキ明文ナキヲ以テ之カ取扱方ヲ本省へ伺フコト

但保稅倉庫法規ト上屋規則ト兩々施行今猶撞着ノ件アルヘキヲ以テ該調査ヲ倉庫課長ニ附託ス查定濟ノ貨物ニ目標ヲ付スル件

從來波止場內貨物ハ查定濟否識別ノ法ナク取扱上不便尠ナカラス依テ是等ヲシテ一目判然ナラシムル爲メ自今查定濟ノ貨物ハ鑑定課查定係ニ於テ一定ノ目標ヲ付スルコト

但標記ノ方法ハ鑑定課ノ考案ニ附ス

旅具稅金領收證取扱方左ノ通改定スヘシ

旅具稅金領收證取扱方ノ件

一、旅具徵收ノ時ハ監視部旅具檢查課ニ於テ稅金取扱證ヲ附與スルコト

但用紙ハ扣書符合ノ便ニ供スル爲メ切形アルモノヲ用ユルヲ要ス

二、旅具課稅仕譯書ニ依リ徵收課ニ於テ發行スル領收證ハ納稅人各自ニ之ヲ付與スルコト

輸出戻稅品檢查證明願ニ對シ手數料徵否ノ件

稅關規則第四十六條ニ稅關ヨリ交付スル諸免狀ノ謄本其他別段ノ證書ヲ請フ者ハ一通每ニ壹圓五拾錢ノ手數料ヲ納ムヘシトアリ而シテ當關ニテハ從來輸出醬油煙草酒類等ノ檢查證明願ニ對シ右ノ手數料ヲ徵收セス違法ノ取扱ナルニ似タリ依テ一應各港ノ取扱ヲ問合セタル上ハ再議スルコト

分課細則設定ノ件

現在各課若ハ部內係ノ名稱穩當ナラサルモノアルニ似タリ且ツ各課係事務分掌ノ區界ニ付テハ最モ明書ヲ要スヘキモ處務細則ニ於テハ事務ノ分擔明晰ナラサルモノアルカ如シ分課規定ノ範圍ニ基キ別ニ分課細則ヲ制定スルコト

事務取扱順序編纂ノ件

關稅ノ事務ハ貨物船舶ノ別ナク事端最モ複雜ニシテ且ツ秩序最モ一定ナラサルヘカラス然ルニ現在事務取扱ノ方法タル　率口碑ニ依リ從來ノ慣行ヲ因襲スルニ過キス爲メニ臨機區々ノ取扱アルヲ免レス但處務細則ノ設アリト雖單ニ每課ニ就キ事務ノ大要ヲ臚列セシノミ未タ以テ取扱順序ノ顚末ヲ究ムルニ足ラス依テ事務取扱順序ヲ編纂スルコト

右編纂ノ方法ハ豫メ各部課長ニ於テ所管事務ニ就キ現行手續ヲ詳記シテ差出スコトヽス

輸出入申告書謄寫手數料

從其輸出入申告書謄寫願ニ對シテハ統計係ニ於テ專務ノ傭人ヲ使役シ願人ヨリ每月一定ノ料金ヲ徵收シテ直接之ヲ傭人ニ交付スルノ例ナルモ右ハ會計法ニ背キ不穩當ノ取扱タルヲ免レス故ニ該手數料徵收方ヲ本省へ稟議スルコト至當ナルカ如シ但右ノ如クナルトキハ傭人ノ俸給ハ別途經費ヨリ支出セサルヲ得サルモ目下ノ豫算ニテハ之ニ應スルノ餘裕ナク先ツ其支辨方法ヲ講セサルヘカラス依テ該調查ヲ庶務課長ニ委託シ其報告ヲ待テ再議スルコト

申告用紙ノ件

輸出入品其他一切ノ申告書式用紙ハ豫メ庶務課用度係ニ於テ檢查ノ上檢查濟ノ證印ヲ施スヘキヲ以テ受理ノ際之ニ注意スルコト

但用紙專賣ニ付テハ更ニ調査ヲ要ス

船難報告幷同證書願書取扱方ノ件

從來船難報告幷同證書ノ願書ハ之ヲ文書係ヘ受理シ檢査課ヲ經由シテ徵收課ヘ送付スルノ慣例ナルモ自今檢査課經由ヲ廢シ直ニ徵收課ヘ送付スルコト

十二、船舶出入統計　最近四ケ年半の間に於て大阪港へ出入せる西洋形船舶の數は左の如し

大阪港最近四ケ年半間各國西洋形船出入表

國別		二十七年		二十八年		二十九年		三十年		三十一年上半期	
內國滊船	入	六、八六八	入	七、九八一	入	九、七〇九	入	五一、四四			
同帆船	出		出	八、〇二二	出	九、六五八	出	五一、三四			
同軍艦	入	六、八六四	入	八三	入	六六	入	七七			
	出		出	八五	出	七三	出	一一九			
獨乙滊船	入	二	入	二五	入	一	入				
	出	二四	出		出		出				
英國滊船	入	一七	入	一	入		入				
	出		出		出		出				
同帆船	入		入		入		入				
	出	一七	出	四	出	一	出				
韓國滊船	入	一二	入	二	入	二	入	二			
	出		出	二	出		出				
同帆船	入		入		入		入				
	出	一三	出	四	出		出				
諾威國滊船	入		入		入		入				
	出		出		出		出				
米合衆國帆船	入		入		入		入				
	出		出		出		出				
丁抹國滊船	入		入		入		入				
	出		出		出		出				
布哇國帆船	入		入		入		入				
	出		出		出		出				
露國帆船	入		入		入		入				
	出		出		出		出				

備考

一明治二十七八年ハ滊船帆船ノ區別不分明ニ付之ヲ合記ス

四、鑑定事務

鑑定課

十三、處務細則　二十六年十月配布の鑑定課に屬する處務の細則に據れは左の如し

第一條　鑑定課ニハ本課及査定係ヲ置キ事務ヲ分掌セシム

第二條　本課ハ左ノ條項ニ依リ其事務ヲ取扱フヘシ

第三條　輸出入貨物ノ種類品質ヲ審査シ有稅無稅從量從價ノ鑑別ヲ爲スヘシ

第四條　輸出入貨物ノ價格ヲ審査シ其貨價當ヲ得サレハ鑑定價ヲ附スヘシ

第五條　仕入書ニ記載シアル輸入貨物ノ品名價格數量尺度ヲ精査シ之ヲ輸入申告書ニ照シ或ハ現品ヲ實檢スヘシ

第六條　再輸出入貨物ニ對シ其內外製產ヲ鑑別スヘシ

第七條　仕入書ヲ附セサル輸入貨物ハ鑑定價ヲ附スヘシ

第八條　輸出入申告書仕入書等ヲ精査シ納稅ヲ通脫シ若クハ減少セシメカ爲メ詐僞ノ所爲ニ出テタリト認ムル時及禁制品又ハ犯則ノ物品ヲ發見シタルトキ其旨ヲ關長ヘ具申スヘシ

第九條　輸出入貨物ノ有稅無稅又ハ從量從價ノ類別ニ對シ貨主ニ於テ不服申出テタルトキハ其事由ヲ關長ニ具申シ或ハ之カ意見書ヲ呈出スヘシ

第十條　貨物損傷ノ程度ヲ定メ之ヲ申告書ニ記載スヘシ

第十一條　輸入貨物ノ製產地若クハ製造地ヲ調査スヘシ

第十二條　輸入貨物ノ製產地包裝費運賃保險料其他諸費ヲ仕入書ヨリ抄錄スヘシ

第十三條　關外ニ於テ檢査特許ノ貨物ハ其所在ニ出張シテ之ヲ鑑定スヘシ

第十四條　內外商品ノ物價ヲ調査スヘシ

第十五條　內外商品ノ標本ヲ蒐集保管スヘシ

第十六條　旅具檢査場ニ派出シ旅客提携品ノ類別ヲ爲シ及有稅品ニ對シ評價ヲ爲スヘシ

第十七條　外國貿易年報ニ係ル貿易ノ盛衰商況ニ關シ各內外商人ヨリ蒐集シタル報告ヲ取纏メ之ヲ庶務課ニ送附スヘシ

第十八條　査定係ハ左ノ條項ニ依リ事務ヲ取扱フ

第十九條　輸出入貨物ノ種類品質數量尺度ヲ實査シ及其成績ヲ申告書ノ裏面ニ記載スヘシ

第二十條　檢査課ニ於テ指定シタル部分ノ外本課實査又ハ當該者ニ於テ必要ト認ムルトキハ其他ノ部分ヲモ實査スヘシ

第廿一條　貨物ト申告書ヲ照合シ記號番號個數ニ相違アルトキハ檢査課ヘ其申告書ヲ送附シ之カ更正ヲ求メ又品種品質數量等申告書ト符合セサルトキハ其詐僞ト誤謬トヲ檢覈推究シ詐僞ニ出タリト認メ若クハ疑アルモノハ其旨ヲ課長ニ通知スヘシ

第廿二條　輸入貨物ノ記號番號不明ナルモノニハ符印ヲ捺シ又鐵塊鐵條鐵板ノ如キモノニハ丹汁ヲ以テ標示ヲ施シ實査ヲ終リタルヲ證スヘシ

第廿三條　關外又ハ艀船內ニ於テ檢査特ニ爆發物及其他ノ貨物ハ其所在地ニ出張シテ之ヲ實査スヘシ

第廿四條　申告書又ハ仕入書ニ記載セサル物品ヲ發見シタルトキハ之ヲ本課ニ通報スヘシ

第廿五條　外國船又ハ外國通航內國船ヲ以テ他ノ開港ヨリ回漕セル內國品及輸入手數既濟ノ貨物ヲ檢査シ之ヲ他港稅關ノ回漕免狀ニ照合シ及檢印ノ有無ヲ申告書ニ書シ又ハ他ノ開港ニ回漕シ若クハ外國ニ積戻ル貨物ヲ檢査シ之ヲ其申告書ニ記載スヘシ

第廿六條　輸出ノ後印稅之下戻ヲ要スル烟草ハ之ニ貼付シアル印紙ノ枚數及其金額ヲ查定シ又造石稅ノ下戻ヲ要スル酒類及醬油ハ分量及製造地ヲ查定シ之ヲ其申告書ニ記シ置クヘシ

第廿七條　貨物檢查ノ際輸出入禁制品若クハ犯則ト認ムル物品ヲ發見シタル時ハ之ヲ抑留シ置キ其旨ヲ本課ニ通知スヘシ

第廿八條　輸入申告書ノ貨物全數陸揚ヲ了ラサルモ貨主陸揚シタル部分ノ通關ヲ乞フトキハ其部分ヲ檢查シ追テ殘餘ノ檢查ヲ要スルトキハ其旨ヲ申告書ニ記載スヘシ

第廿九條　輸入申告書ニ記載セル貨物全數ノ所在ヲ見出シ難キ時ハ其申告書ヲ監視部貨物係ヘ交付シ陸揚個數ノ證明ヲ受クヘシ

第三十條　神戶港ヨリ稅未納又ハ稅濟ノ火藥其他爆發品ヲ輸入シタルトキハ其搭載艀船ハ田中新田倉庫ノ側ニ繫留セシメ現場ニ出張檢查スヘシ

後二十九年六月分課規程改正の時に當りても依然此細則に據りて執務し來れるも三十一年四月新たに分掌規程の改定と共に左の如く規定せり

第五條　鑑定課ニ鑑定係、査定係ヲ置ク

第六條　鑑定係ハ左ノ事項ヲ取扱フモノトス

一、申告書及仕入書ノ調査
二、輸出入貨物ノ種類、性質、價格ノ鑑定及産地、製造地ノ檢査
三、貨物損傷程度ノ調査
四、品質ノ分拆試驗
五、輸入貨物諸費歩合ノ算定
六、輸出入貨物税率ノ擬定
七、税金ノ逋脱ニ關スル詐僞ノ申告書及仕入書ノ調査
八、從價税品買上ニ關スル取扱
九、輸出入貨物ノ時價及外國貿易ノ實況調査
十、輸出入商品標本ノ蒐集及保管
十一、乙號課税原簿ノ整理

第七條　査定課ハ左ノ事項ヲ取扱フモノトス

一、輸出入貨物ノ檢査幷個數、記號番號ノ調査及數量尺度ノ査定
二、貨物損傷程度ノ査定
三、開裝夫ノ指揮監督

十四、鑑定官吏の協議及決議　三十年十月各税關鑑定官吏を横濱に會し鑑定事務に關する各事項の協議及主税局の諮問に對する決議をなし是を翌十一月十五日より施行せしむ協議事項及ひ主税局諮問案の決議は左の如し但左主税局諮問按決議は之か實施をなさゝりし

税關鑑定官吏協議會決議錄

風袋純量及ヒ重量ノ換算ニ關スル事項

一斤量ニ從テ課税スル從量税品ノ中其風袋ヲ別表(甲號別表)載スルモノハ各港概略之ヲ標準トシテ取扱フ事

一香港及ヒマニラヨリ輸入スル赤砂糖ハ當分各關實査ノ成蹟ニヨリ徴税スル事

一赤砂糖ニ對スルマニラノ一担(ピクル)ハ英斤百三十九磅半ノ割合ヲ以テ日本斤ニ換算スル事

一「リンシード」油英壹瓦倫ノ重量ヲ仕入書ニ記載シアルモノハ當分英瓦倫ニ付九「ポンド」ノ割合ヲ以テ取扱フ事

一水銀壹鐵ノ純量ハ從前ノ慣行ニ依リ取扱フ事(即チ歐洲産ハ五十六斤二分五厘米國産ハ五十七斤三七五ナリ)

一仕入書面ニ佛量「キログラム」及噸ノ兩樣記載シアルトキハ其重量ニ幾分ノ差異アルヲ免レス此場合ニ於テ申告書面ニ記入スヘキ重量ハ價格ヲ算出スル所ノ重量ニ基キ換算スル事

一葉巻煙草ノ重量ヲ査定スルニハ出來得ル限リ品種ニ依リ各平均ノ歩合ヲ算出シテ其純量ヲ算定スルコトヲ期シ差向ノ處ハ別表ノ歩合ニヨリ算定スル事

一木綿ヨリ糸ノ巻眞ヲ有スルモノハ出來得ル限リ精査ヲ遂ケ次期ノ協議會ニ其調査表ヲ呈出スル事

一牛革製紙ノ如キ乾濕ノ爲メ重量ニ多少ノ增減アルモノハ實査ノ成績ニ依リ其重量ヲ定ムル事